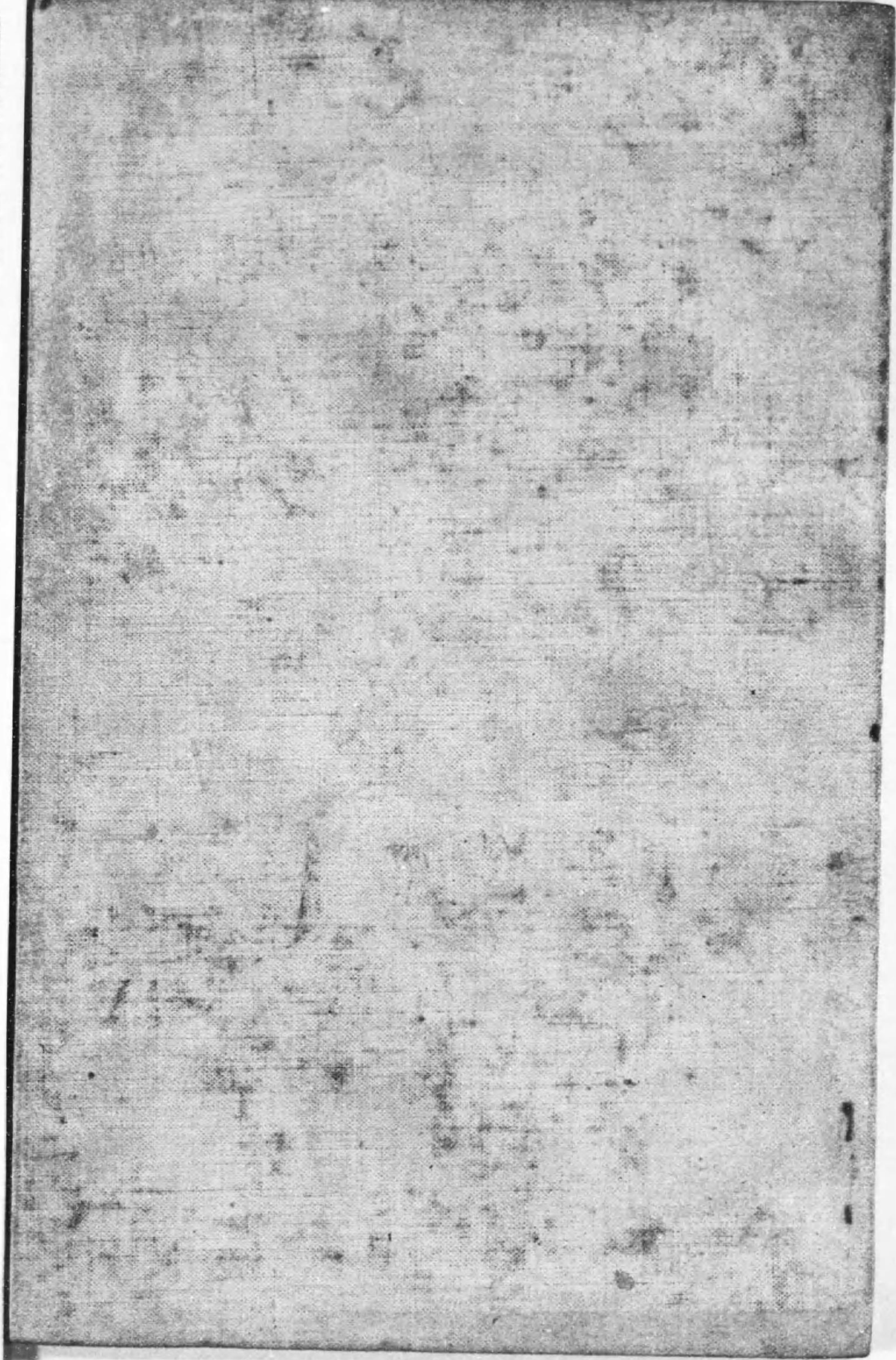
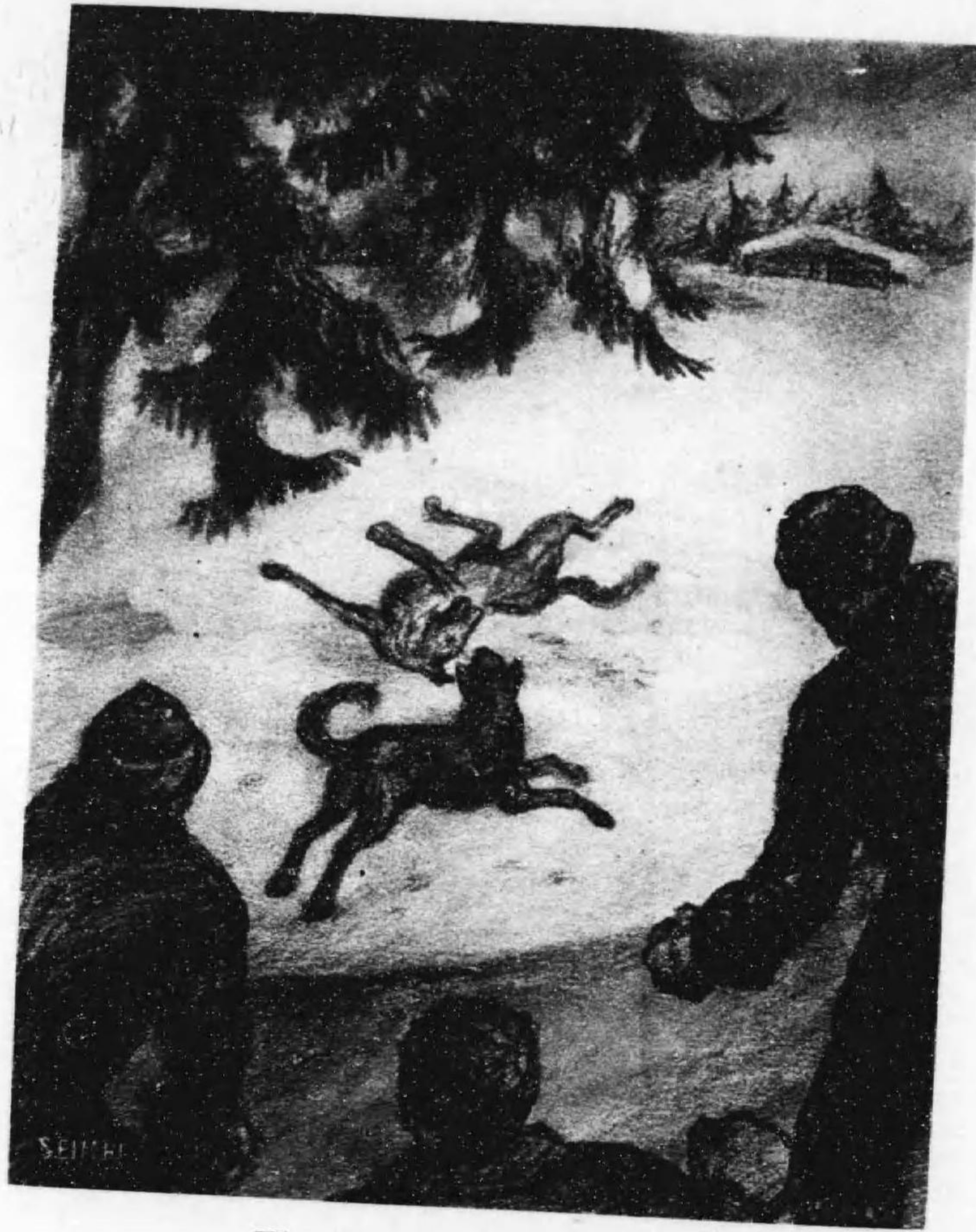




器





The beast in him roared.

特 218
861



外 語 研 究 社 版



THE CALL OF THE WILD

BY

JACK LONDON

WITH

TRANSLATION AND NOTES

BY

K. HANAZONO

CONTENTS

	PAGE
Jack London について	(1—38)
I. Into the Primitive	2
II. The Law of Club and Fang	50
III. The Dominant Primordial Beast	86
IV. Who has Won to Mastership	148
V. The Toll of Trace and Trail	186
VI. For the Love of a Man	246
VII. The Sounding of the Call	298

JACK LONDON につきて

ロンドンは一八七六年一月十二日に、サンフランシスコで生れた。父譲りの頑丈な身体と、冒険者の精神をもつてゐた。彼が、まだ少年の時代に、彼の両親は、Livermore Valley の農場にうつつた。そこで、彼は八歳から十歳まで、労働をした。貧乏で、ろくに本も買へないので、五六冊の本を、穴のあくほど讀んだのである。

彼が十歳の時に、彼の家族は、オークランドへ移り住んだ。彼はここへ来てから、公立図書館の本を、手當り次第に讀んだ。中でも旅行物が好きだつた。彼は新聞賣子として、氷の配達夫として、日曜のピクニツクの場所の掃除人として働いた。かういふ生活は、彼の心のうちでは、彼が讀んだ偉人傳の少年時代と結びついたのである。その間に、彼は桑港灣で、小さな舟をあやつり、泳ぎをも覺えたのである。

オークランドの小學校を十四歳で終へると、一時間十仙で罐詰工場で犬のやうに働いた。數ヶ月の後、彼は鮭漁に働いたり何かした。

かうした生活は、普通の少年の一生をだいなしにしてすふものだが、ロンドンに取つては、さうではなかつた。彼は一つの仕事から、他の一つの仕事へと移つて行つた。一八九三年、彼が十六歳の時、ベーリング海峽で、らつこ船に數ヶ月を送つた。それから歸ると、彼は沖人夫として働いた。この時、彼は、はじめて、彼の文筆に於ける彼の最初の試みをしたのである。彼の母のすすめで、彼は、日本海の颱風を書いて、一地方新聞の

短篇小説募集に應じて、第一等賞を得た。彼が作家にならうと決心したのは、此の成功に基くのである。

その後も、電気工場で、石炭運搬に従事したりしたが、その仕事は、彼の身心を疲らした。彼は、シヤヴェルを棄て、放浪者の生活をはじめたのである。太平洋から、大西洋へ、彼は、米國と加奈陀とをかけて放浪した。浮浪罪に問はれて監獄に入れられたこともあつた。これが、後の作家としての彼を作つたのである。

彼は、再び心を決して、オークランドの中學校へ入つた。彼は一生懸命に勉強した。併し彼は相變らず貧乏ではあつたが、金持の級友の家で開かれるクラブ會に出たりした。きれいなお嬢さんと友達にもなつた。學校の雑誌には、かゝらず、彼の冒険を何かしら書いてゐた。この間も、彼は、勞働して、學費を得てゐた。かくて、彼は中學校の二年の後、加州大學に入學した。併し勞働しながら、大學をやることが、困難であつたため、遂に大學をやめて了つた。

この時、クロナイクの金鑛大發見といふニュースが、彼を打つた。彼は、二十二歳であつたが、北地に向ふ群に加はつたのである。五六人の仲間と、十九日間で、千九百マイルの旅、ユーコン河を船で下つたりした。この間の經驗が、彼の傑作、*The Call of the Wild* を生むこととなつたのである。彼は黄金を得んとする希望を達しなかつたが、彼は彼の傑作を爲す基礎を得たのである。“It was in Yukon I found myself. There nobody talks. Everybody thinks. You get your true perspective. I got mine.”とロンドンに云つてゐる。

一汽船の石炭人夫として働いて、British Columbia に赴いたがまた戻つて來た。折柄、父が亡くなつたので、家族扶養がロンドンの上に落ちた。彼は、何をして働いても、家族を養ふに充

分でなかつた。そこで、また、ほつほつ書きはじめた。すると前よりもいゝ稿料で、いろいろの新聞雑誌で買つてくれるやうになつた。ロンドンは、もう貧乏の苦しみは嘗めなかつた。一九〇三年に *The Call of the Wild* が出ると彼は一躍、一人の作家として、うたはれるやうになつた。一日に、一千語といふ有名な元氣で二十年足らずに五十冊にも及ぶ作物を公けにしたのである。

一九〇二年に彼は、ロンドンの貧民窟を訪問して書いたのが *The People of the Abyss* であつた。新聞特派員として日露戰爭に従軍した。彼の冒險的氣象はいつまでも止まなかつた。第二の夫人 *Charmian London* と共に帆船に乗つて、希望峰をまはつたことがある。その後、彼は小さなスクーターに乗つてサンフランシスコから、太平洋の諸島に航海をし、濠洲に上陸した。

彼が禁酒主義者であつたことも面白い。一九一四年に彼は *グレイブ・デュース* の會社の社長となつた。

加州 *Glen Ellen* に近き、彼の廣大な農場は、美しき *Sonoma Valley* を見下してゐた。彼は一日一千語の勞作の後に、彼は此處で、自然に親しんだ。

彼が一九一六年十一月二十二日、彼の四十一歳の短い一生を閉ぢたのは、此の農場に於てであつた。彼は死んだが、灰にして海に飛ばせといふ生前の希望であつたが、彼の死體は、甕に入れられて、この平和な村を見下す岡の上に、埋められた。その岡には、彼に向つて、「野の呼聲」が聞えてゐたのである。

一九二一年に出た *Mrs. Jack London* の “*Jack London*” 二巻は *チャック・ロンドン* の全面を知るには、最もよき著述である。彼女は此の *Jack London* 第一巻の序文の中にかう書いてゐる。

「よくロンドンはかういつた。「お前なしに、私がゐるといふことは、想像することも出来ない」 “It is beyond my imagining that I should be without you.” また、かうもいつた。「私がさきに逝つたら、私のことを書いてくれ——ほんとうに私を思つてくれるなら」 “If I should go first, Mate Woman, it would be for you to write of me—if you dare be honest.”

「併し兎に角、And, anyway, my dear, I'm going to live a hundred years, because I want to. といふのが、彼のいつもの familiar conclusion であつた」

けれども、あの健康そのものゝやうであつたチャック・ロンドンは四十一歳で死んだのである。彼女はかう書きつゞけてゐる。

「彼れ——friend, lover, husband for a dozen rich years——その、友人であり戀人であり、夫であつた彼れのことを書く、私のペンを指揮するために、彼が今私の前に立つてゐるといふことを信ずることが出来るならば、私はどんなにか嬉しいであらう」

彼女は序文の最後に於て『my Jack London——それは好奇心と大膽、感動性と、女のやうな愛情と直覺と、熱烈な頭腦と自信とをもつた力強い人物であつた「私のチャック・ロンドン」を書かうとしてゐる。そして彼は、何よりも先づ彼れ自身であつたが故に、それはまた、his own Jack London にも、なるのである』と書いてゐる。

「一九〇〇の春、妾の伯母はかう云つた。「私の子供のチャック・ロンドンは、すばらしい青年だが、會つてやつてくれない？」。伯母はロンドンを自分の子のやうに思つてゐたのであつた」と“Jack London”の著者は書いてゐる。

かうして二人は會つたのである。

「伯母のいふ、すばらしいロンドンだわね」と彼女はいつた。「とても上品な午後の訪問者といふところはないわよ」。

Granted (そりやさうよ) と伯母さんは云つた。“I do not think he missed your hardly concealed critical look, my dear. Nothing escapes that boy. And you must remember, with genius, clothing doesn't matter.” (ロンドンは、きつと、あなたがぢろぢろ見てゐたのを知つてゐますよ。あの子は、そんなことを見のがしやしないことよ。そしてね、天才には衣服なんざ、どうでもいゝぢやありませんか) と伯母さんは云つたことである。

ロンドン、全く、ひどい装をしてゐて、水兵のやうな歩き振りをしてゐた。

そして、ロンドンと、彼女とが、桑港のあるレストランで會つたのは、かの桑港の大地震から、六年の後であつたのである。

「チャック・ロンドンは、Socialist London Party の闘士であつた。彼れの Socialism は、非常に戰鬥的のものであつたのである。併し、「チャック・ロンドンはわたくしが會つた人の中で、一番やさしい人だ」と、ある老婦人のいふのを聞いたことがあると Mrs. Jack London は云つてゐる。そして、「私がロンドンと知り會つた最初から私も同じやうな感じに打たれた」と付け加へて書いてゐる。

約婚が出来てからである。彼女は、ロンドンのために、ピアノを弾いてはといふ彼女のすゝめに従つたことゝ、ロンドンを彼女の“den”へつれて行つたことを思ひ出してゐる。その彼女の den は、本や彫刻やらで、いつばいになつてゐた。彼は、音楽、繪畫、乗馬、ダンス等の彼女の娘らしい活動に非常な興味を感じてゐるらしかつたのである。

「私はまだ踊つたことはないんですよ、そんな若い人のするやうなことを習ふ時間がなかつたんです。でも、僕はダンスを見るのは好きです」(I never danced a step in my life. Never seemed to have time to learn those soft, lovely ways of young people. But I like to see dancing) と、ロンドンは顔を赤くしていつたといふのである。

話は、二人が讀んだ其作にうつつたがロndonは、ハーデイ作 Thomas Hardy's *Jude the Obscure* を忽せにしないやうにと、彼女にすゝめたものである。ロndonはハーデイの *Tess of the D'Urbervilles* をまだ手に入れてゐなかつたので、彼女は、それを彼れに貸したと書いてゐる。

それから次に、二人が會つた後に、ロndonから、短篇の原稿の校正刷が、彼女のところへ届いた。此等を讀んだ時に、彼女は大變感心して了つたのである。如何にも、ロndonが、many sided and all-observant であるのに彼女は驚嘆した。

ところが急に不幸が湧いて來たのである。それは、ロndonが、あるベツシー・マツダーン Bessie Maddern といふ婦人と結婚することになつたことだ。結婚してからも、よく二人してチャーミアンたちの家を訪問したりした。チャーミアンは、パークレーに持つてゐた土地を賣つて、ヨーロッパの旅に出た。

ヂヤック・ロndonは、一八七六年の一月十二日にヂョン・ロndonを父とし、フローラ・ロndonを母としてサン・フランシスコに生れたのだ。その日の午後二時に her woman's hour, that is most lonely of all hours known to the human 産氣づいて母親の Flora London の聲は、彼女の最初のそして一人子の泣聲と一緒になつたのである。

ヂヤック・ロndonが生れてから母親は暫らくはよく、乳も

出たか、そのうちに、此の赤子を長く nourish することが出来なくなり、ヂヤック・ロndonは、だんだん thin and blue になつて行つたのである。そこで、父親は、one whose wife had lost her newest born 生れたばかりの赤ん坊をなくした人を發見して、ロndonの wet nurse になつて、乳をやつて貰ひたいと申込んだのである。その女は全くの黒人であつたのである。この黒人の乳母が育てる事により、彼女の essential capacity に於て育てる事になつた子供は white as snow で、exquisitely modelled の、容姿端麗の男の子、ロndonであつたのである。間もなく、ロndonは pink-cheeked になり、eye of violet をかゞやかし、天使のやうな顔をしてゐた。ヂヤック・ロndonはかう書いたことがある。——“... hair was black when I was born, then came out during an infantile sickness and returned positively white—so white that my negress nurse called me ‘cotton ball.’”(私が生れた時は頭髮の毛は黒かつた、病氣をしてゐる間に、また生えて來て、全く白くなつた——それで私の黒人の乳母は、私のことを、綿の鞠と呼んでゐた。)

ヂヤック・ロndonが少年の頃、彼の父は、カリフォルニアのオークランド Oakland の郊外、エメリーヴィル Emeryville の競馬場に近いところに、土地を買つて野菜を作り、第七街とキャンベル・ストリート Campbell Street の通りに、green-goods store (青物店)を開いたのである。

ヂヤック・ロndonの父は貧しい生活をつゞけてゐた。それで彼自身の言葉を用ゐるならば、“no recollection of being taught to read or write.” (讀んだり書いたりすることを教へられたといふ記憶を有つてゐなかつた) といふのである。けれども “could do both at the age of five.” (五歳の時には讀むことも書くことも出来た) といふのである。

ヂヤック・ロンドンが、八歳から十歳までの間、彼の家は Livermore Valley に居た。そこに、彼の傾きかけた一家の最後の農園があつたのである。随つて、此の土地は、ロンドンに取つては、決して、いゝ思ひ出ではなかつたのである。「土地は平坦で周囲にある山地とても、私には、何にも興味はなかつた」とロンドンは思ひ出を語つたといふのである。たゞ、眞黒な身體で、輝いた眼をしてゐた彼れの愛犬のローロ Rollo のことは、時々思ひ出されたりしかつた。十一歳のロンドンは、土地の學校に入つた。こゝで、彼は、他の人格と彼れの最初の争闘に突き當つたのである。彼れの女教師は、彼れを理解しやうともしなかつたのである。彼れの母親は、一度ならず、學校に呼び出されたりしたのである。

彼が十四町目の古き市廳によりかゝれる公立圖書館に通ひはじめたのは、その頃であつた。小さな少年は、眼の筋肉がびくびく動くほどになるまで、ライブラリーのテーブルの上にのしかゝつて本を読んだことである。スモーレット (Smollett) の大冊を借りて、その全部を読んだりした。I read mornings, afternoons, and nights と、ロンドンは書いてゐる。I read in bed, I read at table, I read as I walked to and from school, and I read at recess while the other boys were playing. と彼は書いてゐる。彼は、十二歳の時に Wilkie Collins の The New Magdalen を読んだと云はれてゐる。

一九一六年十一月二十六日は、ロンドンの最後の日である。

彼は、紫色に、顔ははれ上つて、力なく、息せはしく、たしかに毒を飲んだらしく、知覺を失つて、寝椅子の上に横はつてゐた。ロンドン夫人は驚いてロンドン所蔵の本の中から「應急手當」の本を開き、最も強いコーヒーをふくませたのである。

そしておいて醫者を迎へたのである。

醫者が來て、夫人の取つた應急手當の正しかつたことを告げ更に適當の手當をした。

Man! Man! Wake up! The dam has burst! Wake!
Man! Wake!

(起きた! 起きた! 土手が崩れた!)

といつて醫者は叫んだ。ロンドンの顔には何かしらびくびくと動くものがあつたが、結局はだめだつた。

夫人は聲を限りに

Mate! Mate! You must come back! Mate! You've got to come back! To me! Mate! Mate!

と叫んだ。微笑が浮んだ。生命へのさよならか。愛のしるしか。

彼の死後に世話をしてゐた一人の日本人がゐた。それは「關根」と呼ばれてゐた。その日の夕方、ロンドンの眠りの場所は關根によりて、きれいに秩序に置かれてゐた。

近くの人たちは、驚いて弔問に來た。作家の死のあまりにも急なのに驚いた。

金曜の日に、夜明け方、棺車は岡を上つた。その日、關根は夫人に、一束の鍵と一葉のノートを渡した。彼女はふるへる手で開いて見ると、

"Your speech was silver, your Silence now of golden
—That was all—It was my good-bye."

とある。「私が代筆したのです」と關根は云つた。

テーブルの上には未稿の原稿があつた。その一つに彼女は目を止めた。

"My life cannot be long enough to mend the broken things—
to carry on the tasks that are left for me."

(私の生命は、破れたるものをつくらうだけ長くあることは

出来ない——私に残された仕事をするだけ長くあることは出来ない)

オークランドで、棺車を迎へた一人は、中田義松であつた。彼は關根の前に、彼のところで働いた日本人であつた。

June 25, 1914 .

“Dear Ralph Kasper,——. . . I have always inclined toward Haeckel's position. In fact, 'incline' is too weak a word. I am a hopeless materialist. I see a soul as nothing else than the sum of the activities of the organism plus personal habits, memories, experiences, of the organism. I believe that when I am dead, I am dead. I believe that with my death I am just as much obliterated as the last mosquito you or I smashed.

“I have no patience with fly-by-night philosophers such as Bergson. I have no patience with the metaphysical philosophers. With them, always, the wish is parent to the thought, and their wish is parent to their profoundest philosophical conclusions. I join with Haeckel in being what, in lieu of any other phrase, I am compelled to call a positive scientific thinker.”

彼がヘツケルの徒であつたことが分る。彼は、唯物主義者であつた。彼は靈魂とは、オーガニズムの活動とオーガニズムの個人的習慣、記憶、經驗との總量であることを信じてゐた。

彼の bedside table にあつた物の一つに “Japanese Life, Love and Legend” があつた。

一九一六年、ある日、ロンドンが彼女にいつた言葉——

“Mate Woman, Mate Woman——you've all I've got——the last straw for me to cling to——my last bribe for living. You know. I have told you before. You must understand. If you don't understand, I'm lost. You're all I've got.”

ロンドン二十九歳の時、日露の戦端が開かれやうとした。この時、サンフランシスコ・エタザミナー (San Francisco Examiner) が、ロンドンに従軍記者として、活動してくれないかと持ちかけた。そして、ロンドンは、之を承諾すると、エタザミナーのビルディングの屋根にはロンドンの寫眞が、麗々しく出たものである。彼が、乗つた船はサイベリア丸であつた。彼は “Sail to-day for Yokohama. Am going for Hearst.” と、一月七日の日付で彼は書いてゐる。

彼の船中でしたゝめた手紙は興味多い。

S. S. Siberia.

January 13, 1914.

“Somewhat weak and wobbly, but still in the ring. Come down with a beautiful attack of la grippe. Of course, didn't go to bed with it, but spent the time in a steamer chair, for one day half out of my head. And oh, how all my bones ache even now! And what wild dreams I had!

“Honolulu is in sight, and in an hour I shall be ashore mailing this, and learning whether or not there is war.

“. . . Am, grippe excepted, having a nice trip. The weather is perfect. So is the steamer. Sit at the captain's table, and all the rest—you know. . . .”

彼は船中で、足を痛め、横濱に着いても、なほ足の痛みを感じて居た。彼は直ちに、神戸に急ぎ、そこから、朝鮮へ向つた

のである。下の關で、町の景色を三枚ばかりバチンとやつて、日本の巡査につかまつたりした。として小倉に送られ裁判の結果、罰金五圓、カメラは没收された。かくして、彼の朝鮮に向けての出發は、遅延したのである。彼は、船の都合がつかず仕方なしに、釜山行の小汽船で、三等客となつた。そして甲板に寝て、日本海を渡つた。

朝鮮につくと、二月の寒さに、土地は雪で蔽はれて居た。彼は時々、船で負傷した足の痛みをこらへたのである。京城には一九〇四年の三月十八日に着いた。

いよいよ、日本の第一軍に従つたが、彼は、ほんとうの仕事の出来ないのに、いらだつた。彼の送る原稿や、寫眞が、果してエクザミネーターに届いてゐるか否かも知らなかつた。

たゞ、彼のキャンプは、美しい松林の間で、この山のをだやかな傾斜も眼を楽しました。

彼は一九〇五年に *The Game* を出してから、*White Fang* の構想のために頭を悩ましてゐた。

十二月六日日付の彼の手紙の一つに、——「ホワイト・フアンダは、*Call of the Wild* の反對の終局から初まる。devolution でなしに、evolution だ。decivilization の代りに、civilization だ。これを、自分は *Call of the Tame* とは名づけぬつもりだ。Call of the Wild とは全く異つた名をつけるつもりだ」

ロンドンの作物は、社會主義者の中の貴族主義の人たちを喜ばした。ロンドンの傾向も、それに近かつた。彼が、*Ruskin Club* に對して、宣言したところによれば、

“I am a socialist, first, because I was born a proletarian and early discovered that for the proletariat socialism was the only way out; second, ceasing to be a proletarian and

becoming a parasite (an artist parasite, if you please), I discovered that socialism was the only way out for art and the artist.”

このラスキン・クラブなるものは、桑港の intellectual aristocracy of the socialists から成立つてゐた。

ある日、ロンドンは、カリフォルニア大學の學生の爲めに、一場の講演を依頼された。“choose your own subject—anything at all” といふことで、彼は、はじめた。

“I received a letter the other day. It was from a man in Arizona. It began, ‘Dear Comrade.’ It ended, ‘yours for the Revolution.’ I replied to the letter, and my letter began, ‘Dear Comrade.’ It ended, ‘Yours for the Revolution.’”

この冒頭は、學生を驚かした。總長の Dr. Benjamin Ide Wheeler は、困つたといふ顔付をした。それから、滑稽な事は、彼が、英語學の教授の間違つてゐること、今でも學校で教へるところのものは、such antiquated authors as Macaulay, Emerson and others of the same school (マコーレー、エマソン、同じやうな古くない連中ばかり) であることを指摘すると、聞いてゐた一人の教授 Dr. Gayley は微笑しながら、

“Perhaps you are not aware, Mr, London, that we are using your own ‘Call of the Wild’ as a text-book in the University?”

と云つたことである。ロンドンは、他の者と笑つて了つた。

チャツク・ロンドンの *The Call of the Wild* は、「野の誘惑」である。*The Call* は *The call of mountains* (山の誘惑) などの意味をもつてゐる。*The Wild* は *to cross the wild* (野

を横ぎる)などの wild である。けれども、堺枯川の「野性の呼聲」の譯語に妥當性を見とめたので、それを用ゐることにした。つまり、桑港に近き家に飼はれてゐた Buck といふ犬が、人に盗まれて、北方の砂金採取の地方に連れて行かれ、境遇の相異から、次第に野性的本能が復活して來ることを書いたのが此の一篇であるところから、「野性の呼聲」の譯語は、動かないものと考へる。Call は「誘惑」のことではあるが、それは日本語として考へた場合で、そのほんとうの心は「呼聲」である。そして、バツクには、屢々山の「呼聲」が耳に聞えたのである。

彼はその呼聲に、懐しさを感じる。彼は山中に深く入つて、狼の少年と戯れたり、おほじかを殺したりしたが、その間に、彼の最後の主人が、インディアンの爲めに殺され、彼は遂に狼の群に入つて、祖先の生活に歸る。

十九世紀の終り方に、アラスカの砂金が發見され、我れも我れもと、北地に向つた。そのために、Forty Mile Creek とか Circle City のやうな Settlements が出來たりした。クロンダイクの地方に砂金が發見されると、黄金を求むる人の群れが彼から後を追うた。The Klondike といふ名は、The Yukon の支流 the Klondike River からその名を取つたものだ。この地方に向ふ人の流れを集めて、ドーソンの町が出來た。サンフランシスコから、船で北に向ひ、スカグエーで上陸し、それから北西に向ひ、有名なホワイトバスの峠を越えると、たくさんの湖水が連続して、ユーコン河の源となる。この湖水と川とが凍つた上を犬に曳かした橇で下ると、ドーソンに到着するのだ。ドーソンは北緯六十度に位してゐる。

この小説にあるクロンダイクは勿論今から三十年も前のクロンダイクである。今日の汽車汽船の便あるクロンダイクではな

いのである。この作物に取扱はれてゐる光景の多くは、クロンダイク道の終りのスカグエーと、ユーコン地方の商業上の中心地ドーソンとの間に置かれてゐる。

此の作物の主人公であるバツクといふ犬は、スカグエーからドーソンへ、そしてドーソンからスカグエーへと、この旅を二度くり返してゐる。第三度目の旅の時、彼はジョン・ソントンの保護の下に、ドーソンを根據地として、其處此處に、ソントンと共に、さまよひ、遂に人跡未到の山中に入つて了ふのである。

上部カナダ及びアラスカ地方で、用ゐられる犬は、主として huskies である。これは、北極狐に似てゐる、砂金發見と共に、人々が北地に向ふやうになり、mastiff とか Saint Bernard などが透られるやうになつた。此の作品の中のバツクは、Saint Bernard と Scotch shepherd との雜種であつた。

この「野性の呼聲」と反對に暗い蝦夷松の森が水路の兩側を蔽うてゐる此地に生れた狼の子が、樞犬となり、闘犬となり、遂に南國に歸つて飼犬になる歴史を書いたのが、ロンドンの White Fang (一九〇六年) である。White Fang には、一層よく作者の人世觀なり、社會觀なりが示されてゐる。

ホワイト・フアングは人間の手の中に、彼のための天國が含まれてゐることを知らなかつた。彼は手といふものに疑を抱いてゐた。その手からは肉を貰ふこともあるが、その手から害を受ける場合の方が多かつた。手は避けるべきものであつたのである。ホワイト・フアングはいろいろの經驗から、次第に所有權の法則と、その所有權を防衛する任務を學んだのである。

この「野性の呼聲」と「ホワイト・フアング」とを讀めば、ロンドンの思想を、大體つかむことが出來ると考へる。

ロンドンの著作表の第一に置かれる *The Son of the Wolf* (一九〇〇年) からして、彼は、狼の進化そのものに、興味をもつてゐた。

War of the Classes は一九〇五年に出た *Sociological essays* であるが、その中に、*The Question of the Maximum* や *How I Became a Socialist* の如き論文がある。

一九〇七年に出た *Before Adam* は、我々の祖先の生活を描いて、ともすれば、忘れがちな、長い人間の生活の歴史に、我々をして直面せしむる。我々が、*our tree life* を *life on the ground* に變へる時代のことだ。「木から落ちることは脅威であつたのだ、多くのものは、かくして生命を失つたのだ」(with them, being tree-dwellers, the liability of falling was an ever-present menace. Many lost their lives that way...), 我々はかうした過去を持つたのだ。此等は、我々の祖先だ。その歴史は、我々の歴史だ。その時代の人間は、たゞ具體的のことを話した。たゞ我々は具體的のことを考へたのだ。(we talked only concrete things, because we thought only concrete things)

BIBLIOGRAPHY OF JACK LONDON

1. *The Son of The Wolf* (Collected Stories). Houghton, Mifflin Company, April 7, 1900; Mills and Boon, Ltd., London; under the title "An Odyssey of the North."

The White Silence. *The Priestly Prerogative.*
The Son of the Wolf. *The Wisdom of the Trail.*
The Men of Forty Mile. *The Wife of a King.*

In a Far Country. *An Odyssey of the North.*
To the Man on Trail.

2. *The God of His Fathers* (Collected Stories). M'Clure, Phillips and Company, May 1901; Mills and Boon, Ltd., London.

The God of his Fathers. *Jau, the Unrepentant.*
The Great Interrogation. *Grit of Women.*
Which Make Men Re- *Where the Trail Forks.*
 member. *A Daughter of the Aurora.*
Siwash. *At the Rainbow's End.*
The Man with the Gash. *The Scorn of Women.*

3. *A Daughter of the Snows* (Novel). J.B. Lippincott Company, October 1902; Mills and Boon, Ltd., London.

4. *Children of the Frost* (Collected Stories). The Macmillan Company, October 1902; Mills and Boon, Ltd.,

In the Forests of the *The Sickness of Lone Chief.*
 North.
The Law of Life. *Keesh, the Son of Keesh.*
Nam-Bok the Unveraci- *The Death of Ligoun.*
 ous.

The Master of Mystery. *Li Wan, the Fair.*

The Sunlanders. *The League of the Old Man.*

5. *The Cruise of the Dazzler* (Juvenile). The Century Company, September 1902; Mills and Boon, Ltd., London,

6. *The Call of the Wild* (Novel). The Macmillan Company, July 1903; William Heinemann, London; Leipzig, Bernhard Tauchnitz.

7. The Kempton-Wace Letters. (A series of Philosophical Letters on Love. Written in collaboration with Anna Strunsky.) The Macmillan Company, May 1903; Mills and Boon, Ltd., London.

8. The People of the Abyss (First-hand observation of the East End of London). The Macmillan Company, November 1903; Isaac Pitman and Sons, Ltd., London.

9. The Faith of Men (Collected Stories). The Macmillan Company, April 1904; William Heinemann, London.

A Relic of the Pliocene. The One Thousand Dozen.

A Hyperborean Brew. The Marriage of Lit-Lit.

The Faith of Men. Bartard.

Too Much Gold. The Story of Jees-Uck.

10. The Sea Wolf (Novel). The Macmillan Company, November 1904; William Heinemann, London.

11. War of the Classes (Sociological Essays). The Macmillan Company, April 1905; Mills and Boon, Ltd., London.

The Class Struggle. A Review.

The Tramp. Wanted: A New Law of Development.

The Scab. How I Became a Socialist.

The Question of the Maximum.

12. The Game (Novel). The Macmillan Company, June 1905; William Heinemann, London.

13. Tales of the Fish Petrol. The Macmillan Company, November 1905; William Heinemann, London.

White and Yellow. Charley's Coup.

The King of the Crooks. Demetrios Contos.

A Raid on Oyster Yellow Handkerchief.

Pirates.

The Siege of the Lancashire Queen.

14. Moon-Face, and Other Stories. The Macmillan Company, September 1903; William Heinemann, London.

Moon-Face: A Story of a Mortal Antipathy.

The Minions of Midas. The Leopard Man's Story.

Local Colour. The Shadow and the Flash.

Amateur Night. Planchette.

15. Scorn of Women (Play). The Macmillan Company October 1903.

16. White Fang (Novel). The Macmillan Company October 1906; Methuen and Co., Ltd., London.

17. Love of Life, and Other Stories. The Macmillan Company, September 1907; Mills and Boon, Ltd., London.

Love of Life. The Unexpected.

A Day's Lodging. Baron Wolf.

The White Man's Way. The Sun Dog Trail.

The Story of Keesh. Negore, the Coward.

18. Before Adam (Novel). The Macmillan Company, February 1907; Mills and Boon, Ltd., London.

19. The Road (Tramping experiences). The Macmillan Company, November 1907; Mills and Boon, Ltd., London.

Confession. The Pen.

Holding Her Down. Hobees that Pass in the Night

Pictures. Road-Kids and Gay-Cats.

"Pinched" Two Thousand Stiffs.

Bulls.

20. The Iron Heel (Novel). The Macmillan Company, February 1908; Mills and Boon, Ltd., London.

21. Martin Eden (Novel). The Macmillan Company, September 1903; William Heinemann, London.

22. Lost Face (Collected Stories). The Macmillan Company, March 1910; Mills and Boon, Ltd., London.

Lost Face.	Flush of Gold.
Trust.	The Passing of Marcus O'Brien.
To Build a Fire.	O'Brien.
That Spot.	The Wit of Porportuk.

23. Revolution (Sociological Essays and Others). The Macmillan Company, March 1910; Mills and Boon, Ltd., London.

Revolution.	The Gold Hunters of the North.
The Somnambulists.	Form Gordeeff.
The Dignity of Dollars.	These Bones Shall Rise Again
Goliath.	The Other Animals.
The Golden Poppy.	The Yellow Peril.
The Shrinkage of the Planet.	What Life Means to Me.
	The House Beautiful.

24. Burning Daylight (Novel). The Macmillan Company, October 1910; William Heinemann, London.

25. Theft (Play). The Macmillan Company, November 1910.

26. When God Laughs (Collected Stories). The Mac-

millan Company, January 1911; Mills and Boon, Ltd., London.

When God Laughs.	Make Westing.
The Apostate.	Semper Idem.
A Wicked Woman.	A Nose for the King.
Just Meat.	The Francis Spaight.
Created He Them.	A Curious Fragment.
The Chinago.	A Piece of Steak.

27. Adventure (Novel). The Macmillan Company, March 1911; Mills and Boon, Ltd., London.

28. The Cruise of the Snark (Articles). The Macmillan Company, June 1911; Mills and Boon, Ltd., London.

Foreword.	Typee.
The Inconceivable and Monstrous.	The Nature Man.
Adventure.	The High Seat of Abundance.
Finding One's Way About.	Stone-Fishing of Bora Bora.
The First Landfall.	The Amateur Navigator.
A Royal Sport.	Cruising in the Solomons.
The Lepers of Mo'okai.	Beche de Mer English.
The House of the Sun.	The Amateur M.D.
A Pacific Traverse.	Backword.

29. South Sea Tales. The Macmillan Company, October 1911; Mills and Boon, Ltd., London.

The House of Mapuhi.	The Heathen.
The Whale Tooth.	The Terrible Solomons.
Makui.	The Inevitable White Man.
"Yah! Yah! Yah!"	The Seed of M'Coy.

30. A Son of the Sun (Collected Stories). Doubledy, Page and Company, 1912; Mills and Boon, Ltd., London.

A Son of the Sun. A Little Account with Swi-
thin Hall.

The Proud Goat of

Aloysius Bankburn. A Goboto Night.

The Devils of Fuatino. The Feathers of the Sun.

The Jokers of New The Pearls of Parlay.
Gibbon.

31. The House of Pride (Collected Stories). The Macmillan Company, March 1912; Mills & Boon, Ltd., London.

The House of Pride. Chun Ah Chun.

Koolau the Leper. The Sheriff of Kona.

Good-bye, Jack! Jack London, by Himself.

Aloha Oe.

32. Smoke Bellew Tales. The Century Company, October 1912; Mills and Boon, Ltd., London. In two volumes entitled "Smoke Bellew" and "Smoke and Shorty."

The Taste of the Meat. The Story of the Little Man.

The Meat. The Hanging of Cultus George.

The Stempede to Squaw The Mistake of Creation.
Creek.

Shorty Dreams. A Flutter in Eggs.

The Man on the Other The Town-Site of Tra-Lee.
Bank.

The Race for Number Wonder of Woman.
Three.

33. The Night Born (Collected Stories). The Century

Company, February 1913; Mills and Boon, Ltd., London.

The Night Born. Bunches of Knuckles.

The Madness of John War.

Harned.

When the World was Under the Deck Awnings.

Young.

The Benefit of the Doubt. To Kill a Man.

Winged Blackmail. The Mexican.

34. The Abysmal Brute (Novel). The Century Company, May 1913; George Newnes, Ltd., London.

35. John Barleycorn (Novel). The Century Company, August 1913; Mills and Boon, Ltd., London.

36. The Valley of the Moon (Novel). The Macmillan Company, October 1913; Mills and Boon, Ltd., London.

37. The Strength of the Strong (Collected Stories). The Macmillan Company, May 1914; Mills and Boon, Ltd., London.

The Strength of the The Enemy of All the World.

Strong. The Dream of Debs.

South of the Slot. The Sea Farmer.

The Unparalleled Samuel.

Invasion.

38. The Mutiny of the Elsinore (Novel). The Macmillan Company, September 1914; Mills and Boon, Ltd., London.

39. The Scarlet Plague (Novel). The Macmillan Company, May 1915; Mills and Boon, Ltd., London.

40. The Star Rover (Novel). The Macmillan Company,

October 1915; Mills and Boon, Ltd., London; under the title "The Jacket."

41. The Acorn Planter (Play). The Macmillan Company, February 1916; Mills and Boon, Ltd., London.

42. The Little Lady of the Big House (Novel). The Macmillan Company, April 1916; Mills and Boon, Ltd., London.

43. Turtles of Tasman (Collected Stories). The Macmillan Company, September 1916; Mills and Boon, Ltd., London.

Turtles of Tasman. The Prodigal Father.

The Eternity of Forms. The First Post.

Told in the Drooling Fins.

Ward.

The Hobo and the Fairy. The End of the Story.

(This was the last book published before Jack London's death on November 22, 1916.)

44. The Human Drift (Articles arranged by Jack London for publication shortly before his death, and published posthumously). The Macmillan Company, February 1917; Mills and Boon, Ltd., London.

The Human Drift. Four Horses and a Sailor.

Nothing that Ever A Classic of the S. a.

Came to Anything.

That Dead Men Rise up A Wicked Woman (Curtain Never. Raiser).

Small-Boat Sailing. The Birth Mark (Sketch).

45. Jerry of the Islands (Novel). The Macmillan Company, April 1917; Mills and Boon, Ltd., London.

46. Michael, Brother of Jerry (Novel). The Macmillan Company, November 1917; Mills and Boon, Ltd., London.

47. The Red One (Collected Stories). The Macmillan Company, October 1918; Mills and Boon, Ltd., London.

The Red One. Like Argus of the Ancient Times.

The Husky. The Princess.

48. On the Makaola Mat (Collected Stories). The Macmillan Company, September 1919; Mills and Boon, Ltd., London; under the title of "Island Tales."

On the Makaola Mat. The Water Baby.

The Bones of Kahekili. The Tears of Ah Kim.

When Alice Told her The Kadaka Surf.

Soul.

Shin-Bones.

49. Hearts of Three (Novel). The Macmillan Company, 1920; Mills and Boon, Ltd., London.

Other collections, such as War Notes (Japanese-Russian, and Vera Cruz, 1914) and Prize-Fight articles, will be issued in course of time.

ロンドンを研究せんとする人々のために、こゝにロンドンの著作表をかかしておいた。この中で、The Call of the Wild は、東京市神田区錦町三ノヒ、北星堂から、富田義介氏註の教科書本が出てゐる。なほ、叢文閣から、堺利彦氏譯「野性の呼聲」が出てゐる。Before Adam も日本譯がある。White Fang は、堺利彦氏の譯が改造文庫第二部第五十三篇として出版されてゐる。The House of Pride の中に、Jack London の自傳がある。

私が Jack London が好きなのは、石川啄木氏や土岐善麿君

がやつてゐた雑誌に London の短篇を譯したり、その時分の早稲田文學に同じく短篇を譯したりした頃からであるから、ずる分古いわけだ。それは日本の無産派の文藝などの擡頭以前のことだ。London は、冒険好きの男だ。米國の西部地方を放浪したり、らつこ船に乗つて北の方の海に行つたり、南洋の嶋で暮らしたり、英京倫敦の貧民生活を研究したり、波頭場人足になつて見たり、Alaska の Gold rush の群に加はつたりした。彼は人生の大學に學んだのだ。

ロンドンの作物には、必ず彼の哲學がある。そしてそこには、眞剣なる彼を見るのである。ロンドンの作品は何れも貧しきもの無智なものに對する深刻なる同情を壓抑してゐる。その短篇の一つ、A Curious Fragment に於て、作者は、「労働者が讀むことが出来、書くことが出来る時には、——残らず強くされる。その時こそ、彼等はその力を用ゐて束縛を破り最早其處には主人も奴隸もないのだ」と云つてゐる。

ロンドン は 1876 年に桑港に生れ、大正五年に自殺した。彼は日本に來たこともある。けれどもそれは作家としてではなく、1892年に水夫となつて船に乗込んで日本に來たのである。日露戦争の時には、a war correspondent として従軍をした。

彼の作物の傾向が漸く世界に認められるやうになつた時、彼は American Gorky と呼ばれるやうになつたのである。1914年には軍事通信員として Mexico に赴いた。1916年十一月二十二日彼は自殺した。自殺の原因については少しも明かでないが、彼の love of life は次第になくなり、pessimistic になり、てうど芥川龍之介の死のやうに、彼は人生に倦みつかれた時に、自からその四十一年の一生を斷つたのである。

彼の作品のうちには、The Call of the Wild や White Fang や Before Adam や、The Sea Wolf や Martin Eden や

Burning Daylight などがあるが、この中で The Call of the Wild は最もすぐれた作品なのである。この作品には堺枯川の譯がある。そしてその「あとがき」に有島武郎氏は氏が、「札幌で英語の教員をしてゐた頃不圖思ひ附いて教科書に使用したものだつた」と、「無學な、いゝ加減な英語の教員であつたけれども、この書物を教科書に用ひた一年だけは有島武郎君(優等ブロークン)も大に沾券を上げたやうだつた」といふやうなことを書いてゐる。

實は、私がまだ學校を出て Japan Times に居た時分に、最上梅雄氏や岩堂全智氏(その頃は岩堂保氏といつてゐた)などと雑誌をやつたことがあつたが、その時、この The Call of the Wild をアメリカから取寄せて希望者に分つたことがある。The Call of the Wild の出版は 1903 年であるが、その時は何でも大正元年頃即ち 1912 年頃であつた。堺枯川氏の譯「野性の呼聲」が一冊の本となつたのは、大正八年である。かういふ長い間、The Call of the Wild は、多くの讀書家に讀まれたのである。そして、昭和三年には、堺枯川の「野性の呼聲」の普及版が出たほどに、この本はかたく多くの人の心をつかんでゐるのである。今度英文學社から「英文名著全集」が出るにあたり、私は乞はるゝまい、特にこの書の翻譯を選んだのである。

The Call of the Wild の英文版は、London, William Heinemann のものがある。また The Macmillan Company (1927) 發行のものもある。これは The Macmillan Pocket Classics の一つで、Theodore C. Mitchill の introduction と notes とがある。日本では、富田義介氏がこの Mitchill の註を土臺にした教科書が、神田北星堂から出てゐる。今では高等學校大學の教科書としても The Call of the Wild は、ひろく讀まれてゐる。

Mitchill もかういつてゐる。“By General consensus his best piece of writing was “The Call of the Wild.”

この小説の舞臺となれるところは、Alaska の地方で、十八世紀の末に、アラスカに砂金が発見されて、多くの人がある採りに集つたその事でも Klondike といふ地方が有名であつた。その時分の光景は Chaplin の Gold Rush といふ寫眞を見た人は、まざまざとした想像をもつてゐることと思ふ。桑港で飼はれてゐた Buck といふ犬が、この地方に連れて行かれることになり次第に残虐な自然と人生との間に自づからを見出して、遂に野性の animality が呼び戻され、遂に他の凡ての荒犬を征服して、支配者となることを書いたもので、甚だ興味ある一つのすぐれたる story である。他の一つの作 White Fang には狼の子が人間の愛を感じる話で、まさにこの作の姉妹作である。

私は、こゝに有島武郎氏のヂヤツク・ロンドンに就ての手記を加へたい。これは塚枯川氏譯「野性の呼聲」のあとがきとなつてゐるものである。

「この書物は私が札幌で英語の教員をしてゐた頃不圖思ひ附いて教科書に使用したものだつた。元來私は英語を教へてゐたけれども何等語學の素養があるのではなし、さうかと云つて英文學に就ても嘗て組織的な研究をした覚えはなし、外國から日本に歸つて來ても、使ひ所がないから、英語の意味位が曲りなりにも取れるのでその方の教師でもさせてやらうと母校の先輩が世話をして教師にしてくれたのだから、愈教師になるとまごついてばかりゐた。それまで讀んでゐた書物と云つても物好きに任せて自分が面白いと思ふものだけを選び好みをして亂讀したので、英文學に對して系統の立つた智識と云つては皆無

だつた。教科書一つ選ぶと云ふ事になつてもその選擇には立派な學者の思ひも寄らぬやうな下らない心配をしなければならなかつた。長過ぎては一年間に講義がし切れない。短過ぎては時間が餘つてしまう。面白過ぎては學生が話の方に氣を取られて、肝心な語學の方をおろそかにする。つまらな過ぎては英語そのものに愛憎をつかす。やさし過ぎては學生が教師を馬鹿にする。むづかし過ぎては教師自身がまごついてしまう、その邊に過不及のない教科書を尋ね出さうとするのは、無學なる私に取つては容易ならざる苦心だつた。私が退職する時學生達が送別會を開いてくれたのはいいがその席上で『武郎君は Broken なり』と眞正面から思ひ切つた送別の辭を放けつけて閉口するより仕方がなかつた。こんな下手糞な、無學な、いゝ加減な英語の教員であつたけれども、この書物を教科書に用ひた一年だけは有島武郎君（優等ブローケン）も大に沾券を上げたやうだつた。學生は私の時間を待ち遠しがつた。講義が済むと、極度の緊張がゆるんだ時に發せらるゝ溜息がそこらから聞えた。教科書の題名から思ひ附いたワイルド會といふものが寄宿生の中に出來あがつた。私はかうして大分面目を施す事が出來た。然しこれは私が面目を施したといふよりもヂヤツク・ロンドン氏が面目を施してゐるのだ。私は人の禪で勝相撲を取つて喜んでゐた譯なのだ。私の功績といふものを強ひて擧げるならこの書物を教科書に採用したといふ點位なものだつた。所が何もかも白狀すれば私はロンドン氏の著書を涉獵して、その中から教科書としての條件を具備してゐるが故にこの書物を選んだ譯ではなく、ロンドン氏の著書を手にしたのはこの書物が最初で、今までの所では又最終なのだ。ふと廣告文か何かで氣が附いて私はこの書物を米國から取寄せて讀んで見た。而して是れはいゝ物だと思ふとすぐ教科書に決めてしまつた譯なのだ。だからロン

ドン氏がどんな偉い文學者なのか、どんな偉くない文學者なのか、ちつとも——と云つては少し僞愚的かも知れないが、大方は知らなかつた。今度この書物に添へられる堺君の書いた小傳を讀んで始めて知つた位なものだ。

「然し兎に角この書物が學生に與へた印象の甚大だつた事は争はれない。後年私が教員をやめて東京に住まうやうになつてから、一日偶然市岡猛君と街頭で出喰はした時、市岡君は二三日内に私を訪ねると云つてゐたが、果してやつて来て、あの書物を読んでから自分の人生觀が一變した事を感じるので、忙しい間から全部を譯了してしまつた。その中清書して送るから見て見ろとの事だつた。果して大部な原稿が私の手許に届いて來た。而して一人の農學士をしてこれだけの見當違ひの勞を惜しまぬまで熱しさせたロンドン氏の力に感心しながら、私は一通り眼を通した。私は又市岡氏の熱意に感じて何んとかして是れを市場に出したいものと思つた。二三の書店に相談して見たけれども何しろ文壇には無名の市岡君の事だから引受けようとする人はなかつた。で、その原稿はそのまゝになつて私の手許に埋まつてゐた。その中『中外』で堺君がその譯を發表されるやうになつた。私はそれが完成されぬ中に早く市岡君の方を纏めたいと少しやきもきして見たけれども、そのやきもきのしかたが少しだつた故か段々おくれてしまつた。尤も市岡君の譯はまづい(農學士でまづいと云はれたつて不名譽ではないと思ふ)。それには大分私の責任もある。私の怪しい譯のつけ方が累をなしてゐるに違ひない。それを訂正するのはこれも白狀すると私には面倒臭かつた。

「その中に堺君の翻譯が出來上つてしまつた。而して邂逅の機會に市岡君の話が出ると、堺君が是非自分のものと比較したいと云はれるのでお貸したら、君の序文にもあるやうに多少參

考になつたとの事である。市岡君の譯に對して責任を分たねばならぬ私はそれで大に満足を感じた。而して市岡君の熱心を記念する爲めに堺君の書物の何處かに市岡君の事を明記するやうに御願ひしたら快諾して下さつた。市岡君。君もそれで満足してくれるだらう。君のより解り易い而して手馴れた堺君の譯が出る以上は、この書物の内容を一般の讀書人と享樂したい君の志は達成される事になるのだから。」

此の物語の面白さは、勿論、犬が野性にかへるといふところを見出したのが一つであるが、他の一つは、舞臺が雪の積む北地で、その光景が、たまたま我々の心を打つのである。このユーコンの道が、今はどうあらうか。私はこゝに、最近ロンドン・タイムスに出た一文を掲げておきたいと思ふ。この文も、非常に興味ある記述である。

ALASKA AND THE YUKON

A Trip Today Over the Trails of Ninety-eight

By a Correspondent

To visit Alaska, to go over the White Pass and along the edge of Lake Bennett, thence to White Horse, and on by steamer down the Yukon to Dawson, is now possible with less personal inconvenience to the traveller than would, perhaps, be involved in a trip from London Bridge to Margate and back by the Royal Sovereign. Few English people—but many Americans—seem to realize this. I was the only

Englishman on board the Princess Charlotte when she left Vancouver for Skagway at end of last July. Nine out of ten of my fellow travellers were Americans, and the remainder Canadians. This did not lessen the pleasure of the journey. It is true that my curious English accent amused the Americans. It is also true that I suffered a distinct shock when a friendly American, wishing to advise me that I should leave my delicate split-cane fishing rods at Skagway Station, told me to "check the fishing poles at the Deepot."

A Marvellous Journey

Incidents like this, however, are the very spice of such a journey. And what a journey it is! A thousand miles in the waters of the Pacific, and only a few hours in the open sea: the remainder through straits and land-locked sealagoons, with endless mountain ranges stretching out into the mist on either side. As we got farther North, more and more of the mountains were snow-capped, and by the third day glaciers filled the hollows. Of these glories and wonders, guide books and pamphlets tell in the authentic language of their kind, but of the Taku Glacier I must say a word. At the head of a bay this glacier, at least a mile in width, and stretching back inland for 90 miles or more, comes down to the sea in a jagged wall of ice, 80 ft. or 100 ft. in height. When we approached it, the sky was grey and cloudy, but the colour of the ice as one looked into it at close quarters was a dark saxe blue. It seemed as though a cloudless sky were held

here for ever in cold storage. When we were perhaps a quarter of a mile away, a vast pinnacle broke off and crashed into the sea with a booming, rending sound. This happens intermittently all through the summer months and the surrounding sea is consequently full of miniature ice-bergs and floes.

A Town of Memories

On the fourth day Skagway was reached. Once a wild town with 8,000 or 10,000 inhabitants, the old starting point for the trail over the White Pass and on to Klondyke, today, with its population of about 300, it lives for the most part on memories of its wild past and on tourists, like ourselves. It was here, in the days of the gold rush, that "Soapy" Smith and his gang dominated everything and every one. At the height of his power the whole town seems to have been at his mercy. Robbery, blackmail, and corruption of every kind flourished abundantly. He was a super "bad man," and until he was shot dead on the gangway by one Frank Reid, who boldly tackled him and was himself killed by "Soapy" during the encounter, law and order were unknown in the town. To this day he is the most-talked-of man in Skagway. A photograph of him standing drinking at a bar may be bought for 5 cents, as may a photograph of him lying dead after the fight with Reid. His grave, strangely enough, is visited by numbers of tourists, and you may buy his "life" for 75 cents. The

first thing that catches the eye on disembarking at the pier is a gigantic rough carving on the rocks of a skull painted white with the legend below "Soapy Smith's skull."

The Old Trail

From Skagway the old trail led over the White Pass to Lake Bennett. We followed in the train. Down the grass-grown main street of Skagway the railway runs and on up the mountains. At times it seemed a mere ledge hanging precariously over wooded gorges and precipices and the likelihood of a safe issue to the journey appeared remote; but real danger there is none. Puffing and snorting, the little engine takes us up 3,000 ft. in three or four hours. Here and there, as we climb, the actual trail of '98 is clearly visible below us—a narrow, well-worn path winding upwards among the rocks. A stiff climb this even in summer and for an unnumbered mountaineer. What must it have been for the "mushers" of '98; men and women laden past all belief, fighting their way up at all times of the year, whether under the July sun, or through ice and snow and blizzard with a temperature of 40 deg. and more below zero? That deserted trail is, in its own way, the most impressive sight I have ever seen.

After climbing the Pass and running over a rocky plateau, we reach Bennett Station, at the head of the lake. Here we lunch on moose's liver, a delicacy of supreme succulence, and then travel on to White Horse, the railway terminus. Here

the fishing poles are brought into use. In company with a keen and friendly American I am taken in what was once a Ford car five miles up the Yukon River. For an hour or two we fish its steel-blue waters, just above the roaring White Horse rapids, and secure a nice basket of grayling and a sufficiency of mosquito bites.

An Old Time Night

It chances to be "old-timers' night" at White Horse City. In one of the original dance halls a dance is going on; roulette and various mystical card games are being played, and the old bar is in use again. The Canadian North-West Mounted Police are there in their dashing scarlet and gold. All is as it was 30 years ago—except that it is make-believe. Winnings are in a faked paper currency; soft drink only are sold at the bar, and dance girls are either bright young tourists from such places as Indiana and Oklahoma, or local ladies as reputable as they are attractive. Still, the scene is one that could not easily be paralleled on this side of the Atlantic.

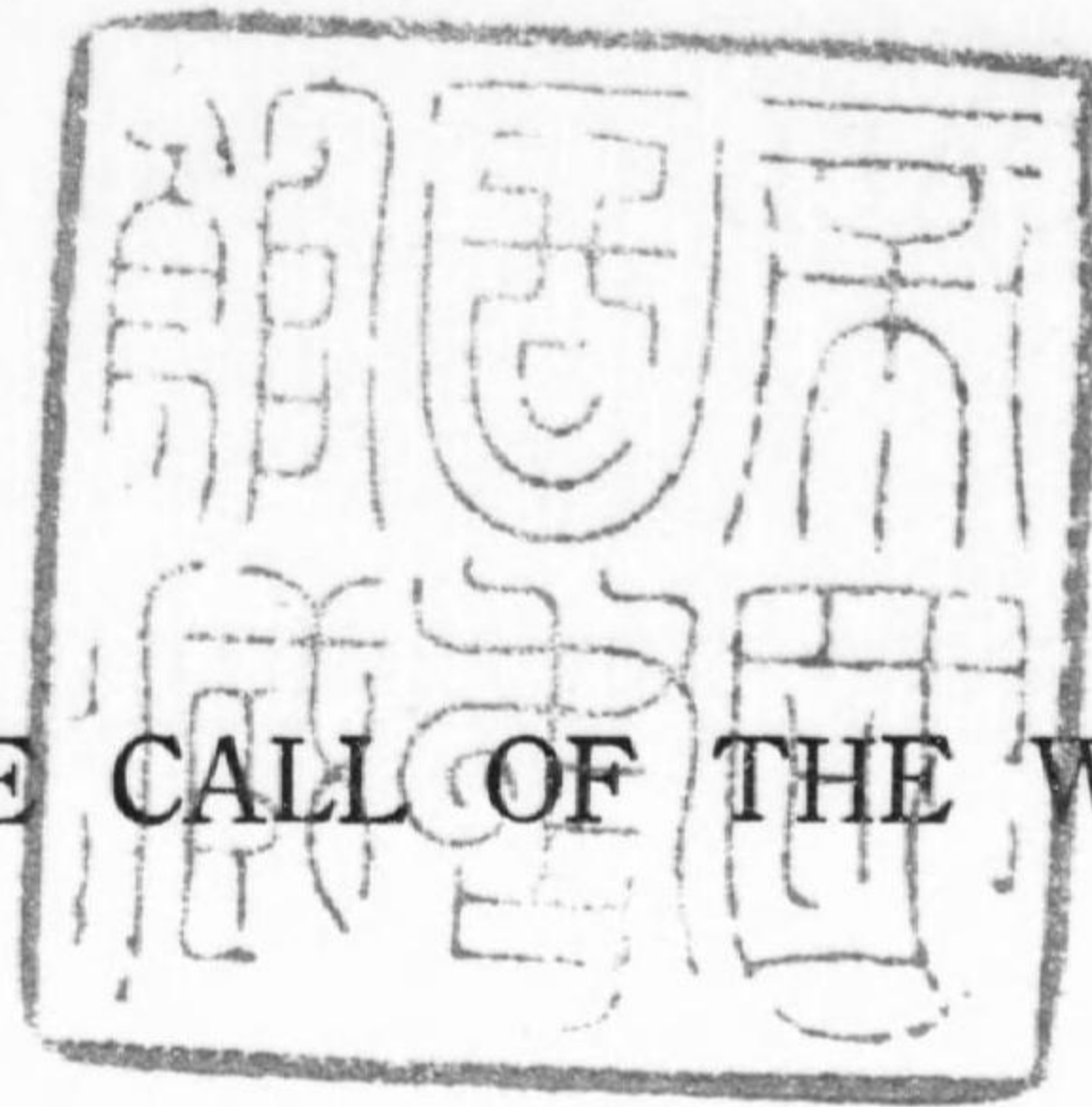
Although the Captains and the Kings have departed, and the gold production of the Klondyke has fallen from \$22,000,000 in 1900 to something under \$1,000,000, the Yukon Territory is still a goldmining country, and many a prospector roams through that vast land "in hope sometimes, sometimes in despair, yet persisting ever." It may well be that other Bonanzas and Eldorado Creeks still await

discovery.

Of the peerless beauty of Lake Atlin (one day's journey by rail and lake from Whith Horse), of the grayling to be caught there with the fly, of the monster trout only to be caught by trolling, I have not space to tell. To very few in this country are these things known. They are worth knowing. The great days of '98 are far past. But the infinite splendor, the real greatness of Alaska and the Yukon remain, and they who have eyes to see will "come out" with memories that are worth more than gold.



"John Thornton and Buck looked at each other"



THE CALL OF THE WILD

THE CALL OF THE WILD

I

INTO THE PRIMITIVE

“Old longings nomadic leap,
Chafing at custom's chain,
Again from its brumal sleep
Wakens the ferine strain.”

Buck did not read the newspapers, or he would have known that trouble was brewing, not alone for himself, but for every tide-water dog, strong of muscle and with warm, long hair, from Puget Sound to San Diego. Because men, groping in the Arctic

nomadic. nomad の形容詞。nomad はまた、nomade と云ふが、これは今は稀れに用ゐられる。nomad は (a member of a tribe) roaming from place to place for pasture 牧草を追ふ(種族の一人)、または wanderer (放浪者)、wandering (放浪すること)である。人に飼はれた犬が、次第に狼であつた時代の野性にもどる process を書いたのが、此の物語なのである。

brumal. Of winter 冬の。winterlike 冬のやうな。The brumal solstice (冬至)。brumous=wintry, foggy. L. bruma=winter. 動物學上の「冬眠」は、hibernation. 冬眠する=to hibernate. 冬眠動物 a hibernating animal.

waken v. t. v. i. 醒ます、(caus: to be awake), 醒める (to become awake).

the ferine strain. [-ferain] The vital force of a wild animal 野性。これは wakens の主辭。

Buck. これは犬の名であり此の小説の主人公なのだ。桑港から遠くない家に飼はれてゐた大きな強い犬で、この犬が此方の砂金採取地

野性の呼聲

一、原始の中へ

放浪の古き願ひ踊りいでて
習慣の鐵鎖を憤り
冬の日の長き眠りから
天然の野性は目ざめる。

バツクは人間のやうに、新聞を、讀むことをしなかつた。もし人間のやうに、新聞を見てゐたならば、彼は、ひとり彼のみならず、ピュージェット・サウンドからサン・ディエゴまでの間に棲んでゐる筋骨の逞しい、暖かさうな、ぶさぶさした毛を持つたあらゆる太平洋岸の犬に對して受難が醸されつゝあ

方に連れて行かれるのである。そして今までの生活とは打つてかはつた、ひどい生活の中に、次第に野性的本能が呼び醒まされるのである。

tide-water dog. A dog living on the Pacific coast of the united States. 米國の太平洋沿岸にゐる犬。

Puget Sound [ˈpu:dʒɪt]. State of Washington にある太平洋へつき出でるところで、Admiralty Inlet, Hood's Canal, the Strait of Juan de Fuca など交通してゐる。

San Diego [sæn di'eigou]. California の南部で Mexico に境を接する地。

groping in the Arctic darkness 北極地方の闇の中を手探りしながら。grope は盲人が手探りしたり、普通の人 (sighted men) が暗闇の中を手さぐりしたりすること。「手さぐりして歩く」ことを、to grope one's way in the dark, to feel one's way in the dark など云ふ。He lit his way to the bed; he groped his way to the door など云ふのである。また He felt in his pockets for his knife と云ふのである。

darkness, had found a yellow metal, and because steamship and transportation companies were booming the find, thousands of men were rushing into the Northland. These men wanted dogs, and the dogs they wanted were heavy dogs, with strong muscles by which to toil, and furry coats to protect them from the frost.

Buck lived at a big house in the sun-kissed Santa Clara Valley. Judge Miller's place, it was called. It stood back from the road, half hidden among the trees, through which glimpses could be caught of the wide cool veranda that ran around its four sides. The house was approached by gravelled driveways which wound about through wide-spreading lawns and under the interlacing boughs of tall poplars. At the rear things were on even a more spacious scale than at the front. There were great stables, where a dozen grooms and boys held forth, rows of vine-clad servants' cottages, an endless and orderly array of outhouses, long grape arbors, green pastures, orchards, and berry patches. Then

booming the find. Advertising the discovery of the gold in an exaggerated manner in order to stimulate travel on their lines [Theodore C. Mitchill, principal of Jamaica High School, New York City, の註。] 船會社運送會社などが、この金の發見を大々的に宣傳して客を呼んだのである。find は「發見」、すなはち treasure (寶物)、minerals (礦物) などの discovery を云ふのである。

furry coats 毛でつまれた身體をいふのである。婦人の冬の外套を fur-coat と云ふ。

valley. 山で囲まれたやうな山麓をいふ感じの字。川が流れてゐた

ることを知つてゐるはずであつたのだ。つまり、それは外でもない。北極の闇の中を手探りに探險しまはつてゐた人間共が、ある黄色い金屬を發見したので、そしてまた汽船會社や、運送會社などが、その發見について、大々的の宣傳をし始めたので、何千といふ人々が北へ北へとアラスカへ向けて押し寄せつゝあつた。この人々は犬を必要とした。そして、彼等の必要とする犬は、勞役に従事するための強い筋肉と、寒さから身を護るための深い毛皮を持つた、大きな、がっちりした、犬でなければならなかつた。

バックは、日當りのよい、サンタクララヴァレーの堂々たる家に往んでゐた。ミラー判事邸と、呼ばれるその家は、道路から引込んで、半ば樹立ちの間に遮ぎられてゐて、その間から、邸の周囲を取圍んでゐる涼しさうな、廣い、ヴェランダがほの見える。家から出ると、道路まで、廣い芝生を貫いて、高いポプラの交錯した樹枝の下を、砂利を敷いた車道が走つてゐた。裏の方は、表よりもずつと廣々してゐた。大きな厩があつて、一ダースばかりの馬丁や子供達が出たり入りしてゐた。木蔓の巻きついた、召使達の小屋も列んでゐる。果てしなく、整然と列んでゐる納屋、長い葡萄棚、青々とした牧場、果

りする。溪谷といふよりも、滑らかな感じである。

was approached by gravelled driveways. この driveways は馬車、自動車等の道。driveway led to the house といふことである。

tall. 物の生長を示す字で、a tall man, a tall tree などいふ。building に高層建築を一つの生長と考へて、a tall building などいふ。山などの高きは high である。

grooms. Servants having care of horses 馬丁。

held forth. 出たり入つたりしてゐた。

vine-clad 蔓草に蔽はれた。

there was the pumping plant for the artesian well, and the big cement tank where Judge Miller's boys took their morning plunge and kept cool in the hot afternoon.

And over this great demesne Buck ruled. Here he was born, and here he had lived the four years of his life. It was true, there were other dogs. There could not but be other dogs on so vast a place, but they did not count. They came and went, resided in the populous kennels, or lived obscurely in the recesses of the house after the fashion of Toots, the Japanese pug, or Ysabel, the Mexican hairless,—strange creatures that rarely put nose out of doors or set foot to ground. On the other hand, there were the fox terriers, a score of them at least, who yelped fearful promises at Toots and

artesian well [a:'ti:zjən wel] 堀抜井戸 (a perpendicular boring into strata, producing the constant supply of water rising spontaneously to surface). F. artésien < Artois, 歐洲で堀抜戸が最も古くから行はれたフランスの地名。

demesne [di'mein] 法律語で possession (of real property) as one's own (esp. hold in demesne) の事で、土地などの所有を意味する。それから、また、an estate held in demesne, all of an owner's land not held of him by freehold tenants, or all that he actually occupies himself すなはち誰れにも貸してない所有地をいふのである。Royal demesne は御料地のこと、State demesne は國有地のことである。それで、普通に、demesne は landed property また estate と同じに用ゐられる。土地會社などは real estate の會社で、田舎に行くと大きな estate が、草青々と續いてゐる。この作品の Judge Miller の家は大きな estate で、そこで、Buck が、一人のさばつてゐたのである。

the four years of his life. これは彼が生れて四年であることをいふので、four years in his life (彼の長い生涯の間の四年間) ではないのである。four years といふのが his life であることなのである。てうで、齒の話をしてゐて Every one has thirty-two of them といつた

樹園、莓などの畑。その上に、ポンプ仕掛の掘抜井戸もあれば、ミラー判事の子供が朝々飛び込んだり、暑い日の午後に一浴び浴びて涼しくなるための大きなセメントのタンクもあつた。

そして、この廣大な土地を、バツクが、支配してゐた。彼はこゝで生れて、それからの四年間をこゝで過した。尤もいつも、ほかにも犬はゐるにはゐた。こんな廣い所に、ほかにも犬がゐないといふわけには行かなかつた。しかし、それ等の犬は物の數ではなかつた。彼等は來たかと思ふと行つてしまつたり、ごたごたした犬小屋の中に住んでゐたり、または、日本産の狎のツーツや、メキシコ産の無毛のイザベルのやうに、家の引込んだ所に、居るのか居ないのかわからないやうにして暮らしたりしてゐた。——このツーツとイザベルとは妙な奴で、戸外に鼻先を出すことさへ稀で、土を踏むことも殆んどなかつた。また一方にはフオツクス・テリアが少くとも二十匹ばかりゐて、箒や長い棒のついた雑巾を持つた女中の一隊に護られながら、

場合、人間の齒が全部で三十二本であることをいふと同じである。

so vast a place=such a vast place.

they did not count=that is not included in reckoning, 勘定の中に入れられて居ない、すなはち no count であること。「かすつべた」であること。數に入れてゐないことである。

then came and went. 來たかと思ふと居なくなつて了つたこと。たとへば、light come light go (what is easily won is soon lost) は、容易に手に入るが、ちぎ無くなつて了ふことである。money の如きものは、it comes and goes である。—The Rainbow comes and goes.—wordsworth.

recesses=a retired or a secret place (in the inmost recesses of the Alps, of the heart); receding part of a mountain chain etc., niche or alcove of wall. こゝでは家の、引込んだ、かくれた、邪竈にならないところをいふ。

fox terriers. 獵犬または番犬として役立つ。

a score of them. これは「彼等のうち」といふ of ではなく、彼等すなはち fox terriers の二十疋といふこと。

Ysabel looking out of the windows at them and protected by a legion of house-maids armed with brooms and mops.

But Buck was neither house-dog nor kennel-dog. The whole realm was his. He plunged into the swimming tank or went hunting with the Judge's sons; he escorted Mollie and Alice, the Judge's daughters, on long twilight or early morning rambles; on wintry nights he lay at the Judge's feet before the roaring library fire; he carried the Judge's grandsons on his back, or rolled them in the grass, and guarded their footsteps through wild adventures down to the fountain in the stable yard, and even beyond, where the paddocks were, and the berry patches. Among the terriers he stalked imperiously, and Toots and Ysabel he utterly ignored, for he was king,—king over all creeping, crawling, flying things of Judge Miller's place, humans included.

His father, Elmo, a huge St. Bernard, had been

escort 食堂に行く時、男が、lady を escort して行く。さういふやうに、傍に添うて、いん懃について行くことをいふ。

on long twilight or early morning rambles. この long は twilight rambles と early morning rambles に時間が長くかかることをいふのでなく北地だから long twilight なのだ。twilight は朝にも用ゐられるが、普通、「夕方なたそがれ」。on は「に」といふ前置詞。

lay. 變化、lie, lay, lain. 横へるといふ。lay は現在で、lay, laid, laid と變化する。

roaring 波のひどい音、雷の響、大砲の音、叫聲等。

library 図書館のことが library であるが、個人の圖書室も library といふ。library だけで勉強室は別にしてゐる人もあるが、library を書

窓から彼等を見てゐるツーツやイザベルに向つて、今に恐ろしい目に會はしてやるぞといふやうな様子でキャンキャン吠え立てた。

しかし、バツクは、家の中に飼はれてゐる犬でもなければ、犬小屋の中に寝起きする犬でもなく、全領土は彼のものであつた。判事の子供達と、水泳タンクにも飛び込めば、狩りにも行つた。判事の娘のモリーとアリスとが、暮れ遅き夕暮や朝早くを歩きする時には、そのお伴をすることもあつた。冬の夜はほうつほうつと音を立て、勢よく燃える書齋の暖爐の火の前で、判事の足許に寝そべつた。また彼は、判事の孫達を背に乗せて歩いたり、芝草の上を轉がしたりした。そして厩の廣場のところにある泉の方や、或はもつと遠くの厩の草地の所や、苜蓿の方までも、彼等がよちよちと冒險的に歩いて行くのを守つてついて行つた。フオツクス・テリアのゐる中では彼は傲然として威張つて闊歩した。そしてツーツやイザベルは全然問題にしまなかつた。何故かといふと、彼は王様であつたから——ミラー判事邸内のあらゆる這ふもの、走るもの、飛ぶものは、人間もひつくるめて、盡く彼の支配下に屬するものであつたから。

バツクの、父親のエルモは、大きなセント・バーナード種で、

齋にしてゐる人が多い。Judge と云はれるやうな人は、是非 library を持たなければ仕事が出来ない。

the grass. 普通の草も grass であり、lawn も grass である。こゝではこれだけの家のことであるから勿論、氣持いい lawn である。grass は單數に書く。

stalk 胸を張つて、豪然と歩くこと。[OE, "stealcian" = walk cautiously].

humans included. これは all creeping, crawling, flying things につく。including humans と同じ。

St. Bernard. 非常に大きな犬で、アルプスなどで旅人を助ける話のある犬である。さうして、noble looking dog である。

the Judge's inseparable companion, and Buck bid fair to follow in the way of his father. He was not so large,—he weighed only one hundred and forty pounds,—for his mother, Shep, had been a Scotch shepherd dog. Nevertheless, one hundred and forty pounds, to which was added the dignity that comes of good living and universal respect, enabled him to carry himself in right royal fashion. During the four years since his puppyhood he had lived the life of a sated aristocrat; he had a fine pride in himself, was ever a trifle egotistical, as

bid fair to do=show promise of doing.

to follow in the way of his father. 親の Flmo の真似をして判事の相手になればなれたのであること。follow に in のつく例。follow in one's steps=to imitate, come after; to take as an example.

Scotch shepherd dog 力強い犬の種類。この shepherd は日本で近來流行してゐる犬で、これについて愛犬家である彫刻家藤井浩祐氏はかう書いてゐる。

『シェパドは昔ウルフドッグ(狼犬)と稱せられたもので狼との雑種と云はれてゐる。一名アルサシアンジャーマンウルフドッグとも稱せられる位で獨逸に於て人工的に改善せられ今日姿は餘程立派になつてゐる、私はドイツ人の理窟つばい性質が犬種改良の上にもよく現はれてゐると思つてゐる。

例へば英ポインターはた瀟洒なすつきりした姿をなし獵などの實用的に使はれるが少し働かせると直ぐ草臥れて終ふ缺點がある、然るに同じポインターでも獨ポインターは却々疲れると云ふことがない、水を泳ぐのも上手であり、尾も比較的短く、活動に便にしてあるし、人工的に改善の跡がありあり見える。

シェパドの場合も同様で狼のやうな勇敢なる性質を持つてゐる犬は軍用に使つて弾丸砲臺煙などに恐れず勇ましく働くであらうと云ふ所



判事の離れ難い伴侶だつた。そしてバツクは彼の父親の後を繼ぐと見られてゐた。彼の母親のシェツプがスコツチ・シェパード種だつたので、彼はそんなに大きくはなかつた。——目方でやつと百四十ポンド位のものだつた。しかし、この百四十ポンドの體量に、良い生活と一般から受ける尊敬に起因する威嚴とが加はつて、彼をして王様らしい態度をとることを可能ならしめた。彼は仔犬の時代から今日まで四年の間、何不足ない貴族の生活を送つて來た。だから、ちよつと田舎紳士が鳥なき里の蝙蝠といふわけで、兎角なり易いやうに、彼もまた自分自身に

に目をつけて工夫を凝らして出来上つたものである。歐洲大戰當時は負傷兵の發見、傳令浮虜擁護、食糧運搬などの活動をなし世界的に名を高めたので何んでも新しいものを喜ぶ人たちに愛好せられて非常に流行を見るに至つた、歐米ではこの犬に藝を教へ込む學校さへ出来て居ると聞いた。藝を教へると云ふがそれならば本來訓練さるべき犬が訓練されなかつた場合には果して値打ほどの位違ふかと云ふにシェパドの如きは訓練がないと人間の鑑賞のレベルに迄上るものと考へられない、而してこの犬位忠實に教を受くる犬は餘りないのであるから充分訓練を施すべきであると思ふ。』

前にシェパドは狼との雑種であると云つたが狼なるものは果して實在して居るものであらうか私はこれに對して多大の疑問を懷いてゐる、野性の山犬の風貌態度性格から推量して人間が創作したものではないかと考へられる、従つてシェパドは野性の標悍なる山犬との雑種と考ふべきであると思ふ。』

comes of=comes from.

carry himself 自からを處する、態度をふる。

puppyhood 仔犬時代。balyhood (赤兒時代)、boyhood (少年時代)。

sated. 厭になるほど與へられたる。

fine. 豪勢な。

a trifle. いささか。

egotist. 自己中心主義者、主我的の人、自分の事ばかり述べる人、自尊家、自惚の強い人、利己主義者。かういふ人の態度は egotism である。倫理上の利己説又は哲學上の主我説を egoism と云ひ、それを奉ずる人を egoist と云ふ。egotism は「己れが」「己れが」といふことで、too frequent use of 'I' and 'me' である。

country gentlemen sometimes become because of their insular situation. But he had saved himself by not becoming a mere pampered house-dog. Hunting and kindred outdoor delights had kept down the fat and hardened his muscles; and to him, as to the cold-tubbing races, the love of water had been a tonic and a health preserver.

And this was the manner of dog Buck was in the fall of 1897, when the Klondike strike dragged men from all the world into the frozen North. But Buck did not read the newspapers, and he did not know that Manuel, one of the gardener's helpers, was an undesirable acquaintance. Manuel had one besetting sin. He loved to play Chinese lottery.

hunting 狩獵。イギリスで hunting といふと、fox-hunting のことがある。

delights なぐさみ、たのしみ。

kept down the fat 脂肪を落した。大に運動して身體をきたへ、脂肪の加はるのをふせぎ、瘦せることを to reduce one's weight と云ふ。

cold-tubbing races 水浴動物。

love of water. 水の中に入つてゐるのを喜んでゐる氣持をいふ。the love of God は神を愛することである。

tonic=medicine to increase vigour,

fall. 秋。Americanism の著しい例の一つである。イギリスでは Autumn.

Klondike. Klondike は北米の極北西、Canada の Yukon Territory に Klondike といふ川がある。

The Klondike gold region はこの Klondike 川と Indian Rivers の drainage basins を含む。砂金發見は 1896 年である。この chief town は Dawson である。the goldfields の discovery 以來、pilgrimage by gold-seekers の centre となつた。

strike. 金などの deposit につきあつた事で、discovery のことである。

undesirable acquaintance. 知己として好ましくない人。米人は日本の移民を undesirable element と見てゐるのである。

すばらしく誇りを感じてをり、且ついさゝか強がり屋でもあつた。しかし彼は單なる贅澤三味な室内犬にならないことによつて自分を救つた。狩獵やその他同じやうな戶外遊戯のお蔭で無暗に肥ることから免れ、筋肉を逞しくした。そして他の水浴動物に於けると同様に、彼にとつても、水を愛することが強壯劑となり、健康保全藥ともなつた。

これが、一八九七年の秋、クロンダイクの砂金發見が、人間を全世界からこの凍てつた北地にひき寄せた頃のバツクの有様であつた。然るにバツクは新聞は讀めず、また園丁の助手の一人であるマニユエルが、あまり好ましくない友達であることを知らなかつた。マニユエルには一つの病みつきがあつた。彼は支那賭博が好きだつたことだ。且つその賭をやるのにシステ

beset.

包圍する、取巻く

(hem in),

押寄せる

(set upon),

困惑させる

(perplex)

等の意。

be beset

with「.....

に包圍される」

「.....

に附きま

とはれる」

のやうな

屢々passive

に用ゐら

れる。Hu-

man life is

beset with

sin 人間の

一生は罪

惡につき

まとはれ

て居る。



Also, in his gambling, he had one besetting weakness—faith in a system; and this made his damnation certain. For to play a system requires money, while the wages of a gardener's helper do not lap over the needs of a wife and numerous progeny.

The Judge was at a meeting of the Raisin Growers' Association, and the boys were busy organizing an athletic club, on the memorable night of Manuel's treachery. No one saw him and Buck go off through the orchard on what Buck imagined was merely a stroll. And with the exception of a solitary man, no one saw them arrive at the little flag station known as College Park. This man talked with Manuel, and money chinked between them.

"You might wrap up the goods before you deliver 'm," the stranger said gruffly, and Manuel doubled a piece of stout rope around Buck's neck under the collar.

besetting sin=that most frequently tempts one 人を最も屢々誘惑するところのもの。sin は人は皆な罪の子だといふ意味の罪だ、法律上の crime とはちがふ。

system. ばくちにかける systematic なやり方で、chance といふもののあることを知らない無謀な gamblers は、うまく行けば、はづれたのを皆な自分の手にさらひ込もうといふのである。

damnation 地獄に墮ちる罪、性根無し、浮ぶ瀬のなきこと。

lap over を越える。

progeny 子供 (offspring). びよこ、びよこ生れて来る子供。

treachery. 叛逆。

on what.....a stroll. on a stroll (散歩に) といふところが、散歩と思つたのは Buck で、實は、賣られに行くのであつたからだ。

a solitary man. 暗淵に一人突立つて待つてゐた男で、これが

マチツクにやれば必ず勝つと信じきる弱點があつた。それでは遣り切れたものぢやない。それは金がなくては出来ないことだが、園丁の助手の給料では、かみさんや、澤山の餓鬼を食べさせて行くにも足りないのだ。

マニユエルが、主人に叛逆を企てた其の、記念すべき晩に、判事ははし葡萄組合の會合に出席してゐた。判事の子供達は運動クラブを作るので多忙だつた。誰もマニユエルとバツクが果樹園を通り抜けて行くのを見た者がなかつた。バツクはたゞの散歩だと思つて後からついて行つた。彼等がカレツジ・パークといふ小さな中間驛に着いたのも、一人の怪しげな男の外には、誰一人見たものはなかつた。この男はマニユエルと話をしたが、やがてその男からマニユエルへ何程か渡したと見えてチャラチャラと金の音がした。

9. 「わつちに渡す前に、その荷物を荷造りしてくれたつて損はなからう」と怪しい男は亂暴な調子でいつた。そこで、マニユエルは一本の太い綱で、バツクの首輪の下の方を二重に巻いた。

Buck を買取つたのである。

flag station. 田舎の小さい驛で flag をふつて signal をしなければ止まらない驛。

chink. 擬聲音の言葉である。

you might wrap up the goods. 荷物を荷造してくれ。犬をしげつけてくれといふこと。You might (I request you to) call at the baker's; you might (ought to, yet do not) offer to help は其の例。「.....したつて損はないだらう」といふやうな意味。

deliver 'm=deliver him. 荷物を引渡すことを deliver するといふ。

gruffly. In a rough manner, in a rough voice.

collar 犬の首環。under the collar は首環より下の方をいひ、首環の下ではない。

"Twist it, an' you'll choke 'm plentee," said Manuel, and the stranger grunted a ready affirmative.

Buck had accepted the rope with quiet dignity. To be sure, it was an unwonted performance: but he had learned to trust in men he knew, and to give them credit for a wisdom that outreached his own. But when the ends of the rope were placed in the stranger's hands, he growled menacingly. He had merely intimated his displeasure, in his pride believing that to intimate was to command. But to his surprise the rope tightened around his neck, shutting off his breath. In quick rage he sprang at the man, who met him halfway, grappled him close by the throat, and with a deft twist threw him over on his back. Then the rope tightened mercilessly, while Buck struggled in a fury, his tongue lolling out of his mouth and his great chest panting futilely. Never in all his life had he been so vilely treated, and never in all his life had he been so angry. But his strength ebbed, his eyes

twist it, an'=if you twist it,..... さうすりやあ。 an'=and.

you'll choke 'm plentee=you will choke him much.

the stranger. 前にあつた a solitary man のこと。

grunt=to utter low gruff sound characteristic of hogs: to express discontent, fatigue, &c. by this; to utter with grunt (often out).

to be sure=surely.

performance. 犬がいろいろの藝をやるが、こんなことには慣れてゐなかつた。unwonted は異常の、慣れない。

trust in men he knew 彼れの知つてゐる人を信頼する。he knew とは知づきのあることである。I know him well と云へば、彼の人

「これを捻ぢりや幾らでも咽喉が締まらあ」とマニユエルはいつた。怪しげな男は、うんとうなつた。

バツクは、従容として、その綱を受けた。確かに、彼にとつてこんなことはまだしたことのない藝當だつたが、彼は人間(尤も彼の知つてゐる人間に限るが)を信頼すること、知慧にかけては到底その人たちにかなはないことを沁み沁み知つてゐたのである。けれども、自分の咽喉を巻いた其の綱の端が自分の知らぬ男の手に渡されると、彼は威嚇するやうに唸つた。かうして彼は單に自分の不快を宣言したのみであつた。彼の自尊心からして、宣言は即ち命令だと信じてゐたからだ。然るに驚いたことには、首は締めつけられて、呼吸が止まりさうだ。彼は嚇然として激怒した。そして其男に飛びかゝつた。すると男も少し間隔をおいて、立ち向つてバツクの喉元を、ぎゆつとつかんで、左右に振りながら、巧みな投げの手で、仰向に彼を投げつけた。すると、綱は構はず、どしどし締つて來るのだ、バツクは口から舌をグラリと垂らしながら、そして其の大きな胸を徒らにあえがせながら、益々荒れ狂つた。彼は生れてから、この方、未だ曾つてこれほど亂暴に取扱はれたことはなかつた。今日まで、未だ曾つてこれほど憤激したこともなか

私の友だちだといふやうな場合である。

give them credit for..... 彼等に.....があると思ふ。

wisdom 智慧 (知識すなはち knowledge とはちがふ)

to intimate 通告する、宣言する (declare)

grapple 掴む (to grip); 肉薄する (come to close quarters with)

twist. "If you are much stronger than your adversary you may throw him by grasping him firmly and swinging him from side to side till you have him over. This is the Twist from the Chest. [Wrestling, from "Cassell's Book of Sports and Pastimes"]

futilely. 無益に。

glazed, and he knew nothing when the train was flagged and the two men threw him into the baggage car.

The next he knew, he was dimly aware that his tongue was hurting and that he was being jolted along in some kind of a conveyance. The hoarse shriek of a locomotive whistling a crossing told him where he was. He had travelled too often with the Judge not to know the sensation of riding in a baggage car. He opened his eyes, and into them came the unbridled anger of a kidnapped king. The man sprang for his throat, but Buck was too quick for him. His jaws closed on the hand, nor did they relax till his senses were choked out of him once more.

"Yep, has fits," the man said, hiding his mangled hand from the baggageman, who had been attracted by the sounds of struggle. "I'm takin' 'm up for the boss to 'Frisco. A crack dog-doctor there thinks that he can cure 'm."

the train was flagged. この the little flag station で、flag の signal をして、汽車が止つたこと。

the next he knew=the next thing he knew was this; what he knew next was this

hurt suffer injury or pain.

jolt ゆすぶる。

whistling a crossing 踏切を汽笛する。

kidnapped king. 誘拐された王様とは、犬の Buck 自身のことである。Buck はミラー邸で王様のやうに威張つてゐたので、かう云つたのである。(八頁、十一頁参照)

nor did they r.lax=and his jaws did not relax. **nor**=and not.

つた。けれども彼の力は弱つて行つた。彼の目はくらんだ。汽車が止まつて、二人がかりで彼を貨車の中に放りこんだ時には彼はもう何事も知らなかつた。

再び、気がついた時、彼は、舌に傷が出来て、づきづき痛むことゝ、何か乗物に乗つてゐて揺られてゐることとをほんやりと感じたのである。それから踏切に来て警笛を鳴らす機関車の唳がれた汽笛の叫びで彼は何處にゐるのかを知つたのである。彼は幾度も自分を飼つてゐたミラー判事に伴れられて旅行して廻つて、貨車にも散々乗つたものだ。貨車に乗つてゐるなといふセンセーションの分らない筈はなかつた。彼は眼を見開いた。そして眼を開くと、其眼の中へ、誘拐された王様の抑へ難き怒りが入つて了つた。彼男はバツクの喉元目がけて飛びついたが、バツクは素早くそれを避けて了つた。彼の兩顎は男の手に喰ひこんで、再び喉を締められて気が遠くなつて了ふまで、どうしても離さうともしなかつた。

「發作が起つてゐるんでがす」と、男は傷だらけの手を、物音を聞きつけてやつて来た貨物係の人に見られまいと隠しながら言つた。「親方に頼まれて桑港まで連れて行くんですがね。あそこの一流の獣醫さんに診せやうと思ふんですが、獣醫さんは屹度治すといつてゐられるんですがね」

yep yes のことを、米人はいろいろにいふ。勿論 yes は一番おとなしいのであるが、ya!といふのが多い。yep または yap、或は yop などとも云ふ。日本と米國との間に Yap 島の重大な問題が勃發した時、President Wilson が senators に Yap といふと、yap? と云つて、問返した senator がゐたといふことだ。

has fits=he has fits. fits=發作。ヒステリーの人が急に變つた人のやうになる如き fits である。

I'm takin' 'm up=I am taking him up.

'Frisco.=San Francisco. てうど Yokohama のことを Hama といふ如きものである。

crack=first-rate, 一流の。

Concerning that night's ride the man spoke most eloquently for himself, in a little shed, back of a saloon on the San Francisco water front.

"All I get is fifty for it," he grumbled, "an' I wouldn't do it over for a thousand, cold cash."

His hand was wrapped in a bloody handkerchief, and the right trouser leg was ripped from knee to ankle.

"How much did the other mug get?" the saloon-keeper demanded.

"A hundred," was the reply. "Wouldn't take a sou less, so help me."

"That makes a hundred and fifty," the saloon-keeper calculated; "and he's worth it, or I'm a square-head."

The kidnapper undid the bloody wrappings and

for himself なくともよき言葉。

saloon 禁酒前には、米國の市街の町角のところなどに、酒場があつたのである。それが saloon である。

water front 海岸通り。front は sea front, lake front, bay front など用ゐる。海等に面してゐるところをいふのである。

all I get..... この all は「だけの」いふ感じを出す語である。This is all I get (己れのものになるのはこれだけだ)、This is all I have (私のもつてゐるのは、これだけだ)。

for it その仕事に對して。

an' = and

do it over = do it over again = do it again.

for a thousand = for a thousand dollars. 千弗貰つたつて。

cold cash = 現ナマで。

rip. To cut or tear (thing) quickly or forcibly away from something (rip out the lining, rip the boards off); cut or tear vigorously apart (often up; had his belly ripped up); split (wood); open up (wound). rip は無理に引き裂くこと。

mug (slang). simpleton, muff. 馬鹿野郎。

其の晩の、汽車の中のことは、サンフランシスコの、海岸通りの、ある酒場の後ろの小屋で、彼の男自身が最も雄辯に述懐してゐた。

「俺が、こんなにして、手に入れたのは、たつた、五十弗だ。もう今度つから現ナマ千弗貰はないことにや、こんなことあしねえ」と彼はぶつぶつ言つてゐた。

彼れの手は、ぐるぐると、血だらけのハンケチで、縛られてゐた。右のズボンの下の方が膝から踵までばくばくに、引裂かれて居た。

「もう、一人の野郎は、一體幾ら貰つたんだ」と酒場の親爺は聞いた。

「百ドルさ。あいつと、來ちやあ、ビター文だつて、負けねえんだ。ほんとによ。」

「ぢや、皆なで、百五十ドルだな」と親爺は勘定して見て、「だが、あのバツクと來ちやあそれだけの價值はある。そりや全くだ」

誘拐者は、血だらけのハンケチを解いて、その嚙みつかれ

demand = asked.

wouldn't take a sou less ビター文だつて少くちや受取らないんだ。sou[su:] 元來 sou はフランスの金で大體 five centime piece だから二錢位に當る。尤も爲替相場の變動で、いろいろになるから、二錢位といふのは、Par の場合だ。He hasn't sou といふやうな colloquial の時は、a sou は any money ビター文だつてといふことである。

so help me. 或は So help me god と云ふ。as I keep my word, as I speak the truth, etc. (ほんとの事を申して居りますから、どうぞお助けな!) と云ふこと。一つの oath である。例: So help me God, madam I will; said Harry Esmond, falling on his knees, and kissing the hand of his dearest mistress. —Thackeray. (奥様必ず忠實に致しますとハリー・エズモンドは跪いて、彼の懐かしい夫人の手に接吻しながら云つた。)

that makes a hundred and fifty お前の五十ドルと、あいつの百ドルを合せると、百五十ドルになると云ふこと。

square-head = a stupid fellow. or = otherwise.

undid. undo (解く) の過去。

looked at his lacerated hand. "If I don't get the hydrophoby—"

"It'll be because you was born to hang," laughed the saloon-keeper. "Here, lend me a hand before you pull your freight," he added.

Dazed, suffering intolerable pain from throat and tongue, with the life half throttled out of him, Buck attempted to face his tormentors. But he was thrown down and choked repeatedly, till they succeeded in filing the heavy brass collar from off his neck. Then the rope was removed, and he was flung into a cagelike crate.

There he lay for the remainder of the weary night, nursing his wrath and wounded pride. He could not understand what it all meant. What did they want with him, these strange men? Why were they keeping him pent up in this narrow crate? He did not know why, but he felt oppressed by the vague sense of impending calamity. Several times during the night he sprang to his

lacerate=mangle, tear (especially flesh or tissues)

hydrophoby=hydrophobia. 狂犬病。hydro=water. -phobia 恐れること。恐水病といふ譯もある。Anglophobia 恐英熱。

you was born to hang=you were born to be hanged.

pull your freight お前の荷物を引張る。犬と一所に去ること。

daze. stupefy; dazzle; bewilder. dazed=茫然となつて了つて。

throttle=strangle; choke 窒息させる。with the life half throttled out of him=生命を半分ほど絞りとられて。

repeatedly 幾度も、幾度も。

remove はづす。

cagelike 動物園の lion などの居る檻は iron で出来てゐる。あれ

た手を見た。「狂犬病にでもとつつかれなけりやあ、いゝがな——」

「さういふ運命だらうよ」と、酒場の親爺は聲を出して笑つた。そして「おい、行く前に少し手を貸してくれ。」とつけ加へた。

バツクは、咽喉と舌とに堪へ難い痛みを感じて、茫となつたまゝ、命も、藻抜きの殻見たいになつて、それでもなほ虐待者に反抗しやうとした。が、彼は幾度も投げ倒され、締めつけられ、遂に太い眞鍮の首輪をはづされて、それから綱を解いて、檻のやうな箱の中へ投げ込まれて了つた。

それから、其の疲れた、夜通し、彼は、獨りその檻の中に横はりながら、彼の憤怒と、其の傷つけられた自尊心とを、いたはり育ててゐた。一體これはどういふことなのであるか、自分にも分らなかつた。この怪しい人間達は自分をどうしやうといふのか。何の用があつて、こんな狭い檻の中に自分を押し込めておくのか。彼には少しも其の譯けが分らなかつた。が、併し、只何となく身に襲つて来る恐ろしい災厄があるといふ漠然たる感じに壓迫されてゐた。幾度か、彼は夜中に物置の戸のがらが

も cage である。小鳥を入れた眞鍮の針金などで作った箱のやうな鳥籠も cage である。罪人を入れておく檻も cage である。

crate 瀬戸物類や果物などを入れる case をいふ。木で出来てゐるのが多い。

weary night 疲れてゐるのは Buck なのだが、その様子を night の方へ轉じたのである。文章では、かういふことはよくあるものである。たとへば「悲しき夜」などもその一例である。

pent up 閉ぢ込める。

sense この字は「感覺」と云ふ字である。人間は five senses をもつてゐる。また、人には sense of justice (正義の念) があり、sense of humour (ヒューマールの感覺) がなければならぬなど云ふ。

feet when the shed door rattled open, expecting to see the Judge, or the boys at least. But each time it was the bulging face of the saloon-keeper that peered in at him by the sickly light of a tallow candle. And each time the joyful bark that trembled in Buck's throat was twisted into a savage growl.

But the saloon-keeper let him alone, and in the morning four men entered and picked up the crate. More tormentors, Buck decided, for they were evil-looking creatures, ragged and unkempt; and he stormed and raged at them through the bars. They only laughed and poked sticks at him, which he promptly assailed with his teeth till he realized that that was what they wanted. Whereupon he lay down sullenly and allowed the crate to be lifted into a wagon. Then he, and the crate in which he was imprisoned, began a passage through many hands. Clerks in the express office took charge of him; he was carted about in another wagon; a truck carried him, with an assortment of boxes and

rattle がらがら云ふ音を示した字。door の場合ならば、日本の戸のやうな戸の場合の音である。rattle は、馬車などが、がらがら走るのにも用ゐ、rattle down, rattle along, rattle past など云ふ。ハンドルで押して入る door ならば、fling open the door, throw open the door など云ふ。

bulging この字は swelling out 膨れ出たこと。bulge は樽の胴のこと。

sickly=faint, pale. はつきりしない、薄ぼんやりした、弱い白さをいふので、pale は pale face など言ひ病人の青白いのを pale と云ふ。pale は whitish or ashen appearance で、「青白い」と日本語では云ふが、青い色ではないのである。

twisted into..... と變つたことである。growl と云ふ字があるから、

ら開く音がすると、若しかして、判事か、それでなくても少くとも判事の子供達かが来てくれたのではないかと、期待をもつて、飛び起きた。が、それは何時も膨れ面の酒場のおやぢが、ぼやつとした牛蠟の手燭の光りで彼の様子を見に来るのだつた。そして其度其度に、バツクの喉の中で、聲をふるはしてゐた歡喜の叫び聲が荒びた唸り聲に換ちかへられた。

けれども、酒場のおやぢは、バツクを、そのままにして置いた。そして、朝になると、四人の男が入つて来て、その檻を擔ぎ上げた。又虐待者だな、とバツクは心にきめてしまつた。何故ならば、彼等は皆なひどい、ぼろぼろの衣服を着て髪に櫛を入れてゐない人相の悪い連中であつたからだ。バツクは檻の中から彼等に向つて吠えかゝつたが、彼等は只あははと、笑つて、棒片を檻の中に突込んだ。バツクは忽ちそれに噛みついたが、それが彼等の手である事をしまひに知つたのである。そこでバツクも不承無承に、横になつて、彼等が檻を車の上に載せるのを、黙つて見てゐた。それから彼、および彼の閉ぢ込められた檻が、次から次へと多くの人々の手に渡り始めた。運送會社の係りの者に渡される。又違つた荷車で引張りまわされる。荷箱や小包などと一緒に手押しトラックに乗せて連絡船へ運ば

twist など云ふ字を用ゐた面白味がある。into は.....になること。change into と同じである。

let him alone 彼をそのままにしておいたこと。let は現在、過去過去分詞同形。put, cut, set, shut, cast 等も皆な現在、過去、過去分詞同形である。此等は、皆な似通つた短い語で多く t で終つてゐる。

pick up 摘み上げることで、pebbles や一寸としたものを pick up するのだが、こゝでは「持ち上げる」の意。to lay hold of and take up の意味である。

unkempt=uncombed, dishevelled. 梳らない。

storm 襲ひかゝる。

truck=porter's two-, three-, or four-wheeled barrow for luggage at a railway station, etc. 動詞は、to convey on truck の意味。

parcels, upon a ferry steamer; he was trucked off the steamer into a great railway depot, and finally he was deposited in an express car.

For two days and nights this express car was dragged along at the tail of shrieking locomotives; and for two days and nights Buck neither ate nor drank. In his anger he had met the first advances of the express messengers with growls, and they had retaliated by teasing him. When he flung himself against the bars, quivering and frothing, they laughed at him and taunted him. They growled and barked like detestable dogs, mewed, and flapped their arms and crowed. It was all very silly, he knew; but therefore the more outrage to his dignity, and his anger waxed and waxed. He did not mind the hunger so much, but the lack of water caused him severe suffering and fanned his wrath to fever pitch. For that matter, high-strung and finely sensitive, the ill treatment had flung him into

assortment of boxes and parcels=an assorted set of goods of one or several. 箱と小包を truck に積んで行つたが、バツクの入つてゐる crate もそれを同じ truck に積まれて行つたのである。この assortment は日本語ならば抜いて了ふところである。区分された品物の一と組、或は各種取合せ物といふことである。

ferry steamer 川などの渡船は、多く大きな汽船で、大都會の ferry は、自動車まで乗つて了ふのがある。今では ferry と云へば、隅田川の言問の渡船などを聯想せず、青森函館連絡船のやうな大きな汽船を思ひ浮べるのである。

railway depot=rail way station. depot はアメリカで用ゐる言葉である。American Language を書いた本や、字引などに Americanism とか U. S. などゝあると、それだけしかアメリカでは用ゐないやうに考へ

れる。また船からトラックで引出され、そのまま大きな停車場内へと運ばれる。そして最後に彼は急行列車の一室に積込まれた。

二晝夜の間、此の急行列車は、やかましく、汽笛を鳴らし立てる機関車の後に牽きずられて行つた。そしてこの二晝夜の間、バツクは何にも喉に通さなかつた。列車の係員たちがはじめて彼に近寄ると、彼はいきなり、腹立ちまぎれに唸り聲でそれを迎へたので、彼等も癢にさわつてその返報として彼をからかつたのである。彼が體を慄はし、泡を出して、檻の横木に身體を投げかけると、彼等はそれを嘲り笑つたり叱りつけたりした。彼等は、大いに惡むべき犬のやうに、唸つて見たり、吠えて見たり、猫の鳴聲をして見たり、兩腕で羽ばたいて見せて鶏の鳴聲をしたりした。こんな事はほんとに愚にもつかぬ事だとバツクは知つてはゐるが、考へて見れば、それだけ彼の威嚴に對して侮辱を加へてゐるともいへる。彼は怒りに怒つたのである。空腹はさほどには感じなかつたけれど、水の缺乏は烈しい苦痛となつて、彼の怒を熱病のやうに極度に煽りあげたのである。元來緊張しきつた、感じ易い彼が、虐待の爲に熱發して、

る誤解を起し易い。depot はイギリスで用ゐないと云ふ場合にも U. S. とあるわけで、アメリカでも station は盛んに用ゐられて居るのである。railway はアメリカでは用ゐず、必ず railroad と云ふ。だから railway station とは云はず、railroad station と云ふのである。

bars. 檻の横木。詰責する。

taunt. 痛罵する。

mewed 猫の鳴聲が mew で、猫の鳴くことが mew である。犬の鳴聲が low-wow.

fapped their arms 鶏の眞似をしたこと。

crow. 鶏の鳴くこと。

to fever pitch=to madness 非常に。

finely. 微細に。

a fever, which was fed by the inflammation of his parched and swollen throat and tongue.

He was glad for one thing: the rope was off his neck. That had given them an unfair advantage; but now that it was off, he would show them. They would never get another rope around his neck. Upon that he was resolved. For two days and nights he neither ate nor drank, and during those two days and nights of torment, he accumulated a fund of wrath that boded ill for whoever first fell foul of him. His eyes turned blood-shot, and he was metamorphosed into a raging fiend. So changed was he that the Judge himself would not have recognized him; and the express messengers breathed with relief when they bundled him off the train at Seattle.

Four men gingerly carried the crate from the wagon into a small, high-walled back yard. A stout man, with a red sweater that sagged generously at the neck, came out and signed the book for the driver. That was the man, Buck divined, the next tormentor, and he hurled himself savagely

parched [part.] = dried up 乾き切つた。

them その男たち。

he would show them. = he thought, "Now I will show them how strong I am."

They would never get another rope around his neck. = He said to himself, "I will never allow them again to tie another rope around my neck."

upon that he was resolved. = he was resolved upon that.

それが乾ききつて腫れた喉と舌との災症に依つてますます激しくされた。

たつた一つ、彼の嬉しいことがあつた。それは、首から綱が外された事である。綱が首に巻きつけられてゐることが彼には不當の不利益であり、彼等には不当な利益であつたからだ。が、今はそれが取り去られたのだ。今に見ろ、とバックは考へた。二度とあの綱をこの首に巻かせはしない。それに就て、彼は斷乎たる決心を持つてゐた。二晝夜の間、彼は何にも口にしなかつた。そしてその二晝夜の間、彼れの怒は益々貯へられて、若しかして誰れか彼にひよつと打つかりでもしたら、散々な目に會ふにきまつてゐた。彼の眼は血走つて、彼は荒れ狂ふ一箇の悪魔になつてゐた。判事その人でさへ、これが、バックだと見分けがつくまいと思はれるほどに變つて了つてゐた。そして列車の運搬人たちは、シアトルに汽車が着いて彼を汽車から、いそいで下した時に、やつと救はれたやうな氣がして安堵の息を吐いたことである。

四人の男が、こわごわ、用心しながら、荷車から、その檻を下して、高い鼻をめぐらした、狭い裏庭の中へと運んだ。首の廻りのたるんでゐる赤いスウェーターを着た、倔強な男が出て来て、馭車の手帳にサインをして渡した。此の男が次の虐待者だな、とバックは腹で思つた。そしてバックは物凄く檻の横木

a fund of wrath 澤山の怒り。accumulate と a fund of とよく聯想が合ふ。

boded ill = promised ill.

fell foul of him = fell in collision with him; collided with him.

bundle = to put in a hurry.

sagged たるんだ。

the book = receipt book. 判取帳。

against the bars. The man smiled grimly, and brought a hatchet and a club.

"You ain't going to take him out now?" the driver asked.

"Sure," the man replied, driving the hatchet into the crate for a pry. There was an instantaneous scattering of the four men who had carried it in, and from safe perches on top the wall they prepared to watch the performance.

Buck rushed at the splintering wood, sinking his teeth into it, surging and wrestling with it. Wherever the hatchet fell on the outside, he was there on the inside, snarling and growling, as furiously anxious to get out as the man in the red sweater was calmly intent on getting him out.

"Now, you red-eyed devil," he said, when he had made an opening sufficient for the passage of Buck's body. At the same time he dropped the hatchet and shifted the club to his right hand.

And Buck was truly a red-eyed devil, as he drew himself together for the spring, hair bristling, mouth

grimly. こわく、不吉に、物凄く。

you ain't=You are not.

sure=yes; surely I am going to take him out now. Sure (アメリカンイジムで、「さうとも」といふ氣持の Yes の意に、用ゐる。或は單に Yes の時にも用ゐる。

for a pry. 木槌(テコ)として。

perches 鳥の止り木。

top the wall=top of the wall.

performance. 演技。

splintering=to split into long thin pieces.

surging=to move up and down or to and fro as in waves (of sea,

に向つて、彼自身を投げつけた。その男は意地悪さうにニヤリとした。そして、手斧と棍棒とを持つて來た。

「今、引出さうてんぢやあるまいな」と、馭者がきいた。

「出すのさ」と男は手斧を檻の中へ打込んで、こちあけやうとしながら云つた。

すると、檻を運んで來た四人の男はぱつと一度に散つて、高い塀の頂上の安全な場所から此の藝當を眺めやうといふのだ。

バツクは、裂けて行く木に、尙ほも飛掛つて、それに深く噛みつきながら、それをゆすぶつた。斧が外側に打込まれる場所には、彼は必ずその内側に居て、唸り咆えてゐた。赤いスウスターの男がそれにも構はず平氣で彼を引出さうとしてゐると、彼は物凄くも飛出さうとしてゐた。

「おい、赤目の悪魔！」バツクの體が、漸く通れるだけに、檻を開けてやりながら、男はいつた。同時に、彼は手斧を棄てて棍棒を右の手に持ちかへた。

バツクは、全く赤目の悪魔だつた。彼が身構へして、毛を逆立て、口からは泡を吹いて、血走つた眼にはぎよろぎよると

crowd, standing corn, emotion, etc.

snarl=(Of dog) make high-pitched quarrelsome growl.

growl=make guttural sound of anger.

anxious to.....せんと氣をもんでゐる。

getting him out 彼を取り出さうと。

sufficient=wide enough (こゝでは)

passage 通過。

shift=to change or wave from one position to another. 置き變へる。

drew himself together for the spring=飛びかゝらうと身構へしたこと。

foaming, a mad glitter in his bloodshot eyes. Straight at the man he launched his one hundred and forty pounds of fury, surcharged with the pent passion of two days and nights. In mid air, just as his jaws were about to close on the man, he received a shock that checked his body and brought his teeth together with an agonizing clip. He whirled over, fetching the ground on his back and side. He had never been struck by a club in his life, and did not understand. With a snarl that was part bark and more scream he was again on his feet and launched into the air. And again the shock came and he was brought crushingly to the ground. This time he was aware that it was the club, but his madness knew no caution. A dozen times he charged, and as often the club broke the charge and smashed him down.

After a particularly fierce blow, he crawled to his feet, too dazed to rush. He staggered limply about, the blood flowing from nose and mouth and

launch=hurl.

surcharged=overloaded; filled or saturated to excess.

his jaws were about to close on the man, その男にかみつかうとしてゐた。

check. 阻止する。

clip がちつとかむこと。

whirl. ぐるぐる渦を巻く。

fetching the ground on his back and side. 地面に叩きつけられたこと。「彼の背面にも側面にも地面を持ち來した」といふのが文字通り。

he was again on his feet 立ち上つた。

光るものがあつた。彼は二晝夜の間、閉ぢ込められてゐた狂熱で一層烈しくされた怒氣満身の百四十ポンドを其男めがけて直線にぶつつけたのであつた。空中に飛び上つて、彼の兩顎が其男に嚙付かうとする時、忽ち彼は一つのショツクを受けて、其體を食ひ止められ、がちつと、苦しさを、其の齒を喰で合せたのである。彼はグルグルと渦を巻いて逆とんぼに地上に轉がつたのである。彼は今まで、未だ曾つて棍棒なんぞでなぐられた事がないので、それが何であるかわからなかつた。吠えるやうな、また一層叫ぶやうな唸り聲を立てながら、彼は又もや起き上つてひらりと飛んだ。すると又もや一撃を食つて、碎かれたやうにぐたりと地上に倒れた。今度はこれが棍棒だなど知つたけれども、狂つた彼には何だつて構やしなかつた。十二回ばかりも彼は突撃した。しかしその度毎に棍棒が彼の突撃を打ち破つて、彼は散々になぐり据ゑられた。

特に激しい一撃を受けた後では、彼は、目がくらんで、駆け出すことも出来ず、いざつて歩いた。彼は鼻や口や耳から血

crushingly. 再起の出来ないほど、ひどく。

charge. 攻撃する。

as often=a dozen times. 同じ度数。

smashed him down 彼を投げつけた。

crawl to his feet 這ひつくばつて行つて立ち上つた。参考 they tottered to their feet. 第五章 47 節。(crawl=這ふ; to more slowly, dragging body along close to ground, or on hand; and feet)

daze=dazzle.

rush=run precipitately, violently, or with great speed.

stagger. よろめく(=lurch), ひよろつく(=totter).

limply. びつこ引き引き。

ears, his beautiful coat sprayed and flecked with bloody slaver. Then the man advanced and deliberately dealt him a frightful blow on the nose. All the pain he had endured was as nothing compared with the exquisite agony of this. With a roar that was almost lionlike in its ferocity, he again hurled himself at the man. But the man, shifting the club from right to left, coolly caught him by the under jaw, at the same time wrenching downward and backward. Buck described a complete circle in the air, and half of another, then crashed to the ground on his head and chest.

For the last time he rushed. The man struck the shrewd blow he had purposely withheld for so long, and Buck crumpled up and went down, knocked utterly senseless.

"He's no slouch at dog-breakin', that's wot I say," one of the men on the wall cried enthusiastically.

"Druther break cayuses any day, and twice on Sundays," was the reply of the driver, as he climbed on the wagon and started the horses.

Buck's senses came back to him, but not his strength. He lay where he had fallen, and from

sprayed. 霧を噴いた。

slaver 涎 (=saliva)

wrench. ひねる、振る。

crumple up. 皺くちやにする、皺をよらせる。

went down. すつかりまゐつて了つた。

slouch やくざ職人。(slang) inconsistent or slovenly worker or operator of performance (esp. is no slouch at this show, etc.; is no slouch.)

をしたとらせながら、その美しい毛並は血煙を立て、斑點となり、力なくよろめいて歩いた。さうすると男は進み寄つて、徐ろに、彼の鼻柱に恐ろしい打撃を加へた。この甚だしい苦痛に比較すれば、これまでに彼の受けた苦しみなどは物の數でもなかつた。その猙獰さが、まるで、獅子の様な唸り聲を以て彼は更にその男にぶつゝかつて行つた。しかし男は棍棒を右から左へ持ちかへて、冷かに彼の下顎を攫み、そのまゝ下の方へ、そしてまた後方に扭ちつた。バツクは空中に一つの輪を描き、更に半圓を描いて、地面に頭と胸とを打ちつけて倒れた。

これを最後と、彼はまた飛びかゝつた。すると、男はわざと今まで控へてゐた急所の打撃を彼に與へた。バツクは徹底的に感覺を失つて了ふまでになぐられて、くたくたに縮み上つて、すつかり參つてしまつた。

33. 「犬馴らしにかけちやあ、全くやくざ職人ぢやねえ。俺のいつてるた通りだ」と塙の上から見てゐた一人が感心して叫んだ。

「大將は毎日インディアンの小馬を馴らしてゐるんだものな。そして、日曜にはいつもの二倍もやるんだから。」馭者はさう答へて、荷馬車に乗つて、馬を走らせて行つた。

バツクの感覺は回復して來た。しかし、彼の力はなかなか回復しなかつた。彼は仆れたところに横たはつて、そこから

that's wot I say = that is what I say.

break cayuses. to train Indian ponies for the saddle. 馬を馴らすことな to break a horse, to break a horse to the reign (the bridle) と云ふ。

senses 感覺。

came back 戻つた。

but not his strength = but his strength did not come back to him.



there he watched the man in the red sweater.

“‘Answers to the name of Buck,” the man soliloquized, quoting from the saloon-keeper’s letter which had announced the consignment of the crate and contents. “Well, Buck, my boy,” he went on in a genial voice, “we’ve had our little ruction, and the best thing we can do is to let it go at that. You’ve learned your place, and I know mine. Be a good dog and all’ll go well and the goose hang high. Be a bad dog, and I’ll whale the stuffin’ outa you. Understand?”

As he spoke he fearlessly patted the head he had so mercilessly pounded, and though Buck’s hair involuntarily bristled at touch of the hand, he endured it without protest. When the man brought him water, he drank eagerly, and later bolted a generous meal of raw meat, chunk by chunk, from the man’s hand.

He was beaten (he knew that); but he was not broken. He saw, once for all, that he stood no

answers to the name of Buck=the dog is called Buck. Answer to (acknowledge, have) the name of X. バックと云へは返事をします。

consignment 送荷。

well 「さて」とか「さうか」とか云ふやうな時にも用ゐる。

genial 温和な (mild)、快活にする (cheering)、懇切な (kindly)

ruccion さわぎ。

let it go at that いゝにしてさふ、水に流してさふ。

all’ll=all will.

the goose hang high. (U. S.) Everything is good.

I’ll whale the stuffin’ outa you. 土手つ腹けやぶるぞといふやうな oath である。whale=beat soundly, flog ひどく打つ。stuffin’ は stuffing (蒲團などの詰め物)。outa=out of. 腹を打ちのめして出してさふぞといふことである。

赤いスウェーターの男をぢつと見てゐた。

「名は、バックに有之」と、男は、檻と、その内容との送荷のことを書いた酒場の親爺からよこした手紙の文句を獨語して、「おい、バック」彼は親しげな聲で續けた、「ちよつと一騒動やつたが、こんなこたあ根に持たねえが一番いゝぜ。お前もお前の立場が分つたらうし、俺も自分のことはちやんと知つてゐるんだ。おとなしくしろよ。そしたら何も厄介なこたあねえ。何も彼もうまく行くんだ。だが、いふこと聞かねえで見ろ。叩き殺して腸をひきづり出してやるぞ。わかつたか。」

彼は、さういひながら、あんなに酷く、なぐりつけたバックの頭を、恐れ気もなく、軽く叩いた。バックは男の手が觸れると思はず毛を逆立てたが、別に反抗もせず耐へてゐた。男が水を持つて来てくれると、一生懸命にがぶがぶと飲んだ。それから、その男の手から幾片となく生肉の御馳走をぐひ呑みにした。

彼は敗れたのだ(それは、彼は知つてゐた)。けれども、彼は馴らされたのではなかつた。兎に角彼は、棍棒を持った男には到底勝目がないと言ふ事をはじめて、知つたのである。彼は

understand?=do you understand?

pound=crush, braise, as with pestle; thump, pummel, with fists, etc. knock, beat, (thing to pieces, into a jelly, etc.); deliver heavy blows, fire heavy shot (at, on). 打ちのめす。

bristle. [brist] 逆立つ。

bolt ぐひのみにする。

chunk 塊片。chunk by chunk 一塊づゝ。

once for all=in final manner; definitely. 断然、今度ぎり、兎も角。I tel you once for all that this noise must cease 君に断然いふが、こんなさわがしい音をさせんな。they settled the matter once for all and left the place 彼等は断然その事を解決して、そこを去つた。

he stood no chance against a man with a club. 勝目がなかつた。

chance against a man with a club. He had learned the lesson, and in all his after life he never forgot it. That club was a revelation. It was his introduction to the reign of primitive law, and he met the introduction halfway. The facts of life took on a fiercer aspect; and while he faced that aspect uncowed, he faced it with all the latent cunning of his nature aroused. As the days went by, other dogs came, in crates and at the ends of ropes, some docilely, and some raging and roaring as he had come; and, one and all, he watched them pass under the dominion of the man in the red sweater. Again and again, as he looked at each brutal performance, the lesson was driven home to Buck: a man with a club was a lawgiver, a master to be obeyed, though not necessarily conciliated. Of this last Buck was never guilty, though he did see beaten dogs that fawned upon the man, and wagged their tails, and licked his hand. Also he saw one dog, that would neither conciliate nor obey, finally killed in the struggle for mastery.

Now and again men came, strangers, who talked excitedly, wheedlingly, and in all kinds of fashions

took on=put on; assumed. All nature takes on new life 自然が再び生氣を帯びる (東商 12); to takes on the scope of a continent 大陸ほどの廣さになる (福商 12)。

aroused これは all the latent cunning of his nature へかゝる。

as the days went by 時が経つにつれ。

one and all 残らず。one and all that live there get ill 住むものも住むものも、そこに住むものは残らず病気になる。

the lesson was driven home to Buck その教訓をバックはしみ

はじめて、此の事を知つたのである。其の後一生彼は決して之れを忘れたことはなかつた。その棍棒こそは神の啓示であつた。原始的法律の支配の下に彼を初めて紹介したのが、その棍棒であつたのである。彼はそれを、こちらから受けに行つたのである。生活の事實はより兇暴の相を取つて來たが、彼は恐れず其の真相に直面し、同時に呼び醒まされた彼の潜在的狡猾を盡くあらはして之れに向つたのである。日が経つと、檻に入れられたり、綱に繋がれたりして、外の犬共がやつて來た。或者は素直に、或者は彼の來た時と同じく荒れ狂つた。そして彼は、そこに來る犬が残らず赤いスウェーターの男の支配の下に置かれるのを見た。幾度も幾度も、この殘虐な演技が一々の犬に對して、行なはれるのを見てゐる間に、かうした教訓が深くバックの膽に銘じたのである。すなはち、棍棒を持つた男は立法者で、服従すべき支配者だ。が、必ずしも仲善くしてゐなくてもいい。服従してゐるさへすればいいのだ。——この事はバックが最後まで犯さなかつたところのものだ。尤も彼男にジャレついて、尾を振つて見たり、手を嘗めて見たりしてゐる敗殘の打ちのめされた犬共を彼は見たには見たが、彼れは、そんな事はしなかつた。男と優越權を争つて、ついに殺された一匹の犬を彼は見たけれども、彼は、そんな眞似もしなかつた。

時々、知らない男が、やつて來ては、赤いスウェーターの男に對して、興奮したり、お機嫌を取つたり、色々な眞似をして掛

じみ味つた。

conciliate=gaim (esteem, goodwill); pacify; win over (to one's side etc.); reconile (to conciliate anew).

fawn じやれる、うれしがらせる。(to flatter meanly)

wag their tails, 犬が喜んだ時の表情は日本人の考と同じである。

now and again 屢々。

wheedlingly 愛嬌ふりまいて。

to the man in the red sweater. And at such times that money passed between them the strangers took one or more of the dogs away with them. Buck wondered where they went, for they never came back; but the fear of the future was strong upon him, and he was glad each time when he was not selected.

Yet his time came, in the end, in the form of a little weazened man who spat broken English and many strange and uncouth exclamations which Buck could not understand.

"Sacredam!" he cried, when his eyes lit upon Buck. "Dat one dam bully dog! Eh? How moch?"

"Three hundred, and a present at that," was the prompt reply of the man in the red sweater. "And seein' it's government money, you ain't got no kick coming, eh, Perrault?"

Perrault grinned. Considering that the price (f

when he was not selected 選ばれて伴れて行かれなかつたのを喜んだのである。

little 小男なのをいふ。

weazened しなびた。

spat はき出した。(spit [つば吐く]の過去)

uncouth=(on'ku:θ) strange; clumsy

sacredam! =Sacred Dame! By Mary! これは swear である。「畜生!」といふにあたる。Damned! Confounded! などと同じ。

lit upon Buck=lighted upon Buck バックの上に(彼の眼が)輝いた。

dat one dam bully dog=that one is a damn bully dog. この dam は damn をわざと、なまつた風に書いたのである。damn は強める時に用ゐる俗語である。bully は first rate (すてきな)といふ Americanism である。

eh? 物をさく時用ゐる。He went there, eh? (あの人はあそこへ

合つてゐた。そして其の度に、金が渡されて、一匹の犬を、或は何匹かの犬を赤いスウェーターから引取つて行つた。バックは一體、あの連中は、どこへ行くのかしらと思つたりした。何故なら、彼等は決して二度と歸つては來なかつたからである。しかし將來の恐怖といふものが強くバックを襲つてゐた。そしてその度毎に、自分が選ばれなくてよかつたと心に喜んだのである。

だが、遂に彼の時が來た。その男は、小さな、しなびた野郎で、ブロクンな英語を吐き出すやうに話して、バックにはてんで分らない、色々の聞いたこともない異様な、きたない言葉を吐いてゐた。

「こいつあ、うめえぞ!」彼は、彼の眼がバックの上に落ちた時にかう叫んだ。「こいつあ素敬だ。ねえおい。一體いくらでえ?」

「三百ドルよ。そんでもよつほどのお愛相だぜ」と赤いスウェーターは即答した。「政府の金だい、ぶつぶついふもなあ、ありやしねえや、ねえ、ペロー」

ペローは、にやつと、笑つた。犬の需要が急に多くなつた

行つたのかい)の如し。Eh? は、こゝでは「すばらしい犬だ、ちやないか」といふこと。How moch?=How much?

a present at that おまけになつてゐるといふこと。at that は at that price といふこと。

prompt reply 即答。

seein'=seeing.

you ain't got no kick coming=you haven't got any protest coming. この ain't は俗語で have not である。have not got は have not と同じ。ain't got と no kick coming と double negative である。kick は a complaint 或は a protest の意味の Americanism である。kick は to kick と動詞にも、kick のやうに名詞にも用ゐる。(The American Language by H. L. Mencken. p. 92.)

grin. ふうんと云つた調子で、仕方なく、馬鹿見たいふ、齒を見せて、にやつと笑ふこと。

dogs had been boomed skyward by the unwonted demand, it was not an unfair sum for so fine an animal. The Canadian Government would be no loser, nor would its despatches travel the slower. Perrault knew dogs, and when he looked at Buck he knew that he was one in a thousand—“One in the t'ousand,” he commented mentally.

Buck saw money pass between them, and was not surprised when Curly, a good-natured Newfoundland, and he were led away by the little weazened man. That was the last he saw of the man in the red sweater, and as Curly and he looked at receding Seattle from the deck of the *Narwhal*, it was the last he saw of the warm Southland. Curly and he were taken below by Perrault and turned over to a black-faced giant called François. Perrault was a French-Canadian, and swarthy; but François was French-Canadian half-breed, and twice as swarthy. They were a new kind of men to Buck (of which he was destined to see many more), and while he

boom 景氣よく騰ること。

skyward=toward the sky; (soared sky high と云つてもよい)

fine 馬などの屈強な立派さをいふ。

One in ten t'ousand. 一萬疋の中に一疋あるかなかといふ代物だと云ふ事。thousand を t'ousand と無教育のものがよく發音するのでその發音をうつしたのである。

commented mentally. この comment といふ字は新聞や雑誌の社説などで論ずるのを comment するといふ。腹の中で批評して見たのである。commenting on the question editorially, the Times says..... など云ふ。

and he were. これは文法の破壊ではなく、Curly and he were と

ので犬の値段が、めつたやたらに騰つてゐるのだ。それを考へりやあ、こんな立派な犬に三百弗は高くはなかつた。カナダ政府は損もしたくなかつたし、また郵便物の送達が遅くなるのも欲しなかつた。ペローは犬の事をよく知つてゐた。そして、ペローがバツクを見た時に、こりやあ、千匹の中に、一匹あるかなしの奴だ、いや、一萬匹中の一匹だと、腹の中で批評したものだ。

二人の間に、金の受け渡しが、されるのを見てゐたので、カーリーといふニューファウンドランド種の善良な性質の犬と彼れとが、あのしなびつこけた小男に連れられて行つた時でも、バツクは別に驚きもしなかつた。それきり赤いスウェーターを着た男をもう再び見なかつた。そして又カーリーと彼とが、ナワール號のデツキから見てゐると、シアトルの町が、だんだん遠ざかつて行くのを眺めてゐたが、それがまた暖い南部地方の見納めでもあつた。カーリーと彼とはペローに連れられて、フランソアといふ色の黒い大男に引渡されたのである。ペローはフランス系のカナダ人で色が黒かつた。けれどもフランソアはフランス系カナダ人とイデアンの雑種で、二倍も色が黒かつた。バツクに取つては彼等は全く新しい種類の人間であつた(バツクはまだまだかういふ多くの男達に出會ふやうに運命づけられてゐた)。そしてバツクは彼等に對して何等の親しみを感じなかつた。が、それでも、彼等に對して正直に尊

なるのである。

in the red sweater. この in は着物を着てゐる時用ゐる。a man in white と云へば白い着物の人といふこと。

French-Canadian. カナダに住むフランス系の人たちのこと。たとへば米國合衆國に居るドイツ系の人を German-Americans といふ。ハイフンがつくので、かういふ人をアメリカでは hyphenated American とも、hyplens とも云ふ。

swarthy 色の淺黒いのをいふ。清水庭球選手が Davis Cup 戦に出た時に、清水の顔を swarthy だと書いてゐた。

of which. これは many more につく。

developed no affection for them, he none the less grew honestly to respect them. He speedily learned that Perrault and François were fair men, calm and impartial in administering justice, and too wise in the way of dogs to be fooled by dogs.

In the 'tween-decks of the *Narwhal*, Buck and Curly joined two other dogs. One of them was a big, snow-white fellow from Spitzbergen who had been brought away by a whaling captain, and who had later accompanied a Geological Survey into the Barrens.

He was friendly, in a treacherous sort of way, smiling into one's face the while he meditated some underhand trick, as, for instance, when he stole from Buck's food at the first meal. As Buck sprang to punish him, the lash of François's whip sang through the air, reaching the culprit first; and nothing remained to Buck but to recover the bone. That was fair of François, he decided, and the half-breed began his rise in Buck's estimation.

The other dog made no advances, nor received any; also, he did not attempt to steal from the

none the less. これは前と同じく、矢張り、それにも拘らず (notwithstanding) 等の意味。こゝでは、「ではあつたが」といふこと。

administering justice. 正しい處置を與へる。

in the way of dogs. この way は line of occupation, branch of business のこと。He is in the grocery (stationery) way 彼は八百屋(文房具屋)をやつてゐる。in the way of dogs 犬にかけては。

'tween-decks 甲板中部 (space between decks)。quarter-deck は後甲板で、大船では高級船員室や上等客室のあるところ。forecastle deck 前甲板。main deck 正甲板。lower deck 下甲板。upper deck 上甲板。

敬するやなになつてゐた。バツクは忽ち、ペローとフランソアとは公平な男で、やりぶりが正しいこと、公平な處置を與ふるに平靜で偏破のないことを知つた。また犬のことにかけてはこの二人は誠に賢明で犬に馬鹿にされることのない事を、知つたのである。

ナーワール號の甲板の真中で、バツクとカーリーとは、二匹の別の仲間に加はつた。その一匹はスピッツベルゲンから來た雪のやうに白い大きな犬で、捕鯨船の船長に連れて行かれたことかあり、また地質調査の一行について、不毛地方に行つた事があるのである。

彼は、親しみ易い性質だが、中々、狡猾な奴で、人に笑ひかけてゐながら、何かしら蔭で計畫を企らむといふやうな奴で、たとへて云へば、初めて船で食事をした時に、バツクの食べ物を盗んだのだ。バツクが、こらしてやらうと彼に飛掛つた時フランソアの鞭の音がひゆうつと鳴つて、鞭はまづ犯罪者に飛んで行つた。バツクはそこで、其骨を取り返してそれで済んだ。フランソアのこの處置は公平だとバツクは心に決めた。それから此の混血兒のフランソアをバツクが非常に高く買ひ初めたことである。

もう一匹の方の犬は、退嬰的の犬で、自づから、出しやばつて出ることもせず、又こちらから出向いて行つても、すつと

Spitzbergen [spits'bergen] ノールウエーの北四百マイルにある the Arctic Ocean の島。

barrens 不毛の地。

the while = while.

underhand trick 誰れがしたか分らぬやうな陰謀術策。

lash. 鞭のしなしたる部分。

culprit. 犯罪者。

nothing remained to Buck but to recover the bone 骨(食物の残りの骨)を取りかへした事がすんだことといふ。

newcomers. He was a gloomy, morose fellow, and he showed Curly plainly that all he desired was to be left alone, and further, that there would be trouble if he were not left alone. "Dave" he was called, and he ate and slept, or yawned between times, and took interest in nothing, not even when the *Narwhal* crossed Queen Charlotte Sound and rolled and pitched and bucked like a thing possessed. When Buck and Curly grew excited, half wild with fear, he raised his head as though annoyed, favored them with an incurious glance, yawned, and went to sleep again.

Day and night the ship throbbed to the tireless pulse of the propeller, and though one day was very like another, it was apparent to Buck that the weather was steadily colder. At last, one morning, the propeller was quiet, and the *Narwhal* was pervaded with an atmosphere of excitement. He felt it, as did the other dogs, and knew that a change was at hand. François leashed them and brought them on deck. At the first step upon the

all he desired=what he desired.

between times. その間に。

roll. 船が左右に揺れること。

pitch. 船がずうつと沈むやうに揺れること。rolling は割合に平氣であつても、pitching が来ると、船よひを催すものである。

bucked=acted like a backing horse, which by plunging jump; on stiff fore legs tries to throw its rider. といふことである。元來 buck といふ字は、(Of horse) jump vertically with back arched and feet drawn together 馬が背を曲げ足を揃へて立體的に跳ね返へることで、人を落さうとして馬があげられることも buck といふ。

外らして了ふといふ性質であつた。彼は新來者達から食物を盗まうともしなかつた。彼は陰鬱な不機嫌な奴で、カーリーに對して、自分は皆なから離れて、うつちやつて置いて貰ひたい、もしさうでないと面倒な事が起るかも知れないといふ事を、明かに示したことである。デーヴといふのが彼の名であつた。彼の生活といへば食つて寝て、その間に欠伸をして、何事にも興味を感じず、ナーワール號がクキーン・シヤールロット・サウンドにかゝると、船は左右上下に揺れ出して来て、物につかれたものゝ様に飛び上つたりした時でさへも、さうであつた。バツクとカーリーとが、半ば恐怖で互に興奮してゐた時でも、彼はうるさいと言つた風にたゞ其の頭を一寸もたげたきりであつた。氣の無い目付きで彼等をちらりと見たきりで、欠伸をして、そのまゝ、又寝てしまつたのである。

晝も、夜も、船は、推進機の疲れを知らぬ鼓動と、一所に、震動してゐた。毎日同じ事を繰返してゐたが、たゞ氣候が段々日増しに、寒くなつて行くのがバツクにも、はつきりと、わかつた。遂に或る朝、推進機が音を止めて、ナーワール號は興奮の雰圍氣に包まれて了つた。バツクはそれを感じた。他の犬共も同じ様にそれを感じた。彼は何か一つの變化が手近に迫つた事を知つたのである。フランスは彼等に革紐をつけて甲板に連れて行つた。冷たい表面に最初の足を踏み出すと、バツクの足は丁度泥の様なとろとろの軟かい白い物の中へうづまるのであつた。彼は鼻を鳴らして飛び退いた。この白い物は澤山に空

possessed. 惡魔に取りつかれたる。He is possessed by a devil (an idea) 惡魔(何か考)に取りつかれてゐる。He is possessed 彼はどうかしてゐる。

incurious=devoid of curiosity, heedless; careless.

day and night=night and day 晝も夜も、夜晝。

to the tireless pulse. プロプラの音に合して。

pervade=spread through; permeate; saturate, (often figuratively of influences etc.)

leash. 犬につける革紐、又は革紐で犬をつなぐ。

cold surface, Buck's feet sank into a white mushy something very like mud. He sprang back with a snort. More of this white stuff was falling through the air. He shook himself, but more of it fell upon him. He sniffed it curiously, then licked some up on his tongue. It bit like fire, and the next instant was gone. This puzzled him. He tried it again, with the same result. The onlookers laughed uproariously, and he felt ashamed, he knew not why, for it was his first snow.

mushy. お粥のやうに軟かな。
with a snort 鼻をならして。
stuff もの。
bit=bite の過去。bite はかむ、(serpents, fleas などが) さす、(寒さが) しみる、(霜などが) 傷(や)く、腐蝕する (=corrode)。

中からも降つてゐた。彼は身體をばさばさと慄はして、その白いものを振り拂つたが、なほ後から後から身體の上に降りかゝつた。彼はそれを物珍らしさうに、嗅いで見た。それから少しばかりを舌で嘗めて見た。それは火の様で焼けどするやうだつたが、次の瞬間には解けて消えて了つた。何だらうと彼は思つた。もう一度やつて見たが同じ結果だつた。側で見てゐた人々は嵐のやうに笑つた。バツクは顔を赤くした。が、彼には何が何だか分らなかつた。何故ならば、それは彼に取つて最初知つた雪であつたからだ。

the next instant was gone=the next moment it was gone, the next moment it vanished, melted away.

puzzle. 惑はした(どうしたのか不思議だと)

he knew not why=he did not know why.

II

THE LAW OF CLUB AND FANG

Buck's first day on the Dyea beach was like a nightmare. Every hour was filled with shock and surprise. He had been suddenly jerked from the heart of civilization and flung into the heart of things primordial. No lazy, sunkissed life was this, with nothing to do but loaf and be bored. Here was neither peace, nor rest, nor a moment's safety. All was confusion and action, and every moment life and limb were in peril. There was imperative need to be constantly alert; for these dogs and men were not town dogs and men. They were savages, all of them, who knew no law but the law of club and fang.

He had never seen dogs fight as these wolfish creatures fought, and his first experience taught him an unforgettable lesson. It is true, it was a vicarious experience, else he would not have lived to profit by it. Curly was the victim. They were camped near the log store, where she, in her

Dyea. これは Alaska にあり、いよいよ Dyea から、Buck の苦しい生活が始まるのである。

jerk = pull, twist, etc.

flung = fling (投げる) の過去分詞。

primordial. 原始的。

limb 手足。to escape with life and limb (without grave injury)

二、棍棒と牙との律法

ダイヤ海岸に於けるパツクの最初の日は悪夢そのもののやうであつた。二十四時間中、ショツクを感じたり、呆氣に取られたりする事ばかりであつた。彼は文明の中心から急に引っぱり出されて、原始生活の真ん中に投げ込まれたのであつた。何にもしず、一日中日光の恵みを受けてゐた生活、ぶらついてゐて怠屈したやうな悠長な生活とは全くちがつた生活であつた。こゝには平和もなく、休息もなく、一瞬間の安全さへも無かつた。凡ては無秩序な混乱であり、活動であつた。そして常に生命は危険の中にあつた。常に油断無く敏捷に物の響きに應ずるが如く警戒をしてゐるのが何より必要であつた。といふわけは、犬も文明な都會の犬でなく、人もまた文明な都會の人ではなく、つまり彼等は凡て野蠻な連中であつたからである。棍棒と牙との法律の外には如何なる法律も知らなかつたのである。

彼は未だ曾て、これ等の狼のやうな、犬共のやるやうなはげしい闘争を見た事は一度だつて無かつた。そして彼の最初の経験が彼に忘れる事の出来ない教訓を教へたのである。尤も其の経験は彼れの身代りに他の者がした経験で、他の犬のしてゐることを見てゐただけで、自身その渦中に投じたわけでもなかつた。眞實、さうでもなければ彼は生きて其の利益を受けるといふ事が出来なかつたにちがひない。その犠牲者はカーリーであ

alert. 敏捷なる、警戒してゐる。

vicarious experience. Experience gained not from participation in the event by noticing what happened to another dog. この vicarious といふ語は、acting, done, for another, as vicarious work, vicarious suffering. 彼れがした経験でなく、身代りに他の犬がした経験といふこと。

friendly way, made advances to a husky dog the size of a fullgrown wolf, though not half so large as she. There was no warning, only a leap in like a flash, a metallic clip of teeth, a leap out equally swif, and Curly's face was ripped open from eye to jaw.

It was the wolf manner of fighting, to strike and leap away; but there was more to it than this. Thirty or forty huskies ran to the spot and surrounded the combatants in an intent and silent circle. Buck did not comprehend that silent intentness, nor the eager way with which they were licking their chops. Curly rushed her antagonist, who struck again and leaped aside. He met her next rush with his chest, in a peculiar fashion that tumbled her off her feet. She never regained them. This was what the onlooking huskies had waited for. They closed in upon her, snarling and yelping, and she was buried, screaming with agony, beneath the bristling mass of bodies.

So sudden was it, and so unexpected, that Buck

she=Curly.

a husky dog the size of a fullgrown wolf. この the size はすぐ上の a husky dog につくのである。この size の a husky dog といふことである。

not half so large as she. 彼女すなはちカーリーの大きさの半分もない。not so large as she ならば、カーリーほど大きくないこと、half があるので、半分もないこと。

warning 警告。無警告 (without warning) で飛びかゝつたのである。

つた。彼等は材木置場の側にキヤムプをしてゐるが、カーリーは馴々しく、北地方で櫓など引くあるハスキー犬に言ひ寄つたのである。その犬は、その大きさカーリーの半分ほどもなかつたが、生長しきつた狼ほどの大きさであつた。彼は何の豫告も與へず、電光の閃きの様に一と飛び飛び掛つて、金属性のクリップのやうに牙をがちりと食ひ込んだが、又同じやうに素早く飛びのいた。そうしてカーリーの顔は眼から顎まですばりと引裂かれたのである。

一撃を與へておいて、とんで逃げた。これが狼の戦ひのやり方だ。だが、この外に、まだ澤山あるにはあつた。三四十匹のハスキーがその場に駆けつけて、戦闘者の周囲をまるく取りまいて、一心に黙つて視てゐたのである。バツクにはどうして皆の犬が黙つて熱心に視まもつてゐるかが分らなかつた。又何故彼等が熱心に舌なめづりしては御馳走を待つてゐる風かといふこともバツクには分らなかつた。カーリーは敵に向つて突進した。すると、敵は再び一撃を加へて、飛び退いた。彼はカーリーの再度の突撃を彼の胸を以て迎へた。ある特別の方法でカーリーを轉がした。カーリーは最早再び起上る事が出来なかつた。これこそ、見物してゐた三四十匹のハスキーが待ち設けてゐたところのものであつた。彼等はカーリーにぢりぢりと近づいて行つた。そして、吠え、唸つたのである。カーリーは苦悶の叫びをあげながら、毛を逆立てて勢込んだ犬群のうようよと集つた中に埋められてしまつた。

それは餘りにも急であり、豫期せざることであつた。バツク

to strike and leap away 攻撃しておいて跳んで逃げる。

in an intent and silent circle 圓陣を作つて(熱心に、黙つて見てゐる)

chops (pl.)=chaps. 顎 (jaws), 頬 (cheeks), 下顎には片頬 (chap), たとへば pork chop. この lick one's chops は舌鼓を打つて(食べる時)、涎を流して待つ(御馳走を豫想して)。

They closed in upon her. カーリーに對して圓陣を狭めて行つた。

buried. 他の犬の下になつて了つたこと。

was taken aback. He saw Spitz run out his scarlet tongue in a way he had of laughing; and he saw François, swinging an axe, spring into the mess of dogs. Three men with clubs were helping him to scatter them. It did not take long. Two minutes from the time Curly went down, the last of her assailants were clubbed off. But she lay there limp and lifeless in the bloody, trampled snow, almost literally torn to pieces, the swart half-breed standing over her and cursing horribly. The scene often came back to Buck to trouble him in his sleep. So that was the way. No fairplay. Once down, that was the end of you. Well, he would see to it that he never went down. Spitz ran out his tongue and laughed again, and from that moment Buck hated him with a bitter and deathless hatred.

Before he had recovered from the shock caused by the tragic passing of Curly, he received another shock. François fastened upon him an arrangement of straps and buckles. It was a harness,

taken aback. 驚愕した。

swing 斧でなぐらうとする時、swing してかゝる。人を拳固でなぐる時も fist を swing する。pitcher が ball を投げる時 swing する。

mess=mess; company of persons who take meals together, esp. (Army, Navy) each of several parties into which regiment or ship's company is divided.

limp=wanting in energy.

So that was the way=Thus it was the way they did.

see to it それに氣をつける。

deathless=imperishable.

straps and buckles 革と締め金。犬をしぼつてゐる革に、いろいろ

は全く愕然として了つた。彼はスピッツが大聲で笑ふ時のやうに深紅の舌を突き出してゐるのを見た。また彼はフランスが斧を風車のやうに振りながら、犬共が、どやどやしてゐる中へ飛込んで行くのを見た。棍棒を持つた三人の男は、彼に手傳つて犬共を追散らした。それは、またたくの間の出来事であつた。カーリーがまるつてから、二分間経つて、カーリーを襲撃した犬共はその最後の一匹まで棍棒でもつて追拂はれて了つた。けれども、カーリーは血だらけに、踏みにじられた雪の上に呼吸も絶え絶えに横はつてゐた。殆んど文字通り、八つ裂きにされてゐた。そして顔の眞黒な混血兒のフランスがカーリーの傍に突立つて、恐ろしく咀ひの言葉を怒鳴りつづけてゐた。この光景はその後幾度となく、バツクの夢を悩ましたものだ。全く凡てがそんな風であつた。フェア・プレーとか公正などいふことは少しもなかつた。一度倒れたら、それきりである。よし、俺は決して負けないぞ、とバツクは決心した。スピッツはまた舌を突き出して聲をあげて笑つた。その時からバツクは心から盡きざる憎悪の念を以て彼を憎んだ。

カーリーの悲劇的最後まで受けたシヨツクが、まだ回復しない中に、彼は他の打撃を受けた。フランスは金具の付いた革帯を彼の身體に縛りつけた。それは丁度自分の居たサンタ・クララ・ヴァレーで馬丁達が馬に取り付けてゐるのを見た

締め金の金具がついてゐる。それをちやんと、一に締め金で、とめたものが、一つの arrangement である。arrangement は整頓、整理、(服製などの)飾り付け、排列、整列などの意味。

harness. 馬が荷車につけられる輓具をいふ。人力車なら棍棒にあたるものが、馬車では馬のために必要な部分で、馬はそれに結びつけられて、車を引くのである。それから die in harness (職にたふれる)、または in harness (日目の仕事に従事して)などの熟語が出来てゐる。in harness は in the routine of daily work で、馬車馬のやうに働くことである。わき目をふるわけに行かず、きめられた通りに毎日毎日同じ事をしてゐるのが in harness である。

such as he had seen the grooms put on the horses at home. And as he had seen horses work, so he was set to work, hauling François on a sled to the forest that fringed the valley, and returning with a load of firewood. Though his dignity was sorely hurt by thus being made a draught animal, he was too wise to rebel. He buckled down with a will and did his best, though it was all new and strange. François was stern, demanding instant obedience, and by virtue of his whip receiving instant obedience; while Dave, who was an experienced wheeler, nipped Buck's hind quarters whenever he was in error. Spitz was the leader, likewise experienced, and while he could not always get at Buck, he growled sharp reproof now and again, or cunningly threw his weight in the traces to jerk Buck into the way he should go. Buck learned easily, and under the combined tuition of his two mates and François made remarkable progress. Ere they returned to camp he knew enough to stop at "ho," to go ahead at "mush," to swing wide on the bends, and to keep clear of the

at home これは I の Into the Primitive の初めの三四章をくり返し読めば分る。

firewood=wood prepared for fuel. 薪。fuel は燃料。oil fuel 軍艦などの石油燃料。faggots は a bundle of sticks or twigs bound together as fuel.

buckle down 熱心に従事する。

by virtue ofによりて。

やうな、一つの挽具であつた。そして馬が働かされるのを彼は見てゐたが、それと同じやうに、彼も、また、さうして働かされたのである。彼は川の流域に縁取つた森へ行つて、そこから薪を積んで歸るフランソアを橇に乗せて、引ばつて行くのであつた。それが、こんな風に、駄馬の役に追ひ使はれるといふ事は、バツクの自尊心をひどく傷つけたが、彼はそれに反抗するには、餘りに賢明であつた。彼は意志を以て、熱心にその仕事をした。全く新しいそして勝手の分らない仕事ではあつたが、彼は全力を盡くしたのである。フランソアは嚴格で、一々待つたなしに即座に、命令に服従することを要求し、又その鞭の力に依つて、直ちに彼のいふことに服従することを強制したのであつた。橇祭の挽子として経験のあるデーヴは、バツクがやり損なひをする度に、彼の後脚を咬むのであつた。スピッツは同じやうな経験あるリーダーであつた。彼はバツクがやり損ひのある度にいつもバツクの傍へやつて来て叱るといふわけには行かなかつたので、時々鋭い唸りを以てバツクをきめつけたり、或は橇を引きながら自分の身體の重みをわざと挽綱に投げかけて、バツクを正しい道に踏み戻らせたりするなど、流石に助才なかつた。バツクは容易に覚え込んで、この二疋の仲間とフランソアとの共同教練の下に迅速な進歩をした。もう一行がキャンプに歸るまでには、バツクは「ホウ」で止まり、「マツシュ」で進み、道の曲つたところでは幅廣く廻り、下り坂を自分たちの背

nip=pinch, squeeze sharply; b.te.

leader 先頭に立つ犬。

get at=reach.

trace=each of the two side straps or chains by which a horse draws a vehicle. In the traces=in harness (lit. and fig.) 車を引きながら。

Ere=before.

bend. 道や川などの曲つてゐるところ。

wheeler when loaded sled shot downhill at their heels.

"T'ree vair' good dogs," François told Perrault. "Dat Buck, heem pool lak hell. I tich heem queek as anyt'ing."

By afternoon, Perrault, who was in a hurry to be on the trail with his despatches, returned with two more dogs. "Billee" and "Joe" he called them, two brothers, and true huskies both. Sons of the one mother though they were, they were as different as day and night. Billee's one fault was his excessive good nature, while Joe was the very opposite, sour and introspective, with a perpetual snarl and a malignant eye. Buck received them in comradely fashion, Dave ignored them, while Spitz proceeded to thrash first one and then the other. Billee wagged his tail appeasingly, turned to run when he saw that appeasement was of no avail, and cried (still appeasingly) when Spitz's sharp

T'ree vair' good dogs=three very good dogs. three を tree のやうに發音する癖をうつしたのである。three を tree のやうに言つたり very を vair のやうに言つたりするものは、カナダばかりでなく、アメリカの無教育のものの中には随分ある。

Dat Buck, heem pool lak hell=that Buck, him pull like hell=that Buck, his pull like hell=that Buck's pull is strong like hell=Buck pulls like hell. この like hell はアメリカの俗語で、強める時に用ゐる。

I tich heem queek as anyt'ing=I teach him quick as anything. この as anything とか like anything は「非常に」といふ俗語。I teach him quick=he learns quick.

By afternoon 午後までに。午後 in the afternoon. 夕方近く towards evening. その晩 that night. 夜に a night. 夜おそく late at night.

後から重い櫓が射るやうに走り下る時には、櫓祭の挽子をさけて行くなどといふことをすつかり呑み込んでしまつた。

「こいつらは、ほんとに、素敵にいゝ犬だ」とフランソアはペローに話した。「あのバツクの野郎と來たら、あの底力で挽きやがるんだ。何でも、ちき、覚え込んで了ふこたあ、えれえ」

午後までに、公文書の傳達を急いでゐたペローは更に別の二匹の犬と一所に歸つて來た。その犬の名は、ピリーとジョウであつた。この犬は正に兄弟で、二匹共純粹のハスキー種であつた。同じ母親の子でありながら、彼等は晝と夜程も異つて居た。ピリーの、たつた一つの缺點は、性質の善良すぎる事であつた。が、ジョウは全くその正反對で、人の悪い、我儘な質で、絶えず唸つてばかりゐて、悪意の目付をしてぢろぢろ見てゐた。バツクは別に改まつた風もせず、友達といふ風で彼等を迎へ、デーヴは全く彼等を無視した。然るにスピッツは一疋づつ順々にやつゝけに掛つた。ピリーは哀訴するやうに、尾を振つて見たが、其の哀訴が何の役にも立たないと知ると、今度は逃げ出したものである。そしてスピッツの鋭い齒が彼の横腹を噛み裂いた時、もう一度哀訴するやうに、泣き叫んだ。併し如

朝早く early in the morning. 毎朝 every morning. 朝から晩まで from morning to night; from morning till night.

malignant. 悪意の、意趣をふくんだ。

fashion. 様子、風。

thrash. 叩きのめす。

Wag his tail. 喜んだり、人に気に入らうとしたりする時の犬の表情。日本でも「犬が尾をふる」といふ。"By gestures—the cat rubs against you when she is pleased, and the dog wags his tail, while children naturally nod or shake their head when they want, or do not want, anything, and clap their hands and dance about when pleased, or kick and wriggle when angry or disappointed." [The Romance of Language. By Alethea Chaplin. p. 4.]

teeth scored his flank. But no matter how Spitz circled, Joe whirled around on his heels to face him, mane bristling, ears laid back, lips writhing and snarling, jaws clipping together as fast as he could snap, and eyes diabolically gleaming—the incarnation of belligerent ferocity. So terrible was his appearance that Spitz was forced to forego disciplining him; but to cover his own discomfiture he turned upon the inoffensive and wailing Billee and drove him to the confines of the camp.

By evening Perrault secured another dog, an old husky, long and lean and gaunt, with a battle-scarred face and a single eye which flashed a warning of prowess that commanded respect. He was called Sol-leks, which means the Angry One. Like Dave, he asked nothing, gave nothing, expected nothing; and when he marched slowly and deliberately into their midst, even Spitz left him alone. He had one peculiarity which Buck was unlucky enough to discover. He did not like to be approached on his blind side. Of this offence Buck

scored his flank. 彼のわき腹をかみさいた。

circle. 攻撃する前威嚇するかの如く、そのものまはりを、ぐるぐるまはること。a circle は幾何學的の圓、round は圓味ある圓。形容詞にして a round eye, a round ball など。それにつれて Joe が、また、自分のまはりをぐるぐるまはる Spitz に應じて、自分も小さい圓をまがいて廻つたこと。

diabolically. 魔性的に。

forego=forgo 無しですませる (go without), 見合せ。

disciplining. 高等學校や軍隊で、新米を discipline するといつて、いろいろ、威嚇したりする風が今でもある。

何ほどスピッツが感嚇するやうにジョーの周圍をぐるぐる廻つたところで、ジョーもまたぐるぐるそれにつれて同じ場所で廻つて彼に立向つたのである。ジョーは首筋の毛を逆立たせてゐた。耳を立て、唇をびくびくさせ、唸りつけ、兩頬をがくがく急速に噛み合せてゐた。そして、魔性的に眼を輝かせてゐた。眞に恐るべき戰鬥的恐怖の權化であつた。此の彼の有様の凄まじさに、スピッツも止むなく彼に手を下し兼ねてゐたが、その不體裁を蔽ふために、敵意を示さず哀訴してゐるビリーに喰つてかゝり、彼をキヤムプの中へと追ひ込んだのである。

夕方までは、ペローは、もう一匹の犬を得た。年取つたハスキーで、身體が長く、瘦せてゐて、骨と皮ばかりになつてゐる。顔には戰鬥の傷痕があり、片目で、それが勇氣の兆として、見るものに尊敬の念を起させた。彼はソルレクスといふ名で、「怒りつほい奴」といふ意味だつた。彼はデーヴと同じく、何ものをも求めず、何物をも與へず、また何ものをも期待しなかつた。彼が悠々と彼等の間に進み出た時、スピッツさへも手出しをしなかつた。彼には一つの特種な癖があつた。それをバツクは不幸にも發見したのである。つまり、ソルレクスは潰れた方の眼の方に他のものゝ近寄るのを嫌つたことである。ところがバツクは少しも、それを知らずにこの罪を犯して、急にソル

discomfiture, 敗北 (defeat), 潰走 (rout), 挫折 (frustration), 狼狽 (confusion), 失望 (disappointment).

gaunt=lean, haggard; grim or desolate looking. 骨と皮ばかりにやせさらばひたる。

a warning of prowess 勇氣のあることを示してゐて、馬鹿にしたらやつつけるぞといふところがあるのである。また palpitation is a warning of heart trouble (動悸は心臓の悪い證據だ) といふやうなこともいふ。

prowess=valour; gallantry.

was unwittingly guilty, and the first knowledge he had of his indiscretion was when Sol-leks whirled upon him and slashed his shoulder to the bone for three inches up and down. Forever after Buck avoided his blind side, and to the last of their comradeship had no more trouble. His only apparent ambition, like Dave's, was to be left alone; though, as Buck was afterward to learn, each of them possessed one other and even more vital ambition.

That night Buck faced the great problem of sleeping. The tent, illumined by a candle, glowed warmly in the midst of the white plain; and when he, as a matter of course, entered it, both Perrault and François bombarded him with curses and cooking utensils, till he recovered from his consternation and fled ignominiously into the outer cold. A chill wind was blowing that nipped him sharply and bit with especial venom into his wounded shoulder. He lay down on the snow and attempted to sleep, but the frost soon drove him shivering to his feet. Miserable and disconsolate, he wandered about among the many tents, only to find that one place was as cold as another. Here and there

unwittingly 知らずに。unwittingly guilty 知らないで罪を犯す。即ち Sol-leks の眼の見えない方に知らないで近よること。

slash 目茶目茶に切る (make random cuts) 細長く切る (slit)

for three inches up and down 深さ三インチ。up and down = vertically 上から下へ。顔などをずうと切つて上から下へ顔に傷がつけば cut his face for two inches up and down である。

glow 赤々と輝く (らうそくの火のやうに)

レクスに食つてかゝられ、肩のあたりを骨に達するまで縦に三インチ程、噛み裂かれて始めて、自分の不注意を悟つた。その後バツクは彼の潰れた眼の方に近づくことを避けたので、彼等の友情は最後まで少しも面倒な事は起らなかつた。彼のたゞ一つの野心と思はるゝものは、デーヴのそれと同じく、打棄つておいて貰ひたい事であつた。しかし事實は、——これはバツクが、後になつて知つたことだつたが——彼等は一つ、もつと重大な野心を持つてゐた。

その晩、バツクは睡眠といふ大問題に逢着した。テントは、らうそくの火に照らされて、白く廣がれる平野の真中に暖くほんのり赤くかゞやいてゐた。さうして彼が當然の事として入つて行くと、ペローとフランソアとがクツキングの道具を振上げながら、口汚く怒鳴りつけるので、彼はすつかり驚いて了つたが、やつと、それから回復すると、意氣地なくも外の寒さの中へ逃げ出した。身を切るやうな寒い風が吹いて来て、傷ついた肩の中へ特別の毒液を浸み込ませて、うづゝいた。彼は雪の上に寝そべつて、眠らうとしたが、間もなく霜のために、全身がふるふる慄へて眠られなかつた。哀れにも、力を落して、彼は多くのテントの間をさまよつたが、何處に行つてもただ同じ様に堪へられない寒さであつた。時々あちこちで野犬が彼に突掛つて来たが、彼は首筋の毛を逆立たせ、唸つて (何故なら、彼

white plain 雪が積んでゐる原野が白いからである。New York の郊外に White Plains といふ景色のいゝところがある。クリスマスの繪葉書などに、眞白な野の末に窓が見えて赤々と輝いてゐる圖案などがある。

ignominiously 不名譽 (dishonour) にも disgracefully.

disconsolate = sorrowful; sad. 彼に妨害を加へず彼に行き過ぎしめた。

savage dogs rushed upon him, but he bristled his neck-hair and snarled (for he was learning fast), and they let him go his way unmolested.

Finally an idea came to him. He would return and see how his own team-mates were making out. To his astonishment, they had disappeared. Again he wandered about through the great camp, looking for them, and again he returned. Were they in the tent? No, that could not be, else he would not have been driven out. Then where could they possibly be? With drooping tail and shivering body, very forlorn indeed, he aimlessly circled the tent. Suddenly the snow gave way beneath his fore legs and he sank down. Something wriggled under his feet. He sprang back, bristling and snarling, fearful of the unseen and unknown. But a friendly little yelp reassured him, and he went back to investigate. A whiff of warm air ascended to his nostrils, and there, curled up under the snow in a snug ball, lay Billee. He whined placatingly, squirmed and wriggled to show his good will and intentions, and even ventured, as a bribe for peace, to lick Buck's face with his warm wet tongue.

team-mates. 縄を引く同じ仲間の犬。

making out=managing to do.

else=otherwise.

Something wriggled under his feet. 何か足許で、うねうねしてゐた、蛇だと思つたのである。

whiff=puff of air, smoke, odour (want of a whiff of fresh air).

curled up へびのやうに丸くなつて。

は何でもすばやく心得て了ふのであつた)、別に大した妨害も受けずに行き過ぎることが出来た。

最後に一つの考が浮んだ。彼は歸つて自分と同じ組の犬共が苦しみながらどんなにしてやつてゐるかを見やうとした。彼の驚いた事には、彼等は皆居なくなつて了つてゐることだつた。も一度彼は大キャンプの間をさまようて彼等を尋ねまはり、そしてまた、元のところへ歸つて來た。彼等はテントの中にもゐただらうか? 否、そんな筈はない。そんなら彼が追出される筈がない。では一體彼等は何處に居たゞらうか? 尾をだらりと垂れて、身をふるはせながら、如何にも、もう希望のない様子で彼はテントのまわりをあてどもなく、ぐるぐる廻つた。突然雪が彼の前足の下でくづれて、彼はその中にのめり込んだ。彼の足下に何かどうごめいてゐる。彼は此の見えざる、そして知られざる者の正體は何かと、恐ろしさに毛を逆立て唸りながら、跳び退つた。然るに親しげな、小さな鳴聲が聞えて來たので、胸をなで下ろして、何であらうかと立戻つて見た。一筋の暖い息吹が彼の鼻孔に昇つて來た。そして、そこの雪の下に、ちんまりした珠のやうにまるまつこくなつて、ピリーが寝てゐた。彼は、なだめるやうに、鼻を鳴らして、そして其の善良の意志と企圖とを示さうとして身をよちり、身をひねりした。更に平和のための賄賂として、バツクの顔を、彼の生温い、ぬれた舌で嘗めたものである。

in a snug ball. 一つの compact ちんまりしたボールのやうになつて。

placatingly 人をなだめたり (pacify), または conciliate したりするかの如く; in a way intended to dispel anger.

Squirm のたくる (wriggle), 身體をもがく (writhe).

wriggle=make worm-like motions.

lick なめる。

Another lesson. So that was the way they did it, eh? Buck confidently selected a spot, and with much fuss and waste effort proceeded to dig a hole for himself. In a trice the heat from his body filled the confined space and he was asleep. The day had been long and arduous, and he slept soundly and comfortably, though he growled and barked and wrestled with bad dreams.

Nor did he open his eyes till roused by the noises of the waking camp. At first he did not know where he was. It had snowed during the night and he was completely buried. The snow walls pressed him on every side, and a great surge of fear swept through him—the fear of the wild thing for the trap. It was a token that he was harking back through his own life to the lives of his forbears; for he was a civilized dog, an unduly civilized dog, and of his own experience knew no trap and so could not of himself fear it. The muscles of his whole body contracted spasmodically and instinctively, the hair on his neck and shoulders stood on end, and with a ferocious snarl he bounded straight up into the blinding day, the snow fly-

In a trice 一瞬間に。

Arduous 骨の折れる、奮闘的の。

soundly ぐつぐつと。

wrestled with bad dreams 悪夢と戦つた。wrestle with a dictionary (字引と首つ引する)、wrestle with a task (仕事と戦ふ)

till roused=till he was round.

surge=wave.

更に、もう一つの教訓があつた。彼等はこの風にしてゐたのだらうか？ バックは一人で、適當の所を撰んで、大騒ぎをして、無駄骨な努力をしたりして、自分の寢所の穴を掘つた。暫らくすると、身體の暖みで、その穴がぬくもつて、すぐに彼は眠つて了つた。其の日は、長い骨の折れた奮闘的の一日であつたので、彼はグツスリと心地よく眠つた。たゞ悪夢に襲はれて、唸つたり吠えたり、悪夢と大いに戦つたりすることはしたけれども。

朝、キヤムプの犬どもが目を醒した物音で、夢を破られるまでは、バックは目をさまさなかつた。最初の中は、彼は何處にゐるか知らなかつた。その夜中に降りつゞいた雪で、彼は全く埋められてゐた。雪の壁は彼を四方から押しつけ、忽ちにして恐怖の大きな波のうねりが彼の全身を貫いた——それは^{おとしめな}陷阱に對する野獸の恐怖ともいふべきものであつた。それは、彼自身の生活を通して、祖先の生活にまで、後ずさりして嗅ぎ直さうとしてゐた一つの徴候であつた。つまり、彼は文明開化された犬であつた。野性は野性でよかつたものを、不當に文明化された犬であつた。彼自身の經驗には陷阱と言ふものがなかつた。それ故彼自身としてはそれを恐れる筈がなかつた。たゞ、彼の全身の筋肉が、發作的に本能的に縮まつた。首と肩の毛が逆立つた。そうして獐猛な唸り聲と共に、一躍して、まばやくて目もくらむ白日の中に跳り出た。雪は彼のまはりに輝

wild thing=wild creature; wild animal.

trap. 陷阱。

hark back.....forbears, returning imagination to the lives of his ancestors. 犬が後戻りして、もう一度かき直すのが hark back である。hark back to the subject (元の主題にかへる)

forbears. (pl.) 祖先。

unduly. 不當に (野性は野性のまゝである方がよいのに)。

ing about him in a flashing cloud. Ere he landed on his feet, he saw the white camp spread out before him and knew where he was and remembered all that had passed from the time he went for a stroll with Manuel to the hole he had dug for himself the night before.

A shout from François hailed his appearance. "Wot I say?" the dog-driver cried to Perrault. "Dat Buck for sure learn queek as anyt'ing."

Perrault nodded gravely. As courier for the Canadian Government, bearing important despatches, he was anxious to secure the best dogs, and he was particularly gladdened by the possession of Buck.

Three more huskies were added to the team inside an hour, making a total of nine, and before another quarter of an hour had passed they were in harness and swinging up the trail toward the Dyea Cañon. Buck was glad to be gone, and though the work was hard he found he did not

in a flashing cloud. ひらめく雲となつて。

Manuel. "But Buck did not read the newspapers, and he did not know that Manuel, one of the gardener's helpers, was an undesirable acquaintance. Manuel had one besetting sin. He loved to play Chinese lottery." (十二頁)

Wot I say? = what I say?

Dat Buck for sure learn queek as anyt'ing = That Buck surely learns.

quick as anything = That Buck surely learns very quick.

courier ['kuriə] = express messenger; rapidly travelling messenger. 新聞の名などにつけることがある。たとへば Liverpool Courier.

secure. 手に入れる。

く雲となつて飛び散つた。彼の足がまだ地上につかぬ間に、彼は彼の前に広がる白いキャンプを見て、一體こゝは、どんなところかどわかつた。そして、サンタ・クラウ・ヴァレーで園丁の手間取のマニユエルと一緒に散歩に出た時から、昨夜自分が穴を掘つて入つたまでの、過ぎ去つた一切の事柄が頭に浮んだ。

フランソアは大声あけて、バックの出現を歡呼した。「あの何だ」と、犬追ひのフランソアはベローに叫んだ。「バックの野郎と來たら、全く覺えの早え奴よ」

ベローは眞面目にうなづいて見せた。カナダ政府の重要な公文書運ぶ早飛脚として、彼は常に最良の犬を手に入れることばかり考へてゐた。それで彼は殊にバックが手に入つたことを喜んだ。

一時間も経たないうちに、又三匹のハスキーがこの組に加へられて、皆で九匹になつた。そして十五分と経たぬ中に、彼等は革具を取り付けられて、ダイヤ溪谷の方へと、櫓を挽いて行つた。バックは、いよいよかけるといふのを喜んだ。仕事はなかなかつらかつたが、彼は大して、それを厭だとは思はなかつた。彼が驚いたのは、組の全體にみなぎつてゐる熱中振

possession. 持つてゐること。(possession は現に自分が持つてゐること、所有権のないこともある。owning は自分がその所有権を持つてゐることである)

inside an hour 一時間にならないうちに; within an hour.

a total of nine. 犬が皆で九匹になつたこと。

cañon ['kaenjən]. A deep gorge or ravine with precipitous sides; 米國には有名な Grand Cañon といふのがある。cañon は非常な高い山山の間の深い溪谷をいふ。Grand Cañon は Colorado River が下を流れあたりに聳ゆる斷崖は切つたやうになつてゐて、それに夕陽があたると rainbow のやうな色になるので美しいのである。日本ならば黒部溪谷の如きは cañon である。

particularly despise it. He was surprised at the eagerness which animated the whole team, and which was communicated to him; but still more surprising was the change wrought in Dave and Sol-leks. They were new dogs, utterly transformed by the harness. All passiveness and unconcern had dropped from them. They were alert and active, anxious that the work should go well, and fiercely irritable with whatever, by delay or confusion, retarded that work. The toil of the traces seemed the supreme expression of their being, and all that they lived for and the only thing in which they took delight.

Dave was wheeler or sled dog, pulling in front of him was Buck, then came Sol-leks; the rest of the team was strung out ahead, single file, to the leader, which position was filled by Spitz.

Buck had been purposely placed between Dave and Sol-leks so that he might receive instruction. Apt scholar that he was, they were equally apt teachers, never allowing him to linger long in error,

their being. 彼等の存在。

and all that they lived for=and seemed all that they lived for=
and seemed what they lived for.

wheeler. 荷車挽、四頭で引く馬車の後馬（最前の馬、leader に対す）。こゝでは犬。即ち橇を引くため九疋の犬が用ゐられてゐる事が書いてあるが、その一番後にて、sled そのものの直前を走る犬。

pulling 橇を引く。pull は引つづる。push は押す。バリカンなどが毛を引つづるのを pull といふ。

strung out. 引のびし、繰出して出てゐる。string out (講義を)引

であり、又それが彼にも傳はつたのである。そして更に驚いた事には、デーヴとソルレクスとの變り方であつた。彼等は革具によつて全く變化してつて、全く前とは打つて變つた犬になつてゐた。受動的な無關心さが、全然彼からなくなつて、敏捷で能動的で、仕事のうまく行く事に熱心で、遅延や混亂の爲めに仕事が遅れる時には、その原因が何であらうと恐ろしくいらいらして怒りつほくなる。此の橇挽きの仕事が彼等の存在の最高の表現であるやうに見えた。そしてそれが、彼等がその爲めに生きてゐる唯一のものであり、それに愉快を感じる唯一のものゝやうに見えた。

デーヴは一番殿りになつて橇のすぐ前を走る挽犬であつた。その前にバツクが居り、又その前にソルレクスが居た。其の他の犬共はズツト前の方に繰出されて、皆な一列になつて、一番最初がリーダーであつた。そしてそのリーダーの地位を占めたのがスピッツであつた。

バツクはさうして教育を受けるやうにと、わざとデーヴとソルレクスとの間に置かれた。彼は中分のない似合ひの學生ではあつたが、教師も亦、これならばといふ教師であつた。決して長く間違つたまゝでまごついてゐることを許さず、教へ

き俾ばす。

single fire 一列になつて。

leader. 先頭の犬。baseball team なら captain といふところ。

instruction. 教育、訓練、教練。

Apt. Fit, suitable, prompt. aptitude=fitness; readiness). Apt scholar that he was=Apt scholar as he.

was=though he was an apt pupil, they were equally apt teachers.

and enforcing their teaching with their sharp teeth. Dave was fair and very wise. He never nipped Buck without cause, and he never failed to nip him when he stood in need of it. As François's whip backed him up, Buck found it to be cheaper to mend his ways than to retaliate. Once, during a brief halt, when he got tangled in the traces and delayed the start, both Dave and Sol-leks flew at him and administered a sound trouncing. The resulting tangle was even worse, but Buck took good care to keep the traces clear thereafter; and ere the day was done, so well had he mastered his work, his mates about ceased nagging him. François's whip snapped less frequently, and Perrault even honored Buck by lifting up his feet and carefully examining them.

It was a hard day's run, up the Cañon, through Sheep Camp, past the Scales and the timber line, across glaciers and snowdrifts hundreds of feet deep, and over the great Chilcoot Divide, which stands between the salt water and the fresh and guards forbiddingly the sad and lonely North. They made good time down the chain of lakes which fills the craters of extinct volcanoes, and late that night

trouncing. びんた。

about ceased = almost ceased.

nagging = scolding.

を強制するには彼等の鋭い牙を以てした。デーヴは公平で極めて聰明であつた。彼は決して理由なしにはバツクを嚙まなかつたし、又それが必要である時に嚙むことを決して忘れなかつた。フランソアの鞭が常にデーヴをかばつてゐるので、バツクは、報復をする事よりも、自分の行ひを改める方が考へて見ると得である事を悟つた。或る時、少しばかり立止つたまゝ休んでゐる間に、バツクが挽革にからまつて、そのために出發が後れた時、デーヴとソルレクスは一度に彼に飛びかゝつて、厳しい、びんたを加へた。その結果、革は一層ひどくこんがらかつたが、然しバツクは其の後はいつまでも挽革をキチンとさせておく様になつた。まだその日一日もすまない間に、バツクは自分の仕事をすつかりのみ込んで了つて、彼の仲間が彼を殆んど口やかましく罵らないやうになつた。フランソアの鞭がひゆつと鳴る事も前より少なくなり、ペローはバツクの足を持上ちけて注意深く検査してやる程の榮譽をさへ彼に興へた。

その一日は随分苦しい旅でドイヤの溪谷をどんどん登り坂にシープ・キャンプを通り、スケイルスを越え、森林帯を越えた高地を過ぎ、幾百尺の深さの氷河や雪溪を横切り、更に鹹水と淡水との間に不気味な風で、落莫たる北地を守つて立つチルクツトの分水嶺を越えて、進んで行つたそれから死火山の噴火口を充たしてゐる湖水のつながりに沿ふて、下り坂に道もはかどつて、その晩のうちには、おそくも、漸くペンネット湖のほ

snap. びしやつと鳴る。

forbiddingly 不意味に。

made good time = made rapid progress.

pulled into the huge camp at the head of Lake Bennett, where thousands of gold-seekers were building boats against the breakup of the ice in the spring. Buck made his hole in the snow and slept the sleep of the exhausted just, but all too early was routed out in the cold darkness and harnessed with his mates to the sled.

That day they made forty miles, the trail being packed; but the next day, and for many days to follow, they broke their own trail, worked harder, and made poorer time. As a rule, Perrault travelled ahead of the team, packing the snow with webbed shoes to make it easier for them. François, guiding the sled at the gee-pole, sometimes exchanged places with him, but not often. Perrault was in a hurry, and he prided himself on his knowledge of ice, which knowledge was indispensable, for the fall ice was very thin, and where there was swift water, there was no ice at all.

way after day, for days unending, Buck toiled in the traces. Always, they broke camp in the dark,

pulled into. 到着した。

head. 河水のそと、湖水の一端。

sleep the sleep of the exhausted just. 疲れた身の安らかに眠る。これは sleep the sleep of the just (安らかに眠る) といふ熟語に exhausted を挿んだのである。

routed out. この routed は rout [發音 'raut] の過去。rout=root; a'so, force or fetch out (of bed or from bed or house or hiding-place).

That day=on that day.

they made forty miles. 四十哩行つた。

とり河水が注ぎ込む一端にある一大キャンプに辿りついた。こゝには數千人の金掘りが、今、ボートを作りつゝ、春になつて湖水の氷の解ける頃を待つてゐた。バックは雪中に彼の穴を掘つて、ぐつすり疲れて安らかな眠りに落ちたが、翌る朝は寒いまだ暗いうちに叩き起されて、仲間と一緒に橇に縛りつけられたのである。

其の日は、彼等は四十哩も進行して、道を堅めた。次の日も又それにつゞく幾日も幾日も、彼等は自分で初めて道を作つて行かなければならなかつたので、一層骨は折れて、而も道のりはそれほど行かなかつた。いつもペローは一行の先頭に立つて、水鳥の水かきのやうな雪靴で、雪をならして、橇の進行を容易にした。フランソアは舵棒をつかんで、橇を導くのが彼の役目であつたが、偶々ペローと交代する事もあつたが、それは極く稀れであつた。ペローはいつも、あわてくさつてゐて、氷の知識に關しては、自慢であつた。勿論この知識は缺くべからざるものであつた。何故ならば、秋の結氷は非常に薄く、流れの早いところには、未だ全然氷が張つてゐなかつたからである。

毎日毎日、際限もなく、バックはいつも同じ事を繰返した。彼等は常に暗い中にキャンプをしまつて、夜が明けて最初のボ

trail=beaten path, especially through wild region.

As a rule. いつも大抵。

pack. たしかめる。

gee-pole. 舵を把る棒。

hurry. あまへるやうにいそぐこと。haste は、たゞいそぐこと。He ate his breakfast hurriedly and then... あはてくさつて食事をすましてから。Don't eat too fast! (がつかつかお食べでないよ)

fall ice. 秋の結氷。

break camp. キャンプをしまふ。



and the first gray of dawn found them hitting the trail with fresh miles reeled off behind them. And always they pitched camp after dark, eating their bit of fish, and crawling to sleep into the snow. Buck was ravenous. The pound and a half of sun-dried salmon, which was his ration for each day, seemed to go nowhere. He never had enough, and suffered from perpetual hunger pangs. Yet the other dogs, because they weighed less and were born to the life, received a pound only of the fish and managed to keep in good condition.

He swiftly lost the fastidiousness which had characterized his old life. A dainty eater, he found that his mates, finishing first, robbed him of his unfinished ration. There was no defending it. While he was fighting off two or three, it was disappearing down the throats of the others. To remedy this, he ate as fast as they; and, so greatly did hunger compel him, he was not above taking what did not belong to him. He watched and learned. When he saw Pike, one of the new dogs, a clever

hitting the trail. 樞道を行く。

reeled off=Left lying like a thread reeled out.

pitch camp キャンプを張る。

after dark 夜になつてから。

ravenous ['reivɪnəs] がつかつかしてゐる; がつかつか食ふう 飢ゑきつて (famished).

ンヤリした光が流れる頃には、更に新しい幾マイルかを後にして、樞道を進んでゐた。さうして彼等はいつも暗くなつてからキャンプを張り、少量の魚を食つては雪の中に縮こまつて寝た。バツクはがつかつかして飢え切つてゐた。毎日宛てがはれる一ポンド半の乾鮭位はどこに行つて了ふかわからなかつた。いくら食べても一度として腹一ぱい食つたやうな気がした事がないので、絶えず、ひもちくて仕方がなかつた。他の犬共は身體が小さいし、又かうした生活をする様に生れついてゐるので、魚は一ポンドしか貰はなくても、やつて行けたのであつた。

バツクは、昔の生活の特色であつた氣むづかしさや潔癖さを直きに失つてしまつた。上品な食べ方などしてゐると、自分の分をさつさと食つて了つた奴等が、まだ食べ終へぬこつちの分も盗むといふわけだ。これを防ぐことは出来なかつた。彼が二三匹を追拂つてゐる間に、彼の分はもう他の奴等の喉を通つてゐたのだ。この救済策として、彼も奴等と同じやうに早く食べる事にした。空腹が彼に與へた影響といふものは大きかつた。つまり、彼は自分の物でない物を取るのを厭はないほどになつたのである。彼は黙つてゐて他の連中のするのを見て覺えたのであつた。新しく來たバイクと言ふ犬は假病と、盗みが上手で

ration. 軍隊などの食事のやうに、一日分いくらときめて、あてがはれる食事; allowance of food.

pangs. Paroxysm of extreme pain.

fastidiousness. 氣むづかしさ、潔癖。

There was no defending it=it was impossible to defend it.

He was not above taking. 取ることを厭ひはしなかつた。

malingerer and thief, slyly steal a slice of bacon when Perrault's back was turned, he duplicated the performance the following day, getting away with the whole chunk. A great uproar was raised, but he was unsuspected; while Dub, an awkward blunderer who was always getting caught, was punished for Buck's misdeed.

This first theft marked Buck as fit to survive in the hostile Northland environment. It marked his adaptability, his capacity to adjust himself to changing conditions, the lack of which would have meant swift and terrible death. It marked, further, the decay or going to pieces of his moral nature, a vain thing and a handicap in the ruthless struggle for existence. It was all well enough in the Southland, under the law of love and fellowship, to respect private property and personal feelings; but in the Northland, under the law of club and fang, whoso took such things into account was a fool, and in so far as he observed them he would fail to prosper.

Not that Buck reasoned it out. He was fit, that was all, and unconsciously he accommodated himself to the new mode of life. All his days, no matter what the odds, he had never run from a

malingerer. 似せ病氣。

bacon. 朝食などに Bacon and eggs といふやうな、よく英人の好ん

あつたが、或日彼が、ペローのよそを向いたすきに、巧に豚の燻肉の一小片を盗んだのを見て、バツクは其の翌日、直ぐに同じ真似をして、大きな切れをもつて逃げた。大騒ぎになつたがバツクがしたとは思はれず、いつも見付けられて、へまばかりやるダツプといふ奴が、バツクの悪事に對して處罰されたことである。

此の最初のバツクのした盗みは、バツクが此の北方のつらい環境に於いて、生存するに適してゐる事を示したものであつた。それは、また、彼の適應性、即ち境遇の變化に自分を適應せしめるバツク的能力を示したもので、その缺乏は即ち速かな恐ろしい死を意味したかも知れなかつた。更に又、これは彼の道徳心の衰亡、若しくは破滅を意味するもので、その道徳心といふものは、激烈な生存競争に於いては手足まとひとなるものである。南方に於ては、愛と同胞の法の下に、所有權と個人の感情とを尊重する事は悪い事ではなかつたが、此の北地に於ける、棍棒と牙の法の下にあつては、そんなことなどを考へる方が馬鹿で、少しでもそれを氣にかける者は、結局それだけ損をする事になるのであつた。

バツクがそんなことを理屈で考へ出したわけではなかつた。彼は適者であつた。たゞそれだけだ。そして無意識的に自分自身を新たらしい生活様式に順應させたに過ぎなかつた。彼はいつでも、勝目の有る無しにかゝらず、この戦鬪から逃

で食べるものがある。bacon は豚の脂肉の燻肉。

fight. But the club of the man in the red sweater had beaten into him a more fundamental and primitive code. Civilized, he could have died for a moral consideration, say the defence of Judge Miller's riding-whip; but the completeness of his decivilization was now evidenced by his ability to flee from the defence of a moral consideration and so save his hide. He did not steal for joy of it, but because of the clamor of his stomach. He did not rob openly, but stole secretly and cunningly, out of respect for club and fang. In short, the things he did were done because it was easier to do them than not to do them.

His development (or retrogression) was rapid. His muscles became hard as iron, and he grew callous to all ordinary pain. He achieved an internal as well as external economy. He could eat anything, no matter how loathsome or indigestible; and, once eaten, the juices of his stomach extracted the last particle of nutriment; and his blood carried it to the farthest reaches of his body, building it into the toughest and stoutest of tissues. Sight and scent became remarkably keen, while his hearing developed such acuteness that in his sleep he heard the faintest sound and knew whether it heralded

け出した事がなかつた。けれども、あの赤いスウェーターを着た男の棍棒に打ちのめされる度に、最も根本的な、原始的な法律が彼の中へたゞき込まれたのである。彼が文明の生活の中にもゐた時分には、道徳的な理由のために、たとへばミラア判事が下すところの鞭によつて行はるゝ掟の擁護のためにでも、死ぬことが出来たであらう。然し今、彼がこの北地にあつて、文明から完全に退化して了つた事は、道徳の擁護なんてことは、てんで顧みないで、それから逃れることによつて自分を救ふといふ能力があるといふことから、立派に證明されるわけだ。彼は慍に盗みをしたのではなかつた。胃の腑にせがまれて止むやく盗んだのであつた。彼は公然と盗みはしない。棍棒と牙の掟に對する尊重から、密かに狡猾に盗んだのであつた。つまり、彼のした事は、それをしないよりは、した方が容易であつたからであつた。

彼の發達(といふよりはむしろ退化といつた方がよいかも知れない)は急速であつた。彼れの筋肉は鐵のやうに強靱となり、大抵の苦しみに對しては全然無感覺になつた。内的にも外的にも全く經濟的になつた。彼はどんな胸糞のわるくなるものでも、不消化なものでも食べやうと思へば食べる事が出来るやうになつた。一度食べて了へば、彼の胃液は其の中から最後の滋養分まで搾り取つてしまつた。そして彼の血液はそれを全身のあらゆる末端まで運んで行つて、それで最も強靱で、最も強壯な筋肉組織を作り上げた。視覚も嗅覺も著るしく鋭敏になつた。彼の聽覺は非常に發達して、眠つてゐる間にも極めて微細な音響が聞え、而もそれが平和の知らせか、危険の豫報かを聞き知つ

peace or peril. He learned to bite the ice out with his teeth when it collected between his toes; and when he was thirsty and there was a thick scum of ice over the water hole, he would break it by rearing and striking it with stiff fore legs. His most conspicuous trait was an ability to scent the wind and forecast it a night in advance. No matter how breathless the air when he dug his nest by tree or bank, the wind that later blew inevitably found him to leeward, sheltered and snug.

And not only did he learn by experience, but instincts long dead became alive again. The domesticated generations fell from him. In vague ways he remembered back to the youth of the breed, to the time the wild dogs ranged in packs through the primeval forest and killed their meat as they ran it down. It was no task for him to learn to fight with cut and slash and the quick wolf snap. In this manner had fought forgotten ancestors. They quickened the old life within him, and the old tricks which they had stamped into the heredity of the breed were his tricks. They came to him without effort or discovery, as though they had been his always. And when, on the still cold nights, he pointed his nose at a star and howled

たのである。彼は足の指が凍りついて了つた時に、それを歯でもつて喰ひ割る事を覺えた。咽喉がかわいて水が飲みたいと思ふと、水穴に厚い氷が張り詰めてゐて、どうにもならぬ時には、後足で立つて棒のやうな前足で打ち砕いたりしたものだ。風を鼻先で嗅いで、一晩前に天候を豫知することなどは、彼の最もすぐれた才能であつた。樹や土堤の側に彼の寢床を掘る時に微風すらなくとも、あとで風が吹き出して來て見ると、必ず彼は風下の方に風を避けて氣持よく寢てゐたのである。

彼は經驗によつて覺えたばかりではなくて、長い間死んでゐた彼の先祖から傳はつてゐるいろいろの本能が再び活動を初めたのであつた。家畜時代は、もう彼にはなかつた。彼は漠然とした仕方で、その種族の原始時代を思ひ出した。野性の犬が、群をなして、原始林の中を馳けまわり、餌食に會へば、直ちに殺として食べるといつた原始時代を思ひ出した。嚙んだり、所嫌はず噛みついたり、すばしつこく狼のやるやうに、あぐりと食ひつく、といふ風な戰術を學ぶ事など彼に取つては何んでもなかつた。そのやうに今は忘れられた遠い祖先も戰つてゐたのである。そしてその祖先が彼の中に存在してゐる古い生活に活を入れた。その祖先が子孫の遺傳の中に印刻した昔ながらの遺り口こそ今の彼の遺り口であつた。それは何等の努力も、發見もなくして、恰かも初めから彼の習慣であつたかの如く彼に戻つて來た。そして靜かな寒い夜など、彼が鼻を一つの星の方へ向

long and wolf-like, it was his ancestors, dead and dust, pointing nose at star and howling down through the centuries and through him. And his cadences were their cadences, the cadences which voiced their woe and what to them was the meaning of the stillness, and the cold, and dark.

Thus, as token of what a puppet thing life is, the ancient song surged through him and he came into his own again; and he came because men had found a yellow metal in the North, and because Manuel was a gardener's helper whose wages did not lap over the needs of his wife and divers small copies of himself.

as token of. しるしとして、の證據として。

puppet 人形、あやつり人形、a figure, usually small, representing a human being, especially one with jointed limbs moved by wires etc. in puppet-show.

ancient 太古の（日本で云へば神話時代、神武天皇時代といった時代を ancient と云ひ、徳川時代などは ancient でなく olden days であ

けて、狼のやうに遠吠をする時、それは既に土になつた彼の祖先が幾世紀もの間、並びに彼の存在を通して、同じやうに、鼻を星の方へ向け、吠えつゞけてゐるのであつた。その彼の音律はまた祖先の音律であり、祖先の苦惱をいひ表はした音律でもあつた。そしてそれは彼等にとつて、静寂と、寒さと、暗黒を意味するところのものゝ聲であつた。

かくして「生」とは人形遣ひにつかはれる一箇の小さき人形に過ぎないことの證據として、この遠吠えといふ太古の歌が彼の身内に波打つて、彼はほんとうの自己に歸つたのである。そして、それは人間が北地に於て黄色い金屬を見つけだしたからであり、また彼のマニユエルが園丁の助手であつて、彼の給料が彼の妻と、彼自身の小さな數人の子供たちの衣食を充たすに足らなかつたためであつた。

り、歴史で Old Middle, Modern の三つの periods に分てば、Old は古代、Middle は中世期、Modern は近世期で、徳川時代などは Modern Period に屬するのである。

lap over ...の上に重なる; cover.

divers = Sundry.

III

THE DOMINANT PRIMORDIAL BEAST

The dominant primordial beast was strong in Buck, and under the fierce conditions of trail life it grew and grew. Yet it was a secret growth. His new-born cunning gave him poise and control. He was too busy adjusting himself to the new life to feel at ease, and not only did he not pick fights, but he avoided them whenever possible. A certain deliberateness characterized his attitude. He was not prone to rashness and precipitate action; and in the bitter hatred between him and Spitz he betrayed no impatience, shunned all offensive acts.

On the other hand, possibly because he divided in Buck a dangerous rival, Spitz never lost an opportunity of showing his teeth. He even went out of his way to bully Buck, striving constantly

dominant=governing.

primordial 原始的の。

poise=balance.

to feel at ease 気が楽に感ずる。

pick fights 喧嘩を買ふ。

a certain deliberateness..... 或る熟慮慎重が彼の態度の特色である。

prone to..... するくせがある; 仕勝ちである。

rashness 早急なこと。

precipitate 急に逆落しに起す。

三 原始的野獣の支配慾

バツクの身心の中には原始的の野獣性の支配慾が強く支配してゐた。而もそれは猛烈な樞腕生活の間に益々生長して行つた。しかしそれはなほ秘かなる生長であつた。いつとなく新たに生れて來た彼の狡猾さは、彼に均衡と抑制とを與へた。彼は自分自身を新生活に慣らのに忙しかつたために暫らくも心を安んじてゐられなかつた。彼は自から進んで戦闘をするといふことをしなかつたのみならず、出来る丈けいつも、それを避けたのである。よく物を慎重に考へるといふのが彼の態度であつた。早急に無鐵砲なことををしたり、いきなり直接行動に出るといふやうなことはなかつた。スピツツと彼との間に存在した激しい憎惡が存在しながらも、彼は少しの疝癩を示すこともなく、一切の攻撃的行爲を避けてゐた。

ところがスピツツの方では、バツクを多分危険な競争者であると感じたせいが、事ある毎にバツクに向つて其の白い齒を見せることを忘れなかつた。又彼はバツクを無茶苦茶に壓迫して、結局いづれか一方の死を見ずにはおかないやうな争闘を、

action 行動。

hatred 憎しみ(動詞は hate)。

betray 裏切りする、示す。

shun 避ける。

offensive 攻撃的の。

possibly because..... 恐らく.....の故に。

divine 占ふ、將來バツクは自分に取り恐ろしい競争者となり、自分と覇權を争ふやうになるだらうと考へる。

never lost an opportunity..... する機会を必ずとらへた。

bully いぢめる。

to start the fight which could end only in the death of one or the other.

Early in the trip this might have taken place had it not been for an unwonted accident. At the end of this day they made a bleak and miserable camp on the shore of Lake Le Barge. Driving snow, a wind that cut like a white-hot knife, and darkness, had forced them to grope for a camping place. They could hardly have fared worse. At their backs rose a perpendicular wall of rock, and Perrault and François were compelled to make their fire and spread their sleeping robes on the ice of the lake itself. The tent they had discarded at Dyea in order to travel light. A few sticks of driftwood furnished them with a fire that thawed down through the ice and left them to eat supper in the dark.

had it not been for=but for; なかりせば。

unwonted 不慣れの。

accident. 不意の出来事、珍事、事件(事件といつても、汽車の衝突事件などいふ時で、満洲事件などいふ時は incident, a fair など用うる)。

driving snow. 横ぶりにふきつける雪。

cut この字は現在も過去も過去分詞も同じ形。こゝでは過去。

like a white-hot knife. 熱へ近づけると、はあと熱さを感じずるやうな白刃のやうに身を切る風。

grope for 盲人のするやうに手さぐりすること。

they could hardly have fared worse. もつと悪いことになるなんてことはありさうもない位、ひどい目にあつたのである。

at their backs rose a perpendicular wall of rock. これは a

絶えず起すことに努力してゐたのだ。

かうした争闘は若しある不意の出来事が起らなかつたら、此の旅行の抑もの初めに、既に起つてゐたに違ひないのだ。この日も終る頃に、一行はルバルジュ湖の岸邊に荒涼たるみぢめなキャンプを張つた。雪を吹きつけながら、風は頬に近づければ白熱を感じる鋭利なナイフの如く膚を切り、その上、暗は迫つて来て、彼等は唯手さぐりにキャンプの場所を求めてゐた。彼等よこれよりわるい目に遭つた事がなかつた。彼等の後ろには切り下げたやうな断崖が立つてゐた。ペローとフランソアは、湖水の氷の上に火を焚いて、そこに夜具を延べなければならなかつた。テントは旅を軽便にする爲めに、ダイヤで棄てゝ了つたのである。數本の流木を拾ひ集めて火は出来た。が、それも氷の中に溶けて消えて、暗の中で夜食をするのであつた。

perpendicular wall of rock rose at their back とすれば、日本人には分りいゝ。英文では短い句を前にすることが多いのである。

rose. rise, rose, risen.

to make their fire 火を起す (to make tea 茶を入れる、to make bed 寢床をととのへる)

spread their sleeping robes 寝着をひろげることを餘儀なくされた。(こゝでは spread は現在動詞。spread, cut, shut, set, shut, cut, cast 等、現在、過去、過去分詞同形)

furnished them with..... を彼等に供給した、(to present him with a book; to provide one with; to supply one with; to fill a bottle with wine)

to travel light 身輕に旅をする(持物をかろくして)。

in the dark 暗い中で。

Close in under the sheltering rock Buck made his nest. So snug and warm was it, that he was loath to leave it when François distributed the fish which he had first thawed over the fire. But when Buck finished his ration and returned, he found his nest occupied. A warning snarl told him that the trespasser was Spitz. Till now Buck had avoided trouble with his enemy, but this was too much. The beast in him roared. He sprang upon Spitz with a fury which surprised them both, and Spitz particularly, for his whole experience with Buck had gone to teach him that his rival was an unusually timid dog, who managed to hold his own only because of his great weight and size.

François was surprised, too, when they shot out in a tangle from the disrupted nest and he divined the cause of the trouble. "A-a-ah!" he cried to Buck. "Gif it to heem, by Gar! Gif it to heem,

close in 中にうど入るやうに岩に添うて。
snug きちんと小ぢんまりして氣持よき (snug and cosy などいふ)
was it. これは it was so snug and warm.
that..... これは前の so へかゝる。
loath 厭である。
thawed over the fire. 魚が凍つてゐるから、あぶつて氷を解かしたのである。
finished his ration 彼の分を食へ終つた。(finished my supper; finished that book 「あの本を讀んで了つた」)
occupied 誰れか入つてゐた。
this was too much. あんまりひどすぎる。
Spitz particularly. 特にスピッツを。

バツクは避難所の如き岩の蔭に寄りそつて寝場所を作つた。それが、こぢんまりして、暖かゝつた。フランソアが先づ火の上で氷つた魚をあぶつて、それを犬共に分けた時、バツクはいよいよ、そこを出た。然るに彼が其の魚の分前を食べて終つて歸つて來て見ると、其の寝場所には誰れか來て入つてゐる。中から唸り聲が聞えて、その聲で、侵入者がスピッツである事を知つた。バツクは實のところ、今日まで、此の競争者と面倒なことになることを避けてゐたのだ。しかしこれは、餘りにひどいことだ。彼の心の中の獸性が怒號した。彼は忽ち怒氣天を衝くやうな凄じさでスピッツに飛びかゝつた。その猛烈さにはスピッツは勿論彼自身でさへ驚いたことだが、スピッツは殊に驚いた、といふわけは今日までスピッツのバツクに就ての経験は、此の競争者は非常に臆病な犬なのだが、たゞ、その大きな頑固な身體のために、纔にその地位を保つに過ぎないと彼に教へてゐたからである。

フランソアも、スピッツとバツクとがもつれ合つて寝場所をくづしながら、飛び出したのを見てびつくりした。そして問題の原因を推量した。「あゝ、さうか!」彼はバツクに向つて叫んだ。「呉れてやれ! 仕方がねえ。呉れてやれ! あの泥棒野郎

his whole experience with Buck バツクとつき合つての彼の経験全部。
managed to. どうかかうがして、やつとさうする。
size. 大きさ。
shot out 鐵砲玉のやうに飛び出た。
in a tangle もつれ合つて。
disrupted=shattered.
A-a-ah これは「あゝ分つた」などいふ時の ah で、間のびに發音する。
gif it to heem, by Gar! =give it to him, by God! 無教育のフランス系統の連中の言葉をうつしたのである。by God は誓ひの言葉。アメリカの子供たちは give me を gimme! といふ。

the dirty t'eeff!"

Spitz was equally willing. He was crying with sheer rage and eagerness as he circled back and forth for a chance to spring in Buck was no less eager, and no less cautious, as he likewise circled back and forth for the advantage. But it was then that the unexpected happened, the thing which projected their struggle for supremacy far into the future, past many a weary mile of trail and toil.

An oath from Perrault, the resounding impact of a club upon a bony frame, and a shrill yelp of pain, heralded the breaking forth of pandemonium. The camp was suddenly discovered to be alive with skulking furry forms—starving huskies, four or five score of them, who had scented the camp from some Indian village. They had crept in while Buck and Spitz were fighting, and when the two men

the dirty t'eeff=the dirty thief. "th" を 't' にする無教育の連中がある。thousand を tousand と云つたり、thirty cents を tirty cents と云つたりする。

sheer=very.

back and forth. 後方へ、また前方へ。前の方へ出て来て、ぐるぐる敵のまはりをまはつたり、輪を大きく後ずさりして、敵の周囲をまはつたりする。

no less それに劣らず。

for the advantage. 少しでも有利に advantage を取らんとして。

the thing. これは前の unexpected を説明したのである。

past を過ぎて。

trail and toil. こゝに t を二つ重ねてある。英語では、よくかういふことを意識的にする。これを alliteration といふ。still and silent な

に！」

スピッツも同様に、意気込んでゐた。飛び込んで雌雄を決する機会を狙つて、敵を取巻いてあちこちと駆けずりながら、怒氣と熱心とを以て叫んでゐた。バックもそれに劣らず熱心に、同様に注意深く、且つ此方も同じやうに、敵を取巻いて、あちこちと駆けめぐつて、先手を取る機会をねらつてゐた。併し、てうど其の時、全く待ち設けない事が起つた。それは、權腕の苦しい仕事を何哩も何哩もした後にすつと遠い將來へと、覇權争奪の争を繰越した事件であつた。

ペローの罵る聲、骨を衝ち下す棍棒の響、痛みを訴へる鋭い犬の叫びが、地獄のさわきが起ることを前觸れした。すると、急に、キャンプには何時の間にか、毛のほさほさ生えた形のもものが、うづくまつてゐてうようよ動いてゐるのが分つた。見ると餓ゑかつえたハスキーが八十匹から百匹ばかりもゐる。あるインディアンの村からこのキャンプを嗅ぎつけて來たものだ。バックとスピッツとが喧嘩してゐる間に、忍び込んだのだ。ペロ

どその例だ。

resounding. (of voice, instrument, sound, etc.) produce echoes, go on sounding, fill place with sound.

inpact 衝撃。

frame. 身體、骨格。

break forth. 噴出する、激發する。

pandemonium. A noise like that made by all the devils together; abode of all demons; place of lawless violence or uproar; utter confusion.

skulk. Lurk; keep oneself concealed especially in cowardice or with evil intent.

Indian. 英領印度の Indian でなく、アメリカ大陸にある American Indian である。顔は赤ら顔で、顔付きが、日本人に似てゐる。英領印度の印度人とは全く異なる種族である。

sprang among them with stout clubs they showed their teeth and fought back. They were crazed by the smell of the food. Perrault found one with head buried in the grub-box. His club landed heavily on the gaunt ribs, and the grub-box was capsized on the ground. On the instant a score of the famished brutes were scrambling for the bread and bacon. The clubs fell upon them unheeded. They yelped and howled under the rain of blows, but struggled none the less madly till the last crumb had been devoured.

In the meantime the astonished team-dogs had burst out of their nests only to be set upon by the fierce invaders. Never had Buck seen such dogs. It seemed as though their bones would burst through their skins. They were mere skeletons, draped loosely in draggled hides, with blazing eyes and slavered fangs. But the hunger-madness made them terrifying, irresistible. There was no opposing them. The team-dogs were swept back against the cliff at the first onset. Buck was beset by three huskies,

stout. 太くて頑丈な。(stout boots など。stout woman といふと中年の女などにある肥つたのをいふ)

grub-box 食糧箱。

scramble. 奪ひ合ふ、to take part in physical or other struggle to secure as much as possible of something from competitors (usually "for")

none the less 同じやうに。それにも拘らず (nevertheless)。

the last crumb 最後の食物の一塊。

as though..... 狼のやうに瘦せさらばつて居ること。

一とフランソアが太い頑丈な棍棒を提げてハスキーの間へ飛び込んで行くと、彼等は齒をムキ出して引きずさつて吼え立てた。彼等は食物の匂で夢中になつてゐた。ペローは食物の箱の中に首を突込んでゐる一匹を見つけた。彼の棍棒は其の瘦せこけた肋骨の上に、どしりと着陸した。食物箱は地上に顛覆した。その瞬間に二三十匹の餓えた動物がバンやら鹽豚やらにわあとたかつて来た。むちやくちやに棍棒は彼等の上に落ちた、彼等は雨と降る毆打の下に鳴き叫びながら、それでもなほ同じやうに、氣の狂つたやうになつて、最後の一片が食ひ盡されたまで、争つたことである。

さうかうしてゐる間に、びつくりして了つた樞犬どもは、その寝場所から飛び出したが、いきなりその恐ろしい侵入者から襲撃された。未だ曾つてバツクは、こんな犬を見た事がなかつた。骨が其の皮膚を突き破りはしないかと思はれた。彼等は引きずつて汚れた皮に包まれた骸骨ともいふべきであつた。それに燃えるやうな眼と涎の垂れる牙があつた。こんな骸骨見たいな犬ではあつたが、飢餓に狂つた彼等は、恐ろしい抵抗すべからざるものとなつた。彼等に敵對することは不可能であつた。樞犬たちは最後の一撃に遭つて直ちに崖のところまで押しつけられて了つた。バツクは三匹のハスキーに包圍されて、瞬く間に

drape. cover, hang, adorn, with cloth etc.

draggled. 引きずつて汚す、Make wet, limp, and dirty by trailing. Draggled-tail(ed), (woman) with draggled or untidily trailing skirts.

slavered. よだれの垂れる。

fangs. 牙。

there was no opposing them=it was impossible to oppose them.

onset. 攻撃。

beset. 圍む。

and in a trice his head and shoulders were ripped and slashed. The din was frightful. Billee was crying as usual, Dave and Sol-leks, dripping blood from a score of wounds, were fighting bravely side by side. Joe was snapping like a demon. Once his teeth closed on the fore leg of a husky, and he crunched down through the bone. Pike, the malingerer, leaped upon the crippled animal, breaking its neck with a quick flash of teeth and a jerk. Buck got a frothing adversary by the throat, and was sprayed with blood when his teeth sank through the jugular. The warm taste of it in his mouth goaded him to greater fierceness. He flung himself upon another, and at the same time felt teeth sink into his own throat. It was Spitz, treacherously attacking from the side.

Perrault and François, having cleaned out their

in a trice. 瞬間に。

slash 日茶苦茶に切る (make random cuts).

din. さわぎ。

a score of. 二十ばかり。

side by side. 並んで。

snap. Make sudden audible bite (dog snapped viciously).

crunched down through the bone. 骨までがちりとくひ通した。(crunch) かみ砕く。また crunch はかみ砕く音。大體此の字は擬聲語 onomatopaea である)

maligner [mə'liŋərə] shirker, 病を装ふもの、假病兵。maligner = pretend, produce, or protract, illness in order to escape duty (especially of soldiers and sailors)

jerk. 急に引くこと。

froth. 泡を吹く。

adversary. 敵の反対者。

其の頭と兩肩とが、ざくりとやられて、嚙み裂かれた。その騒ぎは恐ろしかつた。ビリーはいつものやうに泣いてゐた。デーヴとソルレクスは澤山の傷を受けて、血がほたりほたりと滴たれながら相並んで、勇敢に戦つてゐた。ジョーは悪鬼のやうに、齒をかくかく云はせてゐる。一度、ジョーの齒が一匹のハスキーの前足に嚙みついて、骨までがちりと嚙み切つて了ふといふ風だ。假病兵のバイクは、其のびつこになつた敵に飛びかゝつて、びかりと嚙がひらめいて、一振り振つたかと思ふと、敵の首の骨を折つて了つた。バツクは口から泡を吹いてゐる一人の敵の喉元をつかまへて、彼の齒がその頸動脈を突刺した時、血がぱつと水煙り立て、彼の全身に浴びた。彼の口の中に於けるその温かい血の味は彼を驅り立て、一層猙獰にした。彼は又他の敵に飛びかゝつて、同時に、自分の喉に齒が突刺されたのを感じた。それはスピッツであつた。スピッツが裏切つて、わきから彼を襲撃したのであつた。

ペローとフランソアとはキャンプから敵を追拂つたので、橋

spray. しゅうつと霧をかけるやうに水のかゝる。

jugular 頸動脈。

warm taste 何となく血が齒に暖い感じを與へたことである。

goad. 激勵する、煽動する。goad は牛を追ふ爲めに用ゐる spiked stick で、これをつかつて、ものを urge することをいふ。instigate, drive, by annoyance (often "on"; also "to do" "into doing" "to" or "into fury" etc.)

treacherously 策略的に。

from the side. 横側から。

having cleaned out their part of the camp. キャンプに入つて来て見ると、百鬼往行で huskies が一ぱい入り込んで食物を食べてゐる。Buck も three huskies に圍まれて、傷けられるといふ有様だ。ペローは食物になかつてゐる huskies を目かけて、めちやくちやに橋樑で、引ばたいた。かうしてその場所 (their part of the camp) から huskies を一掃したので、今度は...

part of the camp, hurried to save their sled-dogs. The wild wave of famished beasts rolled back before them, and Buck shook himself free. But it was only for a moment. The two men were compelled to run back to save the grub; upon which the huskies returned to the attack on the team. Billee, terrified into bravery, sprang through the savage circle and fled away over the ice. Pike and Dub followed on his heels, with the rest of the team behind. As Buck drew himself together to spring after them, out of the tail of his eye he saw Spitz rush upon him with the evident intention of overthrowing him. Once off his feet and under that mass of huskies, there was no hope for him. But he braced himself to the shock of Spitz's charge, then joined the flight out on the lake.

Later, the nine team-dogs gathered together and sought shelter in the forest. Though unpursued, they were in a sorry plight. There was not one who was not wounded in four or five places, while some were wounded grievously. Dub was badly injured in a hind leg; Dolly, the last husky added

famished=starve ; 飢ゑたる。

upon which. その時。

followed on his heels. その後について行った。

draw himself together. 犬が飛びかゝる前の態度をいふのである。

tail of his eye. 眼の切れ目。

evident. 説明がつくほど明白なる。

犬を救ひにいそいでやつて來ると、それを見て飢ゑきつた動物の背が、もくもくと波のやうに動いて、引退いたが、後にはバツクが難を免れて身體を振つてゐた。けれどもそれはたゞ瞬間であつた。ペローとフランソアが食糧の救護のために、再びキャンプに走らなければならなかつた。何故ならば、ハスキーどもは、食物を目當てに、また、樞犬に襲ひかゝつてゐたからだ。おとなしいピリーは窮鼠却て猫を嚙む底の勇氣を出して、彼等を遠巻にしてゐる野蠻な動物の間を遮二無二駆けぬけて、遠く氷の上へ逃げ出して了つた。バイクとダツプがその後につゞくと、あとの残りの犬どもゝそれについて逃げた。バツクも彼等の跡を追はうとしてゐる時、チラリと横眼に見たのはスピッツが、明かに彼を打仆さうといふ考で彼に飛びかゝらうとしてゐることであつた。一度こゝで倒されて、此のハスキーの集團の下になつたら最後、助かる見込はないのだ。けれどもバツクは、スピッツの襲撃のショックに一時は驚いたが、かたく全身に力を入れて、衝撃に打勝ち、湖上めがけて走り去る仲間の犬たちの後を追つたのである。

それから九匹の樞犬どもは皆な一緒になつて森の中へ身を隠した。もう敵は追つかけては來なかつたが、彼等は實にみじめな有様だつた。四五箇所の手傷を負はないものは一匹もなかつた。或る犬の如きは重傷を負つたのである。ダツプは後足をひどくやられた。ドリーはダイヤで最後に此樞犬の組に加へられたハスキーだが、喉をひどく引裂かれた。ジョーは片眼を失つ

overthrow. 打倒す。

brace himself 力をこめる; 構へる; 元氣を出す。

to the shock of Spitz's charge. スピッツの攻撃のショックに對して。

plight. みじめな有様。

wounded grievously 氣の毒なほどひどく傷をした。

to the team at Dyea, had a badly torn throat; Joe had lost an eye; while Billee, the good-natured, with an ear chewed and rent to ribbons, cried and whimpered throughout the night. At daybreak they limped warily back to camp, to find the marauders gone and the two men in bad temper. Fully half their grub supply was gone. The huskies had chewed through the sled lashings and canvas coverings. In fact, nothing, no matter how remotely eatable, had escaped them. They had eaten a pair of Perrault's moose-hide moccasins, chunks out of the leather traces, and even two feet of lash from the end of François's whip. He broke from a mournful contemplation of it to look over his wounded dogs.

"Ah, my frien's," he said softly, "mabbe it mek you mad dog, dose many bites. Mebbe all mad dog, sacredam! Wot you t'ink, eh, Perrault?"

chew. 咬む。

rent. ずたずたに裂かれ。 *rend, rent, rent.*

to ribbons=into ribbons. (cut to pieces)

whimper (犬の) 鳴く。

at daybreak. 冠詞なし。(at break of day; at dawn; at night; towards evening)

warily. 氣をつけて、びくびくもので。

marauder. 掠奪者 (one who maraudes),

was gone. なくなつて了つた。

lashings. 革ひも。

canvas coverings. 箱の上へかけてあるキャンパスの布。相當重いのである。

moose-hide. 麋の皮 (靴の皮は hide)

て了つた。お人好しのビリーは耳をずたずたに咬み裂かれてリボンのやうに垂れてゐた。そしてその晩一晩鳴いたり、うめいたりした。夜の明方になつて彼等はキャンプに氣をくばりながら、びくびくもので、よろめきながら歸つて來ると、掠奪者は既にゐなかつた。そしてペローとフランソアの二人の男は、大變不機嫌な様子だつた。彼等の食料の全半は、もう食ひ盡されてゐた。ハスキーたちは橇につけた革紐と布の覆ひの上から咬みあらしたのだ。事實、食べれば食べられないこともないと思ふものまで、如何なるものも、彼等の口にかゝつたのである。ペローの鹿革の一足の靴も食はれて了つた。挽革もところどころ食つてゐる。フランソアの鞭の先についてゐる二尺ばかりの革の紐も食はれてゐる。フランソアは愁然とした物思を棄て、負傷した犬共を見渡した。

「おい諸君」とペローは物柔かにいつた。「氣でも狂はなけりやいゝがさ。そこら中の傷だなあ。」と云つてペローに、「皆んな氣狂だよ。何ちう事だ、畜生め！なあ、おい、おめえ、どう思ふ、ペロー！」

moccasins. 鹿皮の靴。

leather traces. 挽革。

end. これはいつも先つぽ。(持つ方のところでない)

mournful. さびしい; 悲しい; 悼むやうな。

my frien's=my friends.

mebbe=maybe; 恐らく perhaps.

it mek you=it will make you.

dose=those.

sacredam! 呪ひの言葉。

wot you t'ink, eh?=What you think, eh? この eh は「エ!」と發音し、文句にすぐつけていふ。あまり上品でなく聞えることが多い。物を聞く時いふのである。たとへば You went there, didn't you? といふところを、You went there, eh? といふのである。この發音は therey といふやうに聞える。

The courier shook his head dubiously. With four hundred miles of trail still between him and Dawson, he could ill afford to have madness break out among his dogs. Two hours of cursing and exertion got the harnesses into shape, and the wound-stiffened team was under way, struggling painfully over the hardest part of the trail they had yet encountered, and for the matter, the hardest between them and Dawson.

The Thirty Mile River was wide open. Its wild water defied the frost, and it was in the eddies only and in the quiet places that the ice held at all. Six days of exhausting toil were required to cover those thirty terrible miles. And terrible they were, for every foot of them was accomplished at the risk of life to dog and man. A dozen times, Perrault, nosing the way, broke through the ice bridges, being saved by the long pole he carried, which he so held that it fell each time across the hole made

shook his head いやだといふ時、疑を持つ時など、この表情をする。東西同じである。この反対は nodding である。

he could ill afford = he could not afford.

got...into shape 整頓させた。

was under way 進行してゐた。(The ship is under way 航海中)

and for that matter その事をいへば; その事をいふ段になれば; その事なら (This is very fine for the matter of that but.....)

wide open 大きな川が、眼を遮るものなく、げつと開いたやうになつてゐること。(the door is wide open)

ペローは、それを信ぜぬらしく、頭を左右に振つた。まだドーソンまで、四百マイルの道程があるのに、皆な狂犬になつて了つては、彼はどうともしやうがなかつたのだ。怒罵と勤勞との二時間で、やつと革具を整理して、傷で思ふやうに歩けない挽犬たちが旅に上つた。これまで曾て彼等が経験したことの無い最大の難所——そして最大の難所といへば、ドーソンまでの間の一番の難所なのだが——を、苦んで闘ひながら、旅をつゞけた。

「三十マイル川」が廣く開けてゐた。其の荒々しき川の水は霜氷を斥けて、たゞ渦巻いてゐるところと、濺みのところに、氷が張つてゐた。此の恐ろしい三十マイルを旅するには、六日間、綿のやうに疲れる勞役が必要だつた。恐ろしいといふのは、其の三十マイルの一尺一尺が、犬と人間との生命を的に成就されるのであつたからだ。ペローはさきになつて進みながら、十一二回も川を越える橋となつた結氷を踏み破つて、川の中へ落ちた。その度毎に彼の持つてゐる長い竿を、丁度自分の體で出来た穴の上に横たほしにして、それで漸く助かつたの

defied the frost 寒氣を寄せつけなかつた。(The beauty defies description その景色の美しさは筆を寄せつけない)。defy = resist openly; present insuperable obstacle to (defies definition; capture; attack etc.)

nosing the way ペローがさきに立つて道をおし進むこと。[push one's way with the nose (esp. of ship)]. 元來 nose (鼻といふ字から搜すといふことになり、he noses a job in everything (何でもかまはず仕事をさがしまはつてゐる) など云ひ、search (after, for) の意味がある。

break the ice. 氷が破れて落ちること。

held. つかんでゐる (hold, held, held)

made by his body. 落ち込んだ身體で作られた(氷の穴)

by his body. But a cold snap was on, the thermometer registering fifty below zero, and each time he broke through he was compelled for very life to build a fire and dry his garments.

Nothing daunted him. It was because nothing daunted him that he had been chosen for government courier. He took all manner of risks, resolutely thrusting his little weazened face into the frost and struggling on from dim dawn to dark. He skirted the frowning shores on rim ice that bent and crackled under foot and upon which they dared not halt. Once, the sled broke through, with Dave and Buck, and they were half-frozen and all but drowned by the time they were dragged out. The usual fire was necessary to save them. They were coated solidly with ice, and the two men kept them on the run around the fire, sweating and thawing, so close that they were singed by the flames.

At another time Spitz went through, dragging the whole team after him up to Buck, who strained

garments. 外套 (ふかぶかの毛皮の外套を着てゐるのだが、overcoat といふやうなものでなく、兵隊の外套のやうなものを着てゐるのである)

he took all manner of risks さまざまの冒険をやつた。嘗て私が Tagore の詩と文章とを譯した「タゴールの詩と文」といふ書物を出した時、土岐善麿君が讀賣新聞に書いた批評に『かう三冊を比較してみると、今度はタゴールの構想を知らうとするよりは、譯詩の進否正否が一種の興味になつて、この一篇だけ對照して見ると、いろいろ参考になる。all manner of wise words を加藤君は「どのやうな難かしい智慧づくの言葉」とし、増野君は「叡智の言葉の一切の様子」とし

である。けれども寒氣は一層ひどくなつて來た。寒暖計は氷點下五十度を示してゐた。彼は氷を踏みぬいて落ちる度に命からがら火を焚いて着物を乾かさなければならなかつた。

何事も、彼を恐れさせなかつた。彼が政府の飛脚として選ばれたのは、彼が何事をも恐れなかつたからである。彼はあらゆる危険を冒し、決然として其の小さな萎びた顔を霜風の中へ突出して、曉から宵闇まで奮闘した。物すごい川岸の縁を氷の上を傳はつて行くと、足の下に、氷がしなつて、氷の破れる音がした。彼等は暫時もその上に敢て立止らなかつた。一度び櫓がデーヴとバツクと一所に落ち込むや、彼等は半分凍えあがり、やつと引きずりあげられた。時には、すんでに溺れさうになつてゐた。例によつて火を焚いて彼等を暖めることが、彼等を救ふために必要であつた。彼等の身體はまるで氷漬けになつてゐた。ペローとフランソアの二人の男はめろめろと燃える火のあたりに氷りついたデーヴとバツクを、毛の焦げる程近く、汗を流し、氷が解けて水と滴る身體を何時までも何時までもかけまはらせたのである。

かと思ふと、今度はスピッツが落込んで、後に續く組中の者をバツクの前のところまで引ずりこんだが、バツクは力一ぱい

であるが、これは花園君にあるやうに「いろいろの賢い言葉」だけで、手つとり早いやうに思はれる』(Baby knows all manner of wise words, though few on earth can understand their meaning.—Tagore: Baby's Way). all manner=all sorts or kinds: 様々な。

weazened しなびた (weazened は wizened, wizen, weazen 皆な同じで、形容詞。Of shrivelled or dried-up appearance (chiefly of person or his face or look). 一語で云へば thin といふこと。これは OE の wisnian (become dry) から來てゐる。

frost. Freezing, prevalence of temperature below freezing-point of water (ten degrees of frost とか hard frost などいふ) 寒氣、霜。

backward with all his strength, his fore paws on the slippery edge and the ice quivering and snapping all around. But behind him was Dave, likewise straining backward, and behind the sled was François, pulling till his tendons cracked.

Again, the rim ice broke away before and behind, and there was no escape except up the cliff. Perrault scaled it by a miracle, while François prayed for just that miracle; and with every thong and sled lashing and the last bit of harness rove into a long rope, the dogs were hoisted, one by one, to the cliff crest. François came up at last, after the sled and load. Then came the search for a place to descend, which descent was ultimately made by the aid of the rope, and night found them back on the river with a quarter of a mile to the day's credit.

By the time they made the Hootalinqua and good ice, Buck was played out. The rest of the dogs

all but drowned. 殆んど溺れてゐた。all but=almost. He is all but dead (彼は殆んど死んでゐる)

coated solidly with ice. あつくしつかりと氷が身體全體を包んでゐること。たとへば苦い子供の丸薬を sugar-coated にしたりするといふ。

on the run=fleeing; bustling about.

singe 上つ面の毛を焼く。(理髪所では頭髮の先をろうそくで singe する)。

all around. そこいら中に; ぐるりに。

tendons. 筋根。

scale=climb (wall, steep place) with ladder or by climbing 攀り上

滑り易い氷の縁に前足を踏んばつて、頑張つた。周囲の氷はぶるぶるとゆれて音を立てた。然し彼の後ろにはデーヴが居て、同じやうに頑張つた。そして橇の後にはフランソアが居て、彼の筋肉の筋がほきりと切れるほどに引張つたのである。

また、こんなこともあつた。縁の氷が前にも後ろにも破れて、斷崖の上より外に逃道がなかつた。ペローは全く奇蹟的に、この斷崖に攀ち上つた。フランソアは其間、一心にその奇蹟を念じてゐた。彼は一つ一つの革紐、革綱、革緒まで繋ぎ合せて、一本の長いより合した綱を拵へ、一匹づゝ犬たちを斷崖の鼻まで釣り上げた。フランソアは橇と積荷とを上げてから、最後に上つて來た。それから今度は下りる場所をさがして、結局、又綱の助けで降りた。かうして夜になつて初めて彼等は再び川の上に戻つたが、其一日の出来ばえは悪く、たつた一マイルの四分の一進んだだけであつた。

やがて彼等はよき氷結してゐるフータリンクアに着いた。然しバツクはその時までに、すつかり疲れきつてゐた。外の犬た

る。

by a miracle. 奇蹟的に。

thong 革紐。

rove. Silver of cotton, wool, etc. drawn out and slightly twisted. 綿、羊毛の粗紡絲。

cliff crest. 岩の鼻。

to the day's credit その日の信用に、出来ばえに、成績に。

made. 達した。

the Hootalinqua and good ice フータリンクア川とよき氷に達したといふのは氷のよきはつてゐるフータリンクア川に達したといふこと。

was played out. 疲れた。

were in like condition; but Perrault, to make up lost time, pushed them late and early. The first day they covered thirty-five miles to the Big Salmon; the next day thirty-five more to the Little Salmon; the third day forty miles, which brought well up toward the Five Fingers.

Buck's feet were not so compact and hard as the feet of the huskies. His had softened during the many generations since the day his last wild ancestor was tamed by a cave-dweller or river man. All day long he limped in agony, and camp once made, lay down like a dead dog. Hungry as he was, he would not move to receive his ration of fish, which François had to bring to him. Also, the dog-driver rubbed Buck's feet for half an hour each night after supper, and sacrificed the tops of his own moccasins to make four moccasins for Buck. This was a great relief, and Buck caused even the weazened face of Perrault to twist itself into a grin one morning, when François forgot the moccasins and Buck lay on his back, his four feet

like condition = similar condition.

make up. つぐなふ。

brought them well up toward the Five Fingers. well = quite.
toward = near.

softened. 全體が軟弱になつてゐたこと。

generation. 子が親に代る平均年代(普通一世紀即ち百年の三分の一又は三十年)

cave-dweller 人類の最初のは、穴居人であつた。

river man. 歴史以前 (prehistoric days) には穴居人の外に湖や川の

ちも同じことであつた。併しペローは、失はれた時を取返すために、夜遅くまで、朝は早くから、彼等を追ひ立てた。第一日には「大鮭川」まで三十五マイル、二日目には「小鮭川」まで更に三十五マイル、三日目には更に四十マイル行つた。もう「五本の指川」の近くまでやつて来た。

バツクの足はハスキーの足程こちこちにはなつて居なかつた。彼の足は、野性の先祖が歴史以前に穴居人か河上人かによつて初めて飼犬にされたその時から、長い間に、全體に軟弱になつて了つてゐたのである。一日中、彼は苦悶の中に足を引きずつて歩いた。野營がはられると彼は直ぐさま、死んだやうになつて寝て了つた。餓えてはゐたが、魚の一日分の食糧を受けるために身體を動かすこともしなかつた。それでフランソアはわざわざそれをバツクに持つて来てやらなければならなかつた。橇犬追ひのフランソアは又、毎晩夕食後に半時間づゝバツクの足を揉んでやり、自分の鹿皮の靴の上の方を切り取つて犠牲にし、バツクの四足に穿かせる雪靴を拵へてやつた。バツクはこれで大變助かつた。フランソアがその雪靴を忘れてゐると、バツクは仰向になつて、その四足を訴へるやうに空中にばたばた動かしながら、雪靴を穿かないでは起上らうともしなかつた。

ほとり、或は湖や川にさし出たやうな家を作つて住んで居たものがあつたであらうと考へられて居る。

all day long 一日中。

camp once made = the camp being once made; when the camp was once made.

Hungry as he was = although he was hungry.

would not ... したりなんぞしなかつた。(would 一したりしたものだ)

lay on his back 仰向けに寝た。

waving appealingly in the air, and refused to budge without them. Later his feet grew hard to the trail, and the worn-out footgear was thrown away.

At the Pelly one morning, as they were harnessing up, Dolly, who had never been conspicuous for anything, went suddenly mad. She announced her condition by a long, heart-breaking wolf howl that sent every dog bristling with fear, then sprang straight for Buck. He had never seen a dog go mad, nor did he have any reason to fear madness; yet he knew that here was horror, and fled away from it in a panic. Straight away he raced, with Dolly, panting and frothing, one leap behind; nor could she gain on him, so great was his terror, nor could he leave her, so great was her madness. He plunged through the wooded breast of the island, flew down to the lower end, crossed a back channel filled with rough ice to another island, gained a third island, curved back to the main river, and in desperation started to cross it. And all the time, thought he did not look, he could hear her snarling just one leap behind. François called to him a

waving ぼたぼた動かして。

budge = to stir; go; move.

footgear. 穿き物; 靴。

raced. かけた。

one leap behind. 一足づつおくらせて。

つたやうな朝は、さすがのペローの萎びた顔も、それをゆがめて、にやつと笑ふこともあつたのである。然し後にはバツクの足も段々に堅くなつて、其の靴の破れたのを棄て、了つて平氣であつた。

ペリー川で、ある朝、革具を取りつけながら、何事にもこれまで目立つたことをしなかつた牝犬のドリーが急に氣が狂つた。彼女は長い腹を裂くやうな狼のやうな吼え方をした。それは彼女が發狂したことを示すものであつた。それを聞くと總ての犬は戦慄して、毛を逆立たせながら、いきなり、バツクに飛びかゝつた。バツクは犬の發狂するのを見た事がなかつた。隨て犬の發狂を恐れる理由もなかつたわけだ。だが、今になつて犬の發狂の恐ろしいことが初めて分つて、恐慌を起して逃げ出した。彼が一直線に傍目もふらず逃げて行くと、ドリーは一足おくらせて、あえぎながら、泡を吹きながら、後を追つかけて來た。幾ら追つかけても、追つかけても追ひつかれない。それだけ却て、バツクの恐怖は大きかつた。幾ら逃げても逃げ了せられぬ。それだけドリーの狂氣は一層烈しかつた。バツクは島の森ふところに飛び込んだ。そして岸へと飛び抜けて、ざくざくと氷のはりつめた後ろの水道を越えて、他の島にうつり、更に第三の島に行き、再び元の本流のところへ迂回して戻り、もう絶對絶命で此の川を横ぎらうとした。その間、始終、見るのは恐ろしいので見なかつたが、直ぐ一足うしろの方にドリーの唸り聲が聞えてゐた。フランソアは三四丁の此方からバツクを呼

gain on. おひつく。

wooded. 木の繁つた (wooded land; wooded banks)

breast of the island 島の中心 (in the heart of the wood there is a pond)

quarter of a mile away and he doubled back, still one leap ahead, gasping painfully for air and putting all his faith in that François would save him. The dog-driver held the axe poised in his hand, and as Buck shot past him the next crashed down upon mad Dolly's head.

Buck staggered over against the sled, exhausted, sobbing for breath, helpless. This was Spitz's opportunity. He sprang upon Buck, and twice his teeth sank into his unresisting foe and ripped and tore the flesh to the bone. Then François's lash descended, and Buck had the satisfaction of watching Spitz receive the worst whipping as yet administered to any of the team.

"One devil, dat Spitz," remarked Perrault. "Some dam day heem keel dat Buck."

"Dat Buck two devils," was François's rejoinder. "All de tam I watch dat Buck I know for sure. Lissen: some dam fine day heem get mad lak hell

double back=turn sharply in flight.

shot past him 矢の如く速に彼を行き過ぎた。

crashed down upon=fell upon with a crash. **crash**=make a crash; move with a crash. この **crash** は名詞だと、noise as of broken crockery, thunder, loud music である。

stagger over against. で身をさへた。

watching Spitz receive=seeing Spitz receive. かくの如く watch, see, hear を用ゐると、to receive の to を省く。

the worst whipping as yet administered=the worst whipping

んだ。バツクは、急に、向を變へた。矢張り、一飛びつづ先に立つて、苦しさに、息を切らしてゐた。たゞ、フランソアが自分を助けて呉れることを、信仰してゐた。フランソアは斧を手にして身構へた。バツクが彼の前を飛ぶやうに駆けぬけるや否や、斧は忽ち落ちて、氣の狂つたドリーの頭を打碎いたのである。

バツクは橋にぶつかつてよろめいた。力は脱けて、はあはあ云ひながら、頼りなく見えた。この時こそスピッツのねらふ機会であつた。スピッツはいきなり、バツクに飛びかゝつた。この無抵抗の敵に對してスピッツの齒は二度も咬みついて骨までその肉を引き裂いて、ざくろのやうな口をあけた。其の時フランソアの鞭が下つた。そしてバツクは、スピッツがこの組のどの犬にも未だ曾て與へられたことのない一ばんひどい、折檻を加へられるのを、こゝろよけに見てゐた。

「あのスピッツの野郎と來たら、仕様のねえ畜生だ！」ペローがいつた。「今にバツクを殺しやがるかも知れねえ。」

「バツクの野郎も悪いのよ」とフランソアは答へて云つた。「俺あすつと、バツクに氣を付けてるんだが、何にねえ、奴あ！俺あ知つてるんだ。あの、あん畜生きつと、そのうちにすつ

that had ever been administered. この as yet これまで; so far の意味

Some dam day heem keel dat Buck=some damn day him kill that Buck. **damu** は it is damned so hot のやうに、力を強める時用ゐる俗語。

rejoinder. an answer to a reply.

all de tam=all the time.

lissen=listen.

lak hell=like hell (悪い事が) 非常に。

an' den heem chew dat Spitz all up an' spit heem out on de snow. Sure. I know."

From then on it was war between them. Spitz, as lead-dog and acknowledged master of the team, felt his supremacy threatened by this strange Southland dog. And strange Buck was to him, for of the many Southland dogs he had known, not one had shown up worthily in camp and on trail. They were all too soft, dying under the toil, the frost, and starvation. Buck was the exception. He alone endured and prospered, matching the husky strength, saveagery, and cunning. Then he was a matserful dog, and what made him dangerous was the fact that the club of the man in the red sweater had knocked all blind pluck and rashness out of his desire for mastery. He was preëminently cunning, and could bide his time with a patience that was nothing less than primitive.

an' = and

den = then.

heem chew dat Spitz = he will chew that Spitz.

all up = completely.

spit heem out = throw him out.

on de snow = on the snow.

sure = yes.

from then on = from then.

acknowledged master. この前に as がある。

strange Buck was to him = Buck was strange to him.

for 何となれば—以下何故 Buck が彼に strange な、不思議な怪物であるかを説明する。

かり気が狂つて、スピッツを喰ひしやぶつて、雪の上へ吐き出しちまふだらうよ。俺にあ分るんだ」

其時からこつち、バツクとスピッツとの間は戦争状態であつた。スピッツはリーダーで、此の組の頭として認められてゐる犬だ。自己の主權が、この得たいの知れない南國犬に脅されてゐるのを感じた。バツクは彼に取つて實に得たいが知れなかつた。キャンプに於て、或は權犬として、彼の知つてゐる多くの南國犬の中で、一匹としてこれと思ふ犬はなかつた。何れもあまりに軟弱で、この苦役と寒氣と飢餓の下に堪へられないで、皆な死んで了つた。然るにバツクは例外だつた。彼のみは、よく耐へうまくやつて行つた。力と蠻骨と狡猾とに於て、バツクは決してハスキーに負けなかつた。かくして、彼は首領的の犬だ。そして彼が危険なものとなつたのは、赤いスウェターの男がバツクの抱ける首領權の慾望から、盲目的勇氣と輕率とを、その棍棒の力で、叩き落して了つた事だ。かくして彼は何よりも狡猾で圖抜けて鋭敏である上に、全く本能的な忍耐を以て、彼の時のいつかは來ることをひそかに待つてゐたのである。

frost. 寒氣。

he alone. 彼のみは。

endure. 堪へる。松の如きは寒さにめげず、endurance がある。長くいつまでも空中に居る耐久飛行を endurance flight と云ふ。いつまでも氣を長くして待つ忍耐を patience と云ふ。或る目的の爲めに誘惑に打ち勝ち克己忍耐して勉強するは forbearance. 迫害を顧みず忍耐固執するは perseverance である。

prospered. got on well; 繁昌した。Buck は力もあり、忍耐力もあり、Buck がなくてはならないやうになつたのである。

match. 匹敵する。

bide = to wait for.

that was nothing less than primitive = that was primitive.

It was inevitable that the clash for leadership should come. Buch wanted it. He wanted it because it was his nature, because he had been gripped tight by that nameless, incomprehensible pride of the trail and trace—that pride which holds dogs in the toil to the last gasp, which lures them to die joyfully in the harness, and breaks their hearts if they are cut out of the harness. This was the pride of Dave as wheel-dog, of Sol-leks as he pulled with all his strength; the pride that laid hold of them at break of camp, transforming them from sour and sullen brutes into straining, eager, ambitious creatures; the pride that spurred them on all day and dropped them at pitch of camp at night, letting them fall back into gloomy unrest and an uncontent. This was the pride that bore up Spitz and made him thrash the sled-dogs who blundered and shirked in the traces or did away at harness-up time in the morning. Likewise

should come. この should は it was inevitable を it is inevitable とすれば shall となるものである。

his nature. 彼の性質。

grip. 握る。

trace. 縄の引革のこと。trail and trace で縄をドーンへ引ばつて行くことをいふ。

lure. 誘惑する。

sour. 氣むづかしい。

sullen. 澁面の。

straining. Drawing with force. カづくで引つづること。

リーダーシップを得やうとしての衝突の起る事は、最早避け難きであつた。バツクは首領權の獲得を欲してゐた。彼がそれを得んと欲したのは、それが彼の本然の性質であつたのだ。彼は橋腕といふ名づけ難き、捕捉し難き誇りにすつかり囚へられてゐたのだ。——その誇りといふのは、此のつらい仕事に従ふ犬の凡てが、最後の一呼吸まで持つところのもので、この誇りあるために、彼等は喜んで挽革の間に死に、若し挽革から退けられれば其の胸を破るに至るのであつた。この誇りは、また橋のすぐ前に立つ殿の犬としてのデーヴの誇りであり、ソルレクスが一生懸命に力を出して引つばつたのも、この誇りあるがためであつた。キャンプをたゝんで出發する際に、この誇りが彼等を捉へ、氣むづかしい、澁面な彼等をして、忽ちにして緊張した、熱心な、野心のある生物に變ぜしめた。また此の誇りは、一日中、彼等を鞭撻し、夜、キャンプをはつた時に、はじめて彼等を棄てて、再び彼等をして陰鬱な不安と不満足の状態に戻らしめた。この誇りこそは、又、常にスピッツの心を銷沈せしめざらしめたものであり、他の挽犬どもがへまな間違をやつたり、すべき事をしなかつたり、朝、革具をつける時に姿を隠したりする時に、彼等をひつばたいたりさせた誇りである。同様

dropped them. 彼等と別れた。

at pitch of camp. キャンプを張る時分。

bore up. bear up (意氣を銷沈せしめないでおく) の過去。bear, bore, borne or born. I hope bore up the mind under his sufferings (苦惱しながらも、希望が彼の意氣を銷沈せしめないであつた)

thrash=beat, especially with stick or with whip; conquer.

blunder=stupid or careless mistake.

shirk=avoid meanly, get out of, shrink selfishly from (duty, responsibility, fighting, etc.)

it was this pride that made him fear Buck as a possible lead-dog. And this was Buck's pride, too.

He openly threatened the other's leadership. He came between him and the shirks he should have punished. And he did it deliberately. One night there was a heavy snowfall, and in the morning Pike, the malingerer, did not appear. He was securely hidden in his nest under a foot of snow. François called him and sought him in vain. Spitz was wild with wrath. He raged through the camp, smelling and digging in every likely place, snarling so frightfully that Pike heard and shivered in his hiding-place.

But when he was at last unearthed, and Spitz flew at him to punish him, Buck flew, with equal rage, in between. So unexpected was it, and so shrewdly managed, that Spitz was hurled backward and off his feet. Pike, who had been trembling abjectly, took heart at this open mutiny, and sprang upon his overthrown leader. Buck, to whom fairplay was a forgotten code, likewise sprang upon Spitz.

he = Buck.

the other's leadership. = Spitz's leadership.

a foot of snow. 一尺ばかり積つた雪。

sought him in vain = looked for him but it was in vain.

wrath. 怒、怒氣。

shiver. ふるえる。

に、彼をして、バツクはいつか先導犬になりはしないかとバツクを恐れしめたのも、この誇りであつたのである。さうしてそれが又バツクの誇りでもあつた。

バツクはスピッツの持つてゐる首領權を公然と脅かした。彼はスピッツと、スピッツが罰すべき筈であつた犯則者との間に立つた。然かも彼は或る意圖を以てそれをしたのである。或夜、雪がひどく降つた。朝になつて性惡のバイクの姿が見えない。彼は一尺も積つた雪の下の寝場所で暖かく隠れてゐたのである。フランソアが呼んでも返事はなく、そこいら中探したがそれも無駄であつた。スピッツは疥癩を起して了つた。彼はキャンプ中あばれまはつた。こゝぞと思ふ所をかぎまはり、掘つて見たりした。そして、バイクは隠れ場所の中でその聲を聞いて震へてゐたほど、フランソアは恐ろしく唸り聲を立てゝゐた。

でも、とうとうバイクが雪の中から掘り出されて、スピッツが彼を懲罰せんと飛びかゝつた時に、バツクも同じ勢で其の間に飛び込んだ。全くそれは待設けない事であつた。さうして其のやり方が餘りに抜目がなかつた爲めに、スピッツは後方へ追はれ追はれて、おつ倒れた。それまでだらしなく震へてゐたバイクは、この公然の叛逆に元氣を得て、倒れた首領に飛びかゝつた。バツクに取つては、公平なんてことは忘れられたる昔の掟であつた。かうしたバツクも同じやうに、スピッツに飛びか

unearth. 掘出す。

at him. 彼を目がけて。

flew.....in between = flew in between them.

abjectly = miserably.

mutiny. 軍隊内の叛逆。

code. 法典。

But François, chuckling at the incident while unswerving in the administration of justice, brought his lash down upon Buck with all his might. This failed to drive Buck from his prostrate rival, and the butt of the whip was brought into play. Half-stunned by the blow, Buck was knocked backward and the lash laid upon him again and again, while Spitz soundly punished the many times offending Pike.

In the days that followed, as Dawson grew closer and closer, Buck still continued to interfere between Spitz and the culprits; but he did it craftily, when François was not around. With the covert mutiny of Buck, a general insubordination sprang up and increased. Dave and Sol-leks were unaffected, but the rest of the team went from bad to worse. Things no longer went right. There was continual bickering and jangling. Trouble was always afoot, and at the bottom of it was Buck. He kept François busy, for the dog-driver was in

chuckle. (Indulge in) suppressed laughter.

unswerve. はづれぬ、確乎としてゐる。

with all his might. 力一ぱいに。

his prostrate rival. Spitz のこと。

butt. = thicker end of tool or weapon. butt or butt-end (は remnant の意味もあり、巻煙草の吸ひがらは butt of a cigarette である。

half-stunned. 半ば氣絶して。

soundly. 手ひどく。

かつた。けれども、フランソアは此の事件を見て苦笑してゐながらも、裁判の執行には確乎たる態度で、力を込めてバツクを鞭打つた。それでも、バツクはうづくまつた競争者から離れやうとしなかつた。今度は鞭の柄の方でなぐりつけた。この打撃に眼がまはるほどになつたバツクは、漸く追ひのけられた。そして更に幾度か鞭打たれた。其間にスピッツは幾度も幾度も眼にあまつた事をするバイクを、いやといふほど懲罰したのである。

其の後何日かの間、ドーソンはだんだん近くなつたが、バツクはなほ依然として、スピッツとその犯罪者との間に干渉をつけた。だが、彼の仕方は中々巧妙で、いつもそれはフランソアが側に居ない時ばかりであつた。バツクのこの隠密の叛逆が始まると、全體に不従順の氣がみなぎつて、それが増大して行つた。デーヴとソルレクスとはそんな事に全く無關心であつたが、他の挽犬たちは次第に悪化して行つた。萬事が目茶苦茶になつて了つた。喧嘩が絶えずあつてやかましい。ともすると直ぐに騒ぎが起る。そしてその後にはいつもバツクがゐた。その爲めにフランソアは中々大抵ではなかつた。彼は疾う

the many times offending = often offending. こゝに the があるのは Pike といふ名前の前に形容詞として置く時 the が伴ふのである。例へば the undaunted Buck (勇敢なバツク) の如し。

closer and closer. だんだん近く。

was not around. そのほとりに居なかつた。

bickering = quarrel.

jangling = wrangle.

trouble was always afoot (参考: a plan is afoot to.....)

constant apprehension of the life-and-death struggle between the two which he knew must take place sooner or later; and on more than one night the sounds of quarrelling and strife among the other dogs turned him out of his sleeping robe, fearful that Buck and Spitz were at it.

But the opportunity did not present itself, and they pulled into Dawson one dreary afternoon with the great fight still to come. Here were many men, and countless dogs, and Buck found them all at work. It seemed the ordained order of things that dogs should work. All day they swung up and down the main street in long teams, and in the night their jingling bells still went by. They hauled cabin logs and firewood, freighted up to the mines, and did all manner of work that horses did in the Santa Clara Valley. Here and there Buck met Southland dogs, but in the main they were the wild wolf husky breed. Every night, regularly, at nine, at twelve, at three, they lifted a nocturnal song, a weird and eerie chant, in which it was Buck's delight to join.

With the aurora borealis flaming coldly overhead, or the stars leaping in the frost dance, and

present. 出現する。

dreary = dismal, gloomy, dull.

ordained = destined.

in long teams. 長い列を作つて。あとからあとからさうした列がつゞくからである。かういふ team は皆な犬を一列に並べるのである。

から、此の二匹の間に生死を争ふ闘争が晚かれ早かれ、起らなければならない事を知つて、絶えず心配してゐたのである。それで幾晩も幾晩も、他の犬たちの喧嘩や、つかみ合ひの物音を聞きつけると、その喧嘩の渦中にバツクとスピツツとが居はしないかと心配になつて、寝場所から飛び出したことである。

然し實際にその機會は來なかつた。彼等は或る佻しい灰色の日の午後、やつとドーソンの町に着いたが大格闘はこれからといふ氣ざしがあつた。ドーソンの町には澤山の男と無数の犬とが居て、皆が一生懸命に働いてゐるのがバツクの眼にもうつゝた。犬の働くといふことは全く自然の運命であるかのやうに思はれた。一日中彼等は長い列を作つて、えつさ、えつさ、大通りを上つたり下つたり、夜になつても、まだ彼等の鈴音が聞えて來た。彼等は小屋作りの丸木や薪を運んだり、鑛山に物を運んだり、其の他あのバツクの育つたサンタ・クララ・ヴァレーなら馬のする色々な仕事をしてゐた。こゝでバツクは南國犬に出逢つたが、大體、彼等は皆狼ハスキー種である。毎晩、彼等は規則正しく、きまつて九時、十二時、三時に、一種氣味の悪い、何となく恐ろしい調子で夜の歌を聲をあけて唱ふ。バツクはそれにつれて一緒に唱ふのが愉快でたまらなかつた。

極光が冷たく空に輝き、星がいくつが霜夜の踊りで流れ飛ぶ時、大地はその眞白な雪衣を着て、痺れ凍えてゐる時、此のへ

haul. 強く曳く。

weird. 運命の、怪しい、氣味のわるい、妖術の。

eerie. 何となく恐ろしい。

chant. = measured monotonous song.

the land numb and frozen under its pall of snow, this song of the huskies might have been the defiance of life, only it was pitched in minor key, with long-drawn wailings and half-sobs, and was more the pleading of life, the articulate travail of existence. It was an old song, old as the breed itself—one of the first songs of the younger world in a day when songs were sad. It was invested with the woe of unnumbered generations, this plaint by which Buck was so strangely stirred. When he moaned and sobbed, it was with the pain of living that was of old the pain of his wild fathers, and the fear and mystery of the cold and dark that was to them fear and mystery. And that he should be stirred by it marked the completeness with which he harked back through the ages of fire and roof to the raw beginnings of life in the howling ages.

Seven days from the time they pulled into

numb. ちかんで了ふ。

frozen. 凍れる。

pall. 棺衣、外套。cloth, usually of black or purple or white velvet, spread over coffin, hearse, or tomb; mantle; cloak. pall-bearer—a person holding up corner of pall at funeral.

it was pitched in minor key. この minor は G Minor とか F Minor とかいふ minor である。minor key といふと scale が minor third であることである。minor key は、悲しみを示すことが多い。だから conversation in minor key と云へば doleful なことである。この minor (短調) は major (長調) に対する。pitch は音の高低のことで、was

スキーの唱ふ歌は、まさに生に対する反抗とも云へる。たゞ其の調子は短調で、長く尾を引いた泣き叫び、すゞり泣きの聲であつた。生への反抗といはんより、むしろ生の哀訴、生存の苦みを叫び立てゝゐるやうでもあつた。それは古い昔ながらの歌であつた。その種族そのものやうに古き歌であつた。——それは、歌が凡て悲しみの表現であつた時代の、今よりも若かりし世界の最初の歌の一つであつた。無限の幾世代の人世の悲しみがこの歌の中に籠められてあつた。この悲歎こそ、それによつてバツクの心が不思議にも動かされたのである。彼が今呻き泣く時、それは、生活の苦痛の爲めであつた。即ち彼の野性であつた時代の祖先が、その昔、嘗めた同じ苦痛の爲めであつた。また、それは寒さと暗黒とに対する恐怖と、神秘との爲めであり、それは彼の祖先のもつた恐怖と、神秘に外ならなかつた。そして今彼がこの歌を聞いてその心を動かしたのは、彼が文明化して、火を用ゐ、屋根の下に住むといふ長い年月を通して、狼として遠吠えをしてゐた時代の生の抑もの原始時代に完全に喚び戻つたことを示すものである。

ドーソンに入つてから七日経つて、彼等はバラクス川の急流

pitched はその音の高さが fixed されたことである。

sad=mournful. in sad earnest といへば seriously といふこと。

of old. 昔しでは。

mystery. 不思議、神秘。

hark. (of hounds) retrace course to find scent.

ages of fire and roof 人類が火を用ゐ、家を作るやうになつてからの幾年代。

raw. 生れたまゝの、原料の、加工せざる。

howling ages. 狼のやうに遠吠してゐた時代。

Dawson, they dropped down the steep bank by the Barracks to the Yukon Trail, and pulled for Dyea and Salt Water. Perrault was carrying despatches if anything more urgent than those he had brought in; also, the travel pride had gripped him, and he purposed to make the record trip of the year. Several things favored him in this. The week's rest had recuperated the dogs and put them in thorough trim. The trail they had broken into the country was packed hard by later journeyers. And further, the police had arranged in two or three places deposits of grub for dog and man, and he was travelling light.

They made Sixty Mile, which is a fifty-mile run, on the first day; and the second day saw them booming up the Yukon well on their way to Pelly. But such splendid running was achieved not without great trouble and vexation on the part of François. The insidious revolt led by Buck had des-

the Barracks 川の傍に barracks があるので、から普通呼び慣れてゐる。「小屋川」とでもいふのであらう。

Yukon Trail. 未開の土地では、人の自づから通る道があり、それが trail である。たとへば Indians などの普通つたといふ、trail などが其處此處にある。

pulled for.....の方へ向つて橇を引いたことである。

if anything 何か持つてゐることなれば、その他には何にも持つてゐなかつたのである。

trim. 整然としたる順序。木など刈込んで、綺麗にしてあること。

に沿うてユーコン路へと下つた。そして元のダイヤと「潮水」へと向つて橇を引いた。ペローは来る時に持つて来た公文書よりも、もつと至急な公文書を持つてゐた。早飛脚の誇りに囚へられて、ペローはこの年のレコードの速力を作らうと思つてゐた。それには色々な事があつた。一週間の休息で犬たちも、すつかりその元氣を回復した事はその一だ。彼等の持つて来た橇路は、後の旅行者に依つて踏みかためられた事もその一だ。そればかりでなく、警察が二三箇所には犬と人の食糧の貯蔵所を設けてゐたことも好都合だつた。かくて彼は手輕に旅が出来た。

彼等は第一日に五十マイル行つて所謂「六十マイル」といふところに達した。二日目には早、ユーコン川を元氣よく遡つてペリーへと向つてゐた。然しこんな素晴らしい早旅をするには、橇犬追ひのフランスアの面倒と、いらいらした心配とは大變なものであつた。バツクが先に立つて、秘密に進行してゐる反逆は既に組の連帶的結合を破壊して了つた。最早一組全體が一

further. 尙ほ更に。

travelling light. 身輕に旅をする。

Sixty Mile これは地名である。

the second day saw them booming up the Yukon. この the second day は主格である。booming up the Yukon は them につく。booming up the Yukon ユーコン川を溯るので、大さわぎして景氣づけてゐる。

vexation. 焦燥、心配の状態。state of irritation or distress.

insidious=treacherous.

troyed the solidarity of the team. It no longer was as one dog leaping in the traces. The encouragement Buck gave the rebels led them into all kinds of petty misdemeanors. No more was Spitz a leader greatly to be feared. The old awe departed, and they grew equal to challenging his authority. Pike robbed him of half a fish one night, and gulped it down under the protection of Buck. Another night Dub and Joe fought Spitz and made him forego the punishment they deserved. And even Billee, the good-natured, was less good-natured, and whined not half so placatingly as in former days. Buck never came near Spitz without snarling and bristling menacingly. In fact, his conduct approached that of a bully, and he was given to swaggering up and down before Spitz's very nose.

The breaking down of discipline likewise affected the dogs in their relations with one another. They

solidarity. にかわでくつついたやうになつてゐる連帶的結合。社會連帶といふことが今日云はれてゐる。社會全體の幸福を目的にした思想である。貧民などが間に介在すれば社會の連帶性は危くなるからである。これは *solidarity* の思想である。

misdemeanors = offense, misdeed 輕き罪、悪い行爲、不行跡。(=ニューヨークの地下鐵の中に、不行跡を取締つた廣告があつてそれに *misdemeanor* が用ゐられてゐる)

fear. 畏れ敬ふ。恐れる。

awe. 神に對して持つやうな畏れ敬ふ念。もし神にそむいたりすると恐ろしい天罰がありはしないかなどいふ考も含まれてゐる。

gulp. 一とくちに呑んで食べる。

匹の犬のやうになつて走るといふわけには行かなかつた。バツクに唆かされた叛逆者どもは、皆少しづつ様々の不行跡をするやうになつた。スピッツは最早大して恐れ敬ふべき首領ではなかつた。昨日の畏敬は去つて了つて、彼等は今はスピッツの權威に挑戦する對等者となつた。パイクは或晩、スピッツの分の魚を半分盗んで、バツクの保護の中に一と呑みにしてしまつた。又或る晩は、ダツブとジョーがスピッツと喧嘩をしたが、スピッツは彼等の受くべき刑罰を加へる事を差控へなければならなかつた。そして、お人好しのピリーですらも、もうこれほどお人好ではなくなつて、以前の半分ほども、妥協的 - 泣聲を立てるといふことをしなくなつた。バツクはスピッツの傍に来る度に、必ず唸り聲を立て、逆毛を立てた。事實彼の行爲は全く弱い者いぢめをする暴君のそれに近く、スピッツのすぐ眼の前で威ばり散らして歩きまはると言ふ有様であつた。

規律の頽廢は同様に犬共の相互關係にまで及ぼした。彼等は前よりも一層、喧嘩をし合ひ、つまらない事で角突き合ひをす

forego. さしひかへる。

placate = pacify, conciliate.

bully. 弱いものいぢめをする人。tyrant (especially among boys), coward and tyrant; hired ruffian. (obsolete seuces, lover, sweetheart, gallant, fine fellow)

swagger. walk like a superior among inferiors, show self-confidence or self-satisfaction by gait, go *a'out, in, out, &c.*, with such walk. 傲然として目下のものたちの間を歩きまはる。

before Spitz's very nose = before Spitz. すぐ目の前を。(You have it under your very nose.)

quarrelled and bickered more than ever among themselves, till at times the camp was a howling bedlam. Dave and Sol-leks alone were unaltered, though they were made irritable by the unending squabbling. François swore strange barbarous oaths, and stamped the snow in futile rage, and tore his hair. His lash was always singing among the dogs, but it was small avail. Directly his back was turned they were at it again. He backed up Spitz with his whip, while Buck backed up the remainder of the team. François knew he was behind all the trouble, and Buck knew he knew; but Buck was too clever ever again to be caught red-handed. He worked faithfully in the harness, for the toil had become a delight to him; yet it was a greater delight slyly to precipitate a fight amongst his mates and tangle the traces.

At the mouth of the Tahkeena, one night after

bicker=quarrel.

at times. 時々。

bedlam. Hospital of St. Mary of Bethlehem used as lunatic asylum; any madhouse; scene of uproar.

squabble. engage in petty or noisy quarrel (*with person about thing*)

François swore strange barbarous oaths. この oath といふのは、Go! damn! (畜生) などいふのがそれで、たとへば God damn! What's this noise! (畜生何といふさわぎだ) などいふところだ。strange barbarous oaths といふのは、にんにん、よく分けの分らないことないふのがあつて、たとへば人の知らない、聞きかじりの支那語を入れて見たりすることである。swear といふのは、かういふ oaths を口に出すことといふ。上品な人たちは決して swear しないと云ふので、Don't swear! などと修身の本にはある。

るといふ風で、屢々キャンプは全く精神病院のやうな騒ぎであつた。デーヴとソルレクスとのみは、昔の通りだつた。只絶間もない喧嘩に始終いらいらしてゐた。ソランソアは堪へきれなくなつて、譯けの分らない野蠻なことをいつて、怒鳴つてゐた。そして徒らに怒りちらして雪を踏みにおつたり自分の髪の毛を引きむしつたりした。彼の鞭は、絶えず犬どもの間に、うなつてゐたが、何の効もなかつた。彼が背を見せるや否や彼等は騒ぎをおつばじめた。フランソアが鞭でもつて、スピッツを後援すると、バツクは組の犬全體の後立になつてゐた。フランソアはすべての騒ぎの奥にはバツクの居る事を知つてゐた。バツクも亦、フランソアがそれを知つてゐることを知つてゐた。けれどもバツクは現場をつかまるやうなへまをするには、餘りに賢かつた。彼は忠實に橈挽の仕事に従事した。何となれば、その勞役は既に彼に取つて、楽しみになつてゐたからでもある。けれども、ひそかに急に仲間同志の中に喧嘩を起させ、撓網を混亂させることは、彼に取つて一層大きな喜びであつた。

ターキーナ川の口で、夕食後の或る晩、ダツプは一匹の雪靴

stamp the snow. 床など踏みならしたりするのを stamp the floor といふ。さういふやうに怒氣満身で、雪をけちらしたのである。

tore his hair. これも煩悶したり、焦燥の時する表情で、髪をかきむしるのである。日本でこの表情を初めて日本の觀客の前に見せたのは、洋行から歸つた川上晋次郎のやつた Othello で、彼が Moor になつてこの表情を盛んにやつた。

it was of small avail=it was of no avail. (small wonder=no wonder) 勿論 small の方が度合は弱いけれども。

directly=as soon as.

tack up=help.

to be caught red-handed=現行犯をつかまへる (元來は人殺しに云つたもの)。red-handed は手が血にまみれて。

in the harness. 橈につきながら。

supper, Dub turned up a snowshoe rabbit, blundered it, and missed. In a second the whole team was in full cry. A hundred yards away was a camp of the Northwest Police, with fifty dogs, huskies all, who joined the chase. The rabbit sped down the river, turned off into a small creek, up the frozen bed of which it held steadily. It ran lightly on the surface of the snow, while the dogs ploughed through by main strength. Buck led the pack, sixty strong, around bend after bend, but he could not gain. He lay down low to the race, whining eagerly, his splendid body flashing forward, leap by leap, in the wan white moonlight. And leap by leap, like some pale frost wraith, the snowshoe rabbit flashed on ahead.

All that stirring of old instincts which at stated periods drives men out from the sounding cities to forest and plain to kill things by chemically propelled leaden pellets, the blood lust, the joy to kill—all this was Buck's, only it was infinitely more intimate. He was ranging at the head of the pack, running the wild thing down, the living meat, to kill with

turn up=dig out, disinter, as "plough turns up skulls."

snowshoe rabbit. 兎の一種。

blundered it. へまをやつた。

chase. 追跡(鬼ごつこで、こゝまでおいで chase me!)

sixty strong. 軍勢の時この strong を用ゐる。

bend 川が曲つてゐるところ。木の枝など圓くまげるのは bend である。急角度で曲つたのは curve である。

兎を堀り出したが、へまをして逃して了つた。忽ち組犬の全部が、わあつとさけび聲を立てて追つかけた。百ヤードばかり行くと、北西部警察のキャンプがあつて、其處には五十匹ばかりの犬——何れもハスキー種の——ゐたが、それが全部この追撃に加はつた。兎は川を駆け下つて、小さな支流へ駆け込み、凍りついた河床を駆けつゞけた。兎は身輕に雪の表面を走つて行つた。犬どもははげしい勢ひで蹴ちらして行つた。バックは其の群の、六十匹の軍勢の群を率ゐて、幾曲りかの川岸に添うて追撃したが中々追つつけなかつた。バックは増々この競争に一生懸命になり熱心に唸りながら、蒼白い月光を浴びて飛びながら、その見事な體軀を前進させた。すると、その兎もまた青白い寒冷の靈氣そのものでゝもあるかのやうに、一と飛び一飛び、前方へ前方へと風のやうに飛んだ。

銃獵期が來ると、古い本能に驅られて、人々は雑音の都會から、林野に出かけて行き、そこで、化學的に推進される鉛の小丸で生物を殺したりする。つまり血に餓ゑた慾情、生物を殺す快樂が然らしむるのだ。凡てこれがバックの慾望でもあつた。たゞ人間の場と比べて、限りなくそれよりも密接であることだ。彼は今、一群の先頭に立ち、彼自身の齒を以て、此の野生

lay down low to the race. は犬が身體をこゝめ力をこめて引つばつたこと。

wan. pale, colourless, bloodless.

stirring. かき立てる。

old instincts. 忘れ勝ちになつてゐた昔からの本能。

lust. 飢えきつた慾。

joy to kill 物を殺すことを喜ぶ本能。

his own teeth and wash muzzle to the eyes in warm blood.

There is an ecstasy that marks the summit of life, and beyond which life cannot rise. And such is the paradox of living, this ecstasy comes when one is most alive, and it comes as a complete forgetfulness that one is alive. This ecstasy, this forgetfulness of living, comes to the artist, caught up and out of himself in a sheet of flame; it comes to the soldier, war-mad on a stricken field and refusing quarter; and it came to Buck, leading the pack, sounding the old wolf-cry, straining after the food that was alive and that fled swiftly before him through the moonlight. He was sounding the deeps of his nature, and of the parts of his nature that were deeper than he, going back into the womb of Time. He was mastered by the sheer surging of life, the tidal wave of being, the perfect joy of each separate muscle, joint, and sinew in that it was everything that was not death, that it was aglow and rampant, expressing itself in movement, flying exultantly under the stars and over the face of

muzzle. 口鼻 (馬、犬)

ecstasy. 法悦、愉快の情の最高點。

paradox. 逆説。

caught up and out of himself = carried beyond himself by some great surge of feeling.

refuse quarter = refuse to surrender.

deeps. (usually plural) deep part(s) of the sea; abyss; mysterious

の生物、此の生きた餌食を追ひ付し、その暖かな血でもつて、顔を洗はうといふのである。

歡喜忘我の境こそは、生の頂上を示すものである。それ以上には生は上ることが出来ない。斯くの如きが生きることの逆説である。この歡喜忘我は、人が最も多く生活力の盛んな時に起り、そして人が生きて居ることを絶対に完全に忘却する形をもつて來るのである。歡喜忘我、自己忘却は、一面の焔に包まれ我を忘れた藝術家に來るのである。又戰場で戰爭氣狂になつて決して降参しない軍人に來るのだ。然るにそれが今バツクに來たのだ。一群の犬を率ゐ、古き時代の性質が呼び戻されて、狼の叫びを上げながら、生きた餌食が眼前に月光を横ぎつて矢のやうに逃げ走るのをひた走りに追ふバツクに來たのである。彼は自己の本性の深さを探つてゐた。彼れよりも深い其の本性の或る部分の深さを探つて「時」の懷ろへと戻つて來た。彼は生命の打つ浪、存在の津波によつて支配されてゐた。彼は一つ一つの筋肉、一つ一つの關節、一つ一つの腱の有する完全な喜びに支配されてゐた。すなはち筋肉も關節も腱もそれは何れも死を知らざるものであるといふことに於て——それは赤々と燃え、跳躍し、運動そのものに自らを表現し、皎々たる星の下に、動かざりし死物の面上に、歡極まつて飛躍する所に、完全

region of thought or feeling. 深さ。

womb [wu:m] 子宮。

being. 存在。

joint. 關節。

sinew. 腱。

exultantly. 感極まつたやうに。

dead matter that did not move.

But Spitz, cold and calculating even in his supreme moods, left the pack and cut across a narrow neck of land where the creek made a long bend around. Buck did not know of this, and as he rounded the bend, the frost wraith of a rabbit still flitting before him, he saw another and larger frost wraith leap from the overhanging bank into the immediate path of the rabbit. It was Spitz. The rabbit could not turn, and as the white teeth broke its back in mid air it shrieked as loudly as a stricken man may shriek. At sound of this, the cry of Life plunging down from Life's apex in the grip of Death, the full pack at Buck's heels raised a hell's chorus of delight.

Buck did not cry out. He did not check himself, but drove in upon Spitz, shoulder to shoulder, so hard that he missed the throat. They rolled over and over in the powdery snow. Spitz gained his feet almost as though he had not been overthrown, slashing Buck down the shoulder and leaping clear. Twice his teeth clipped together, like the steel jaws

dead matter. 死物。

neck of land. 陸の頸のやうになつてゐるところ。狭く地峽のやうになつてゐるところ。neck=pass, narrow channel, isthmus; narrow connecting part between two parts of thing.

wraith. [reiθ] Person's double or apparition seen shortly before or

な喜びを感じてゐるのである。

然るにスピッツは、この最もセンチメンタルの氣持の時でも、なほ、冷静で打算的な彼は、其の群を離れて、その枝流に長い曲りを拵へてゐる地球を横ぎつた。バツクはこのことを知らなかつた。そしてその川の曲りをぐるつと廻ると、雪の靈氣とも思はれる白兔が、なほ前方に矢のやうに走つてゐるのを見た。ところが、忽ち、更に他の一つの、もつと大きな雪の靈氣が、てうど兎が逃げて行く道の真ん中へ、のぞいたやうな崖の上から飛び下りたのを見た。それはスピッツだつた。兎は絶體絶命になつて了つた。そしてスピッツの白い牙が空中でその背骨を噛み碎くと、恰も襲はれた人間が叫ぶほどの高い叫びを上げた。此の叫びを聞いて、——すなはち、「生」が「死」にしつかつまへられて、「生」の頂から身を投げる時の此の「生」の叫びを聞いて、バツクに續く全群が、異口同音に大歡喜の地獄で聞くやうな響を上げたのである。

けれどもバツクは叫び聲を上げなかつた。彼は急に止りもせず、いきなりスピッツに飛びかかり、肩と肩と相撃つほどに餘りに肉薄して、スピッツの喉元を逸した。彼等は粉のやうな雪の中に轉がり廻つて戦つた。スピッツは忽ちにして起き上つた。嘗つて脚元をさらはれたことなぞはなかつたかの如く、バツクの肩先かけて一撃を與へて、直ちに、ひらりと飛びのいた。再び彼の牙が、鼠取りの鋼鐵の齒の様に、がちりと噛んだ。そ

after his death. 臨終前後に見ゆる人の生靈。魂 (person's double)。(誤つて) 亡靈 (apparition, spectre)

apex. 頂上(數學) 頂點。

powdery snow. 粉雪。

clip. がちりと食ひ合ふ。

of a trap, as he backed away for better footing, with lean and lifting lips that writhed and snarled.

In a flash Buck knew it. The time had come. It was to the death. As they circled about, snarling, ears laid back, keenly watchful for the advantage, the scene came to Buck with a sense of familiarity. He seemed to remember it all,—the white woods, and earth, and moonlight, and the thrill of battle. Over the whiteness and silence brooded a ghostly calm. There was not the faintest whisper of air—nothing moved, not a leaf quivered, the visible breaths of the dogs rising slowly and lingering in the frosty air. They had made short work of the snowshoe rabbit, these dogs that were ill-tamed wolves; and they were now drawn up in an expectant circle. They, too, were silent, their eyes only gleaming and their breaths drifting slowly upward. To Buck it was nothing new or strange, this scene of old time. It was as though it had always been, the wonted way of things.

Spitz was a practised fighter. From Spitzbergen through the Arctic, and across Canada and the Bar-

backed away. 後ろへ飛びのいた。

in a flash. ひらめくやうに忽ち。

sense of familiarity. この一節の終り頃に、this scene of old time: とあり、the wonted way of things とある。

brooded. この主格は a ghostly calm である。

was not the faintest whisper of air. この the faintest のやうな字の前には even を加へて解釋する。

して又飛びのいて一層いゝ足場を作つて、疲せた上向きの唇を震はせながら唸り立てた。

忽ちに、バツクは知つたのである。その時が来たのだ。死を賭けての勝負だ。耳を立てゝ、一心に敵のすきをねらつて、唸りながら、敵の周囲をぐるぐると遠巻きに廻りあふその光景が、バツクには、よく見慣れたものに感じたのである。彼は凡てそれを記憶から呼び戻した。——白い林、大地、月光、戦争の胸さわぎ。白さと沈黙の上に面妖な静寂が被さつてゐた。風は少しの囁きもなかつた。——何物も動かない。葉一枚でも微動だもしない。犬共の息はしづかに低迷して、つめたい空気の中にたゞよふのが見える。此等の犬ども——それは半ば犬で半ば狼である此等の犬どもは雪靴兎を忽ちのうちに片付けてしまつた。そしてなほも、いゝ餌物が轉つて来るのを待つやうに圓陣を作つて並んでゐた。彼等もまた、沈黙してゐる。彼等の眼はたゞぎよろぎよると輝き、彼等の息はしづかに低迷してゐた。バツクに取つて之れは少しも新しい事でも變つた事でもなかつた。昔のまゝの光景だ。それはてうど、いつもいつもの慣れ切つた事のやうであつた。

スピッツは百戦練磨の闘士であつた。スピッツベルゲンから北極を涉り、カナダを過ぎ、不毛地方を横ぎつて、いろいろの

ill-tamed. よく慣らされてゐない。犬は、tamed wolf だと考へて。

drawn up. 行列してゐる。

expectant. 倒れた方を食べやうと待ち設けてゐる。

in an expectant circle. かくした圓陣を作つてゐる。

nothing new or strange. かういふ、nothing, anything には形容詞はあとにつける。

rens, he had held his own with all manner of dogs and achieved to mastery over them. Bitter rage was his, but never blind rage. In passion to rend and destroy, he never forgot that his enemy was in like passion to rend and destroy. He never rushed till he was prepared to receive a rush; never attacked till he had first defended that attack.

In vain Buck strove to sink his teeth in the neck of the big white dog. Wherever his fangs struck for the softer flesh, they were countered by the fangs of Spitz. Fang clashed fang, and lips were cut and bleeding, but Buck could not penetrate his enemy's guard. Then he warmed up and enveloped Spitz in a whirlwind of rushes. Time and time again he tried for the snow-white throat, where life bubbled near to the surface, and each time and every time Spitz slashed him and got away. Then Buck took to rushing, as though for the throat, when, suddenly drawing back his head and curving

he held his own 自からを持して下らず。
with all manner of dogs さまざまの犬に對して。
achieved to mastery over them. この achieve は accomplish で普通 transitive verb だが、こゝでは intransitive に用ゐてある。won to the mastery over them といふこと。
bitter rage was his=bitter rage was his rage.
rend=tear or wrench (*off, away, out of, from, asunder, apart, &c.*)
in like passion=in similar passion.
rush. 突進、攻撃、襲撃、突貫。
strove. strive の過去。(strove, striven). struggle, endeavour, try hard, make efforts, contend, vie (*to do, for desired end, with or against*

犬に出食はしたが、よく自己を保つて下らず、遂に彼等を支配するの力を完成したのである。彼は激怒してはゐても、而も決して盲目的な激怒ではない。寸断し破壊せんとする狂熱の中にあつても、彼は敵が、同じく寸断破壊を心がける狂熱の中にある事を忘れるものではなかつた。彼は敵の突撃を受ける準備のある時でなければ決して自分から進撃しなかつた。敵の攻撃を彼が最初に防いだ後までは、決して自分から攻撃をすることはしなかつた。

バツクはこの大きな白い犬——スピッツ——の首にその齒を沈めやうとあせつたが、無駄であつた。彼の牙が今にも敵の柔かな肉を嚙まうとすると、いつもスピッツの牙の反撃を受けた。牙と牙と鳴り、唇は切られて血を流してゐるが、バツクはまだ敵の防禦を突破する事が出来ないのだ。彼は悠々と足慣らしをしてから、突撃の渦巻の中にスピッツを包んで了つた。幾度も幾度もバツクは、表面に生命が泡立つところの雪白の喉を目がけてかみつかうとしたが、その度毎に、スピッツは彼に一撃を與へて飛びのいた。すると、バツクは喉を狙ふふりをてし突進しながら、急に頭を後ろに引いて、横から頭を突き出し、

opponent or temptation or difficulty.
the big white dog. Spitz のこと。
guard. defensive posture or motion in fencing, boxing, etc; watch, vigilant state (*keep guard, be on guard*)
warmed up. 野球の仕合の前などに選手が足ならしなどやるのが warm up. である。
where life bubbled near to the surface. 喉のところの血管を一つかみ切れれば、それきりだから、生命が表面にちかく泡立つやうに、どきどきとみなぎつてゐると書いたのである。
took to rushing. 突進にかゝつた。
as a ram. てことして。

in from the side, he would drive his shoulder at the shoulder of Spitz, as a ram by which to overthrow him. But instead, Buck's shoulder was slashed down each time as Spitz leaped lightly away.

Spitz was untouched, while Buck was steaming with blood and panting hard. The fight was growing desperate. And all the while the silent and wolfish circle waited to finish off whichever dog went down. As Buck grew winded, Spitz took to rushing, and he kept him staggering for footing. Once Buck went over, and the whole circle of sixty dogs started up; but he recovered himself, almost in mid air, and the circle sank down again and waited.

But Buck possessed a quality that made for greatness—imagination. He fought by instinct, but he could fight by head as well. He rushed, as though attempting the old shoulder trick, but at the last instant swept low to the snow and in. His teeth closed on Spitz's left fore leg. There was a

instead. さうは出来ずにその反対に。

Spitz was untouched. スピッツの方は敵の攻撃の手が少しも觸れなかつた。

panting. いきせききつてゐる。

hard. ひどく、つらく。

growing desperate. 自暴自棄に、めちやくちやに、亂戦になりつゝ。

finish off. かたづけて了ふ。食べて了ふ。

grew winded. was panting.

the circle sank down. 取りまいてゐる犬たちはまた坐つたから

敵の肩に我が肩を突き當てゝ、それで敵を打倒さうと試みた。然し、却つて、バツクの肩はその度毎にかみつかれて、スピッツは軽々と飛びのいた。

スピッツはまだ一撃をも受けないのに、バツクは血に塗れて、苦しきうに喘いでゐた。戦闘はいよいよ死にもの狂ひになつて來た。その間に、沈黙した狼系統の圓陣は、どつちでも負けた方を料理して了はうと、待ちかまへてゐた。バツクがひゆうひゆう云つて息を切らして來た時、スピッツは突進を始め、幾度かバツクはよろめいた。バツクが倒れたとなるや、六十匹の犬の全圓陣が飛び出した。けれどもバツクは殆んど空中でその身構へを取戻した。それを見て、圓陣は又べちやりと腰を下して、静かに待つた。

然し、バツクは偉大を作り出す一つの性質をもつてゐた。それは想像力であつた。彼は本能で戦つたが、同様によく頭で戦ふことも出来たのである。前のやうに肩で肩を打つ攻撃の策を用ひる様に見せかけて突進したが、最後の瞬間に急に低く雪の上に身を伏せて、飛び込んだ。彼の齒はスピッツの左の前足をかんだ。齒がかみ合ふと、ほきりと骨の折れる音が聞えた。白である。

Buck possessed a quality that made for greatness—imagination. バツクは偉大さに貢献した性質——つまり想像力を持つてゐた。大體動物にはこの想像力が非常に缺けてゐるのである。make for=conduce to の結果を導く、に貢献する。

as well. 同様に。

the old shoulder trick. これが Buck のいつもの手なのである。(140 頁参照)

and in. そして食ひ込んだ。(swept in)

crunch of breaking bone, and the white dog faced him on three legs. Thrice he tried to knock him over, then repeated the trick and broke the right fore leg. Despite the pain and helplessness, Spitz struggled madly to keep up. He saw the silent circle, with gleaming eyes, lolling tongues, and silvery breaths drifting upward, closing in upon him as he had seen similar circles close in upon beaten antagonists in the past. Only this time he was the one who was beaten.

There was no hope for him. Buck was inexorable. Mercy was a thing reserved for gentler climes. He manoeuvred for the final rush. The circle had tightened till he could feel the breaths of the huskies on his flanks. He could see them, beyond Spitz and to either side, half crouching for the spring, their eyes fixed upon him. A pause seemed to fall. Every animal was motionless as though turned to stone. Only Spitz quivered and bristled as he staggered back and forth, snarling with horrible menace, as though to frighten off impending death. Then Buck sprang in and out; but while he was in, shoulder

on these legs. 三本足で立つて。(四つ這ひで on all fours)

loll. だらりと垂らす。

in the past. 過去に於て。

inexorable. 残忍。pitiless, merciless, unrelenting.

mercy was a thing reserved for gentler climes. 慈悲は、穏和な氣候の土地でこそ必要だが、こんな北地では、そんなことを言つてな

毛のスビツツは三本足で彼に立向つた。三度バツクは敵を倒さうとしたが、又前の計略を用ゐて、今度は右の前足をかみ碎いた。スビツツは苦痛もひどく、もう駄目だと思ひながらもなほ荒れ狂つて戦ひを続けやうともがいた。スビツツは沈黙せる圓陣が、眼を輝かし、舌をだらりと垂らして、銀色の息吹を吐きながら、圓陣を狭めて來るのを見た。スビツツは過去に於て、同じやうな圓陣が、斃された敵をめぐるつて、圓陣を狭めて餌物に迫つたのを見たことがある。たゞ、今度は、斃されたのが彼であつたことだ。

もうスビツツには勝目はなかつた。バツクは残忍だ。慈悲とは温暖地方の爲めに取つてある事に過ぎない。彼は最後の突進を下さうとした。圓陣は次第にくゞるやうに迫つて來て、遂に、ハスキーどもの息がスビツツの兩方の脇腹にも感じられるやうになつた。スビツツの向ふにも、兩側にも、今にも飛びかゝらうと身を屈めて、スビツツに眼を据へてゐるのが見える。そこに暫く間があつた。どの犬も皆な石になつて了つたやうに動かなかつた。たゞスビツツのみが身をぶるぶる震はし毛を逆立てゝゐた。そして前後によろめきながら、迫るところの死を追拂ふものゝやうに、恐ろしい威嚇の唸りを立ててゐた。その時、バツクはとび込んだり、とびのいたりした。しかし彼がとび込

たら、生きてはゐられない。clime (は country (with or without reference to climate)).

pause. 言葉と言葉の間に沈黙した時間、何事かの間に沈黙した時間。

while he was in. 飛び込んでゐる時は (sprang in の方の場合には)

had at last squarely met shoulder. The dark circle became a dot on the moon-flooded snow as Spitz disappeared from view. Buck stood and looked on, the successful champion, the dominant primordial beast who had made his kill and found it good.

squarely. 四角に、直角に、眞面目に、狃違はずに、斷乎として。
a dot. 一點。

んだ時に、遂に斷然、肩は肩に接した。影暗き圓陣は、洪水のやうに月光の流れた雪の上に、たゞ一點となつて、スピッツは全く眼界から見えなくなつて了つた。バツクは獨りこれを眺めて立つてゐた。優勝者として、またその敵を殺し、それに満足した支配慾ある原始的の野獸として。

found it good. 満足した。

IV

WHO HAS WON TO MASTERSHIP

“Eh? Wot I say? I spik true w'en I say dat Buck two devils.”

This was François's speech next morning when he discovered Spitz missing and Buck covered with wounds. He drew him to the fire and by its light pointed them out.

“Dat Spitz fight lak hell,” said Perrault, as he surveyed the gaping rips and cuts.

“An' dat Buck fight lak two hells,” was François's answer. “An' now we make good time. No more Spitz, no more trouble, sure.”

While Perrault packed the camp outfit and loaded the sled, the dog-driver proceeded to harness the dogs. Buck trotted up to the place Spitz would have occupied as leader; but François, not noticing

Wot I say? = what I say?

I spik true w'en I say dat Buck two devils = I speak true when I say that Buck two devils = I speak the truth when I say that that Buck is two devils.

drew him to.....に引きよせた。

pointed them out = pointed out the wounds.

Dat Spitz fight lak hell = that Spitz fights like hell.

四、誰が支配権を獲得したか

「どうでえ、え？俺が何といつたか覚えてるけえ？バツクの野郎あ恐ろしい奴だつて俺がいつたなあ、ほんとだらう」

翌朝、スピッツの姿が見えなくなつて、バツクがそこら中一面疵だらけになつてゐるのをフランソアが見て、かうペローにいつた。彼はバツクを火の側に引き寄せて、其の光りでもやられた、こゝにも傷があるといつて傷を検べた。

「スピッツの野郎あ猛烈にかみつきゃがるんだ」とペローはバツクの身體中に口をあぐりと開けてゐる裂傷や切傷を見ながら言つた。

「あのバツクと來たらそれどこちやあねえ、倍も猛烈にかみつきゃあがる。」とフランソアはいつた。「まあこれで安心だ。もうスピッツも居ねえし、もう面倒は起りつこねえ」

ペローがキャンプの道具を荷づくるひして、橇に積みこんでゐる間に、犬追のフランソアは犬たちに革具を付けはじめた。バツクは、スピッツが生きてゐたら占めるべきリーダーの場所にすたすたと出て行つた。然るにフランソアはバツクには氣も

gaping. あくびをしたやうに口開いた。

rips. 傷口。

cuts. 切傷。

sure. 確かに。

outfit = equipment 道具。

loaded the sled. 橇にのせた。

the place この次に which を補ふ。

him, brought Sol-leks to the coveted position. In his judgment, Sol-leks was the best lead-dog left. Buck sprang upon Sol-leks in a fury, driving him back and standing in his place.

"Eh? eh?" François cried, slapping his thighs gleefully. "Look at dat Buck. Heem keel dat Spitz, heen t'ink to take de job."

"Go 'way, Chook!" he cried, but Buck refused to budge.

He took Buck by the scruff of the neck, and though the dog growled threateningly, dragged him to one side and replaced Sol-leks. The old dog did not like it, and showed plainly that he was afraid of Buck. François was obdurate, but when he turned his back, Buck, again displaced Sol-leks, who was not at all unwilling to go.

In his judgment. 彼の判断によれば。according to his judgment. left. 残されたる。現存の。(死んだものを除き)。

slap. たたく。

thighs. 両方のふともも。

gleefully. たのしさうに。

Heem keel dat Spitz, heem t'ink to take de job=him kill that Spitz, him think to take the job=he will kill that Spitz, he thinks he will take the job.

Go 'way=go away.

chook. これは Hallo, Chuk! とか Say, Chik! などと云ひ、音だけで、どう音をあらはしてもいふものである。アメリカで云はれる言葉で相手の名前の代りにいふものである。

brdge=move.

scruff. Back of the neck as used to grasp and lift or drag animal or person by (take by the scruff of the neck). by the scruff of the neck 首根つこをつかんで。

つかず、誰しも望むその位置にソルレクスを連れて来た。フランスアの思ふところでは、スピッツが居なくなつて見れば、ソルレクスがリーダーとしては一番いゝといふのであつた。バックは猛然とソルレクスにとびかゝつて、彼を追ひのけた。そして、代つてその地位に立つたのである。

「何だ? 何だ?」とフランスアは陽気に面白さうに両手で太股をびちやりびちやり敲きながら、「あのバックの野郎を見るやい! スピッツを殺したなあ、あいつだ。あいつあ、スピッツの後釜をねらつてやがるんだ」

「あつちへ行け、奴さん」とフランスアはさげんだが、バックは其處を退かうともしなかつた。

フランスアはバックの首根つこをつかんで、バックを威嚇するやうに唸り立てゝるるにもかゝらず、彼の傍の方へ引きずり出した。ソルレクスを元の場所に置いた。老犬ソルレクスはそれを好まなかつた。明かに、彼はバックが恐ろしいといふ風を示したが、我意の強いフランスアはそれには一向構はなかつた。ところが彼が背中をこちらに向けると、バックはもうソルレクスを追ひ出して、ソルレクスは唯々としてそこを去つたのである。

to one side 傍へ。ステーションなどで、驛夫が荷物を運んで来る時、客によけて貰ふために one side! one side! といつて通る。

obdurate. 無情な、冷酷な、頑固な。

not at all. 少しも……でない。

by Gar=by God. フランスアがフランス系の英語をつかふので、By God を By Gar などと云はせてゐる。Shakespeare の The Merry Wives of Windsor の Doctor Caius は a French physician であるが、彼がしきりに By Gar をいふのが、なかしみの一つになる。たとへば By gar, me Villi kill de priest (Act II, Scene III), By gar, me tank you for dat (同上), By gar, he has save his soul, dat he is no come; he has pray his Pible Vell, dat be is not come. By gar, Jack Rugby, he is dead already, if he become (Act II, Scene III), By gar, he is de coward, Jack priest of de world (Act II, Scene III) とか、By gar, you are de coward, de Jack dog, John ape (Act III, Scene I) の如し。英語の文法がちがふところ、フランス人らしいのである。